松　葉　遺　跡

－中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査－

1994

長岡市教育委員会

松葉遺跡発掘調査範囲の全景

序

この報告書は、中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う松葉遺跡の発掘調査の記録です。

松葉遺跡は、平成4年度の長岡市内遺跡発掘調査で確認された遺跡です。今回の発掘調査で、縄文時代や古代・中世・近世の土器や木製品などの遺物と、建物跡や井戸跡それに墓地などの遺構が発見され、栖吉地区の歴史を調べる上で貴重な資料を得ることができました。中でも「文明」という年号が書かれた木片は、遺跡の年代を考える上で、注目される出土品です。

今回の調査の成果、特に中世の資料は、栖吉川を挟んで対岸にある三貫梨遺跡の調査成果と並んで、栖吉城跡を中心とする栖吉地区、ひいては長岡市の中世史の解明に一つの手がかりを与えてくれるものと思います。

この記録が、地域の埋蔵文化財に対する理解と認識を深め、また学術研究に活用されることを願っております。

今回の調査にあたり、御指導・御協力をいただきました新潟県教育庁文化行政課をはじめ関係各位に対し、心からお礼申し上げます。

平成6年3月

長岡市教育委員会

教育長　大　西　厚　生

例　　言

1．本書は、新潟県長岡市栖吉町字清水田に所在する松葉（まつば）遺跡の発掘調査記録である。

2．発掘調査は、中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う調査（調査対象面積約3500㎡）であり、長岡市教育委員会が調査主体となって、平成５年５月12日から８月20日に現地調査を実施し、平成５年11月１日から平成６年３月25日に報告書作成のための整理作業を行なった。

3．調査に要した経費は、市の単独事業費の他、国庫及び県費の補助金の交付を受けた。

4．発掘調査の体制は、次のとおりである。

調査主体：長岡市教育委員会（教育長　大西厚生）

調査担当：小熊博史（科学博物館学芸員）　調 査 員：小林伸治（社会教育課文化振興係主事）

事 務 局：松井登喜男（社会教育課長）・星　　勇（社会教育課課長補佐）

駒形敏朗（社会教育課文化振興係長）・恩田一裕（文化振興係主査）

山田あゆみ（文化振興係主事）・須藤　聡（文化振興係主事）

5．発掘調査で出土した遺物及び図面・写真等の調査記録は、長岡市教育委員会が保管している。出土遺物の注記は、遺跡略号をMTとし、取上番号、出土区（または遺構番号）、層位の順で記入した。

6．本書の編集は、小熊が担当した。図版の作成は、小熊が広井造（科学博物館学芸員）の協力を得て行ない、整理作業員の佐藤由美子・福島恵子・小林房子・大矢実代子がこれを補助した。執筆は、Ⅳ－３―(3)①～④を広井が分担し、Ⅳ－３―(4)を除くその他は小熊が行なった。Ⅳ－３―(4)①～⑭については、高橋正志氏（日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学研究室）から、出土人骨の鑑定結果をいただいた。なお、中世・近世遺物の認定については、鶴巻康志氏（新発田市教育委員会生涯教育課）の御協力と御助言をいただいた。

7．本文中の引用文献は、著者名と発行年を［　］で示し、巻末に一覧を収めた。

8．挿図のうち、地形図等で方位の記入のないものは真北を上にそろえた。また、遺構図等の方位はすべて磁北をあらわし、遺構個別図内の矢印（先端が磁北）も方位を示す。

9．遺構は、種別ごとに次の略号を使用し、一連の番号を付した。柱穴：P、杭：K、建物：SB、土坑：SK、溝：SD、井戸：SE、墓坑：G、道：SF、性格不明遺構：SX。

10．収録した遺物の番号は通し番号とし、挿図と巻末写真の番号を一致させた（杭・木柱及び人骨は写真のみ）。挿図の遺物番号には、（　）で出土区・出土遺構名を付記した。

11．発掘調査には、地元栖吉町及び御山町・東片貝町の方々約40名から、調査作業員として参加していただいた。また調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々・機関から多大な御協力と御教示をいただいた。記して感謝申し上げたい（五十音順、敬称略）。

青木佐太雄・阿部洋輔・稲川明雄・金子　達・神林昭一・剣持利夫・佐々木謙昌・ＪＡ栖吉支所・栖吉地区公民館・栖吉圃場整備協議会・高橋保・田中耕作・鶴巻康志・戸田文一・中村祥一・鳴海忠夫・新潟県教育庁文化行政課・西山邦夫・広野耕造・藤木久志・ふるさと体験農業センター・水沢美徳・山崎　進・吉沢俊夫

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の環境 …… 2
1．遺跡の位置と地形 …… 2
2．遺跡周辺の歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の方法と経過 …… 4
1．調査の方法 …… 4
2．調査の経過 …… 4

Ⅳ　調査の結果 …… 5
1．層　序 …… 5
2．遺　構 …… 5
(1)東地区 …… 5
(2)西地区 …… 14
3．遺　物 …… 18
(1)出土遺物の概要 …… 18
(2)縄文時代の遺物 …… 20
①縄文土器（20）　②土製品（24）　③石器類（24）
(3)古代・中世・近世の遺物 …… 24
①須恵器（25）　②中世陶磁器・土器（25）　③近世陶磁器（31）
④採集資料（31）　⑤木製品（31）　⑥石製品（34）
⑦鉄製品（34）　⑧銅製品（36）　⑨銭貨（36）
(4)出土人骨の鑑定 …… 36

Ⅴ　まとめ …… 38
1．縄文時代 …… 38
2．古　　代 …… 38
3．中　　世 …… 39
4．近　　世 …… 42
引用・参考文献一覧 …… 42

写真図版 …… 43～58

挿図目次

図１．調査地の位置 …… 1
図２．松葉遺跡周辺の地形 …… 2
図３．栖吉周辺の遺跡分布 …… 3
図４．調査区の設定 …… 5
図５．調査区の層序 …… 6
図６．調査区全体図 …… 7
図７．東地区平坦部全体図 …… 9
図８．東地区の遺構 …… 10
図９．東地区墓坑群全体図 …… 12
図10．東地区の墓坑(1) …… 13
図11．東地区の墓坑(2) …… 14
図12．西地区西半部全体図 …… 16
図13．西地区の遺構 …… 17
図14．縄文土器の分布状況 …… 18
図15．中世陶磁器・土器の分布状況 …… 18
図16．出土遺物(1)－縄文土器－ …… 21
図17．出土遺物(2)－縄文土器・土製品－ 22
図18．出土遺物(3)－石器類－ …… 23
図19．出土遺物(4)－須恵器・中世陶磁器－ 26
図20．出土遺物(5)－中世陶磁器－ …… 27
図21．出土遺物(6)－中世陶磁器－ …… 28
図22．出土遺物(7)－中世陶磁器・土器－ 29
図23．出土遺物(8)
－中世陶磁器・土器、近世陶磁器－ 30
図24．出土遺物(9)－木製品－ …… 32
図25．出土遺物(10) －木製品－ …… 33
図26．出土遺物(11)
－石製品・鉄製品・銅製品・銭貨－ 35
図27．出土遺物(12)－人骨－ …… 37

挿表目次

表１．墓坑の形態一覧 …… 12
表２．出土遺物の内訳 …… 19
表３．中世の栖吉の動向 …… 41

写真目次

写真１．遺跡の景観と発掘状況 …… 43
写真２．東地区の完掘状況 …… 44
写真３．西地区の完掘状況 …… 45
写真４．東地区の遺構 …… 46
写真５．東地区の遺構（墓坑） …… 47
写真６．東地区の遺構（墓坑） …… 48
写真７．西地区の遺構 …… 49
写真８．遺物の出土状況 …… 50
写真９．出土遺物（１～44） …… 51
写真10．出土遺物（45～79） …… 52
写真11．出土遺物（80～112,146～156）… 53
写真12．出土遺物（113～145） …… 54
写真13．出土遺物（157～184） …… 55
写真14．出土遺物（185～204） …… 56
写真15．出土遺物（205～250） …… 57
写真16．出土遺物（253～262） …… 58

Ⅰ　調査に至る経緯

長岡市では、平成３年度から栖吉町周辺を対象に、水田改良を主目的とする「中山間地域農村活性化総合整備事業」を進めている。事業予定地内には、周知の遺跡が点在することから、長岡市教育委員会（担当：社会教育課）では、事前に協議資料を作成することを目的として、平成３～４年度の２か年にわたり、関連諸遺跡の確認調査を実施することになった。

松葉遺跡は事業予定地内に所在する遺跡の一つで、土器や石器を出土する場所として地元では古くから知られていたが、確認調査前までは未周知の遺跡であった。遺跡発見の契機となったのは、長岡市企画調整部市史編さん室が平成３年に行なった考古資料調査で、栖吉町水沢信二氏の採集資料を調査した際、遺跡の所在を初めて確認した。

松葉遺跡の確認調査は、平成４年度に実施され、その結果、①遺跡全体の範囲は不明であるが、事業予定地にかかる部分については、ほぼ全域に広がっていること、②出土遺物からみて、遺跡は縄文時代（早期・中期）及び古代（奈良）・中世（15世紀頃）の集落跡であること、などが報告された［駒形1993］。その後、事業計画が具体化するに伴い、遺跡の範囲約3500m²（図１網点部）が市道建設部分を含む圃場整備事業地にかかることになった。長岡市教育委員会では、事業担当部局である長岡市農林整備部農林整備課及び新潟県教育庁文化行政課と協議の上、工事にかかる範囲について、平成５年度に発掘調査を実施し、記録保存することにした。

図１．調査地の位置（１／5,000、網点部は調査範囲）

II 遺 跡 の 環 境

1．遺跡の位置と地形（図１・２）

新潟県のほぼ中央に位置する長岡市は、市域中央の平野部に信濃川が北流し、その東西には丘陵が連なっている。東側の丘陵は通称「東山丘陵」（魚沼丘陵の一部）と呼ばれ、その丘陵沿いに栖吉町がある。松葉遺跡は栖吉集落の南西側で、信濃川支流の栖吉川左岸に立地する。信濃川から遺跡地までの直線距離は約５km、栖吉川との距離は約250ｍ。調査地点の標高は約57～61ｍで、遺跡付近の現況は水田、畑、牧草地となっている。

国土地理院発行の土地条件図の区分（図２）によれば、栖吉町周辺には扇状地及び緩扇状地が広がっている。信濃川西側では丘陵沿いに河岸段丘が発達している地形に対し、東山丘陵沿いは栖吉にみられるように、山麓から流れ出る小河川によって谷口扇状地が形成されている地域が多い。遺跡付近は、扇状地面より一段高まっており、山麓堆積地形の土石流段丘（土石流による堆積物が侵食化され、段丘化した地形）に相当する。

遺跡の東側には「物入沢」と称される大規模な沢が延び、西側も沢状の地形を呈している。また、北側の扇状地には水田が広がり、南側は東山丘陵から派生する低丘陵に続く。遺跡の範囲は、おそらく、東西の沢に挟まれ、さらに北側の扇状地と南側の低丘陵に区切られた平坦部一帯に広がっているとみられる。平坦部は南側から北側にかけて緩く傾斜し、調査地点はその先端部にあたる。

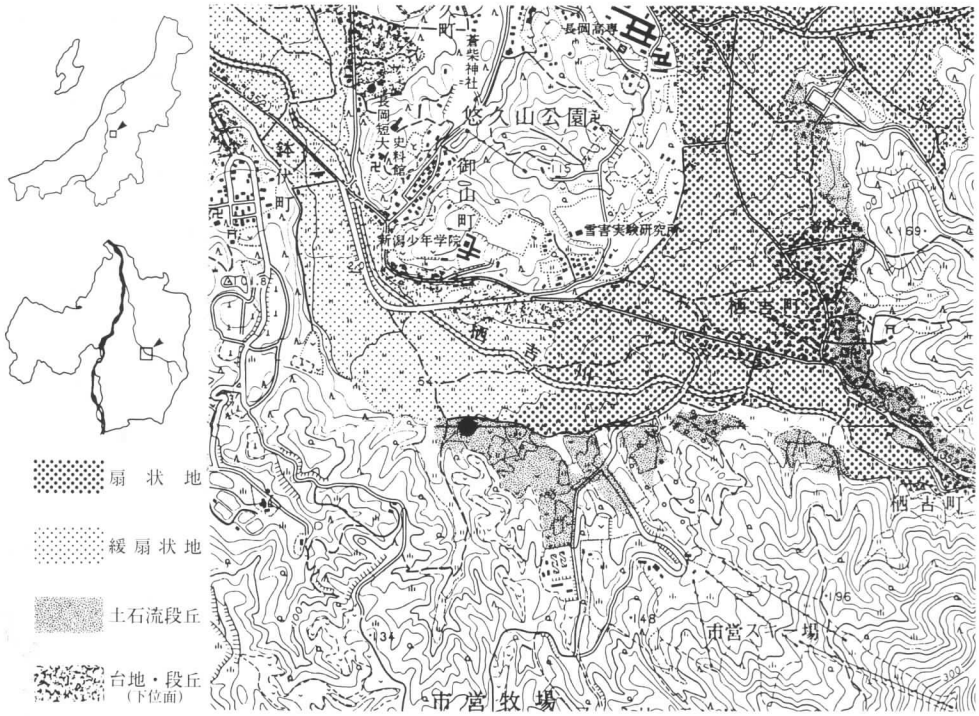


図２．松葉遺跡周辺の地形（国土地理院発行１／25,000地形図「栃尾」・「半蔵金」を使用、地形区分は「土地条件図」による。黒丸は松葉遺跡を示す。）

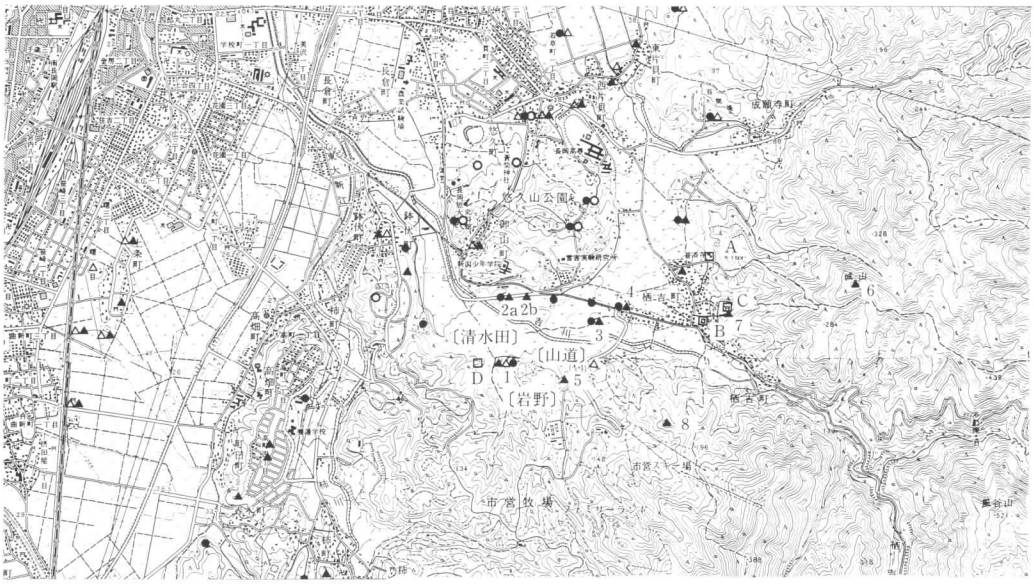


図３．栖吉周辺の遺跡分布（国土地理院発行１／25,000地形図「栃尾」・「半蔵金」・「長岡」・「片貝」を１／50,000に縮小、●＝縄文、○＝弥生、△＝古代、▲＝中世の遺跡、□＝寺社等を示す。）

1. 松葉、2a. 三貫梨（墳墓群）、2b. 三貫梨（館跡）、3. 中道、4. 大明神、5. 大行寺、6. 栖吉城跡、7. 栖吉支城跡、8. 新田山砦跡、A. 普済寺、B. 善照寺、C. 栖吉神社、D. 一本杉

２．遺跡周辺の歴史的環境（図３）

栖吉周辺には、縄文時代から中世に至る遺跡が多数確認されている。松葉周辺の主な遺跡としては、栖吉川を挟んで北側の対岸に、中世の墳墓群や集落跡が検出された三貫梨遺跡があり、栖吉集落西端側の水田中には、縄文時代及び中世の遺物が多量に出土した中道遺跡や大明神遺跡などが分布する。また集落背後の東山丘陵上には、大規模な縄張をもつ中世の山城、栖吉城跡が控えている。

「栖吉」の地名は、室町時代以降のいくつかの史料上にあらわれ、中世の栖吉が高波保の上条といわれる地域に属していたことがわかる。越後守護上杉氏の有力被官で、古志郡を在地支配した古志長尾氏は、南北朝時代に信濃川縁の蔵王堂を本拠としていたが、室町期後半には栖吉周辺に勢力をのばしていた。15世紀末から16世紀にかけての時期には、古志長尾氏は本拠を栖吉に移し、現在の集落景観に近い城下集落を形成したとみられる。栖吉一帯は、中世、特に室町時代から戦国時代にかけて、古志郡の中でも政治・経済の中核的な地域であった。近世では長岡藩領栖吉村、近代には周辺の９か村を合併して古志郡栖吉村となり、その後、長岡市に合併されて現在に至っている。

現在の栖吉町は約300世帯で集落を構成し、風谷・入村・大門・原町・中町・善応寺の組名が残る。町内の寺院には、曹洞宗の普済寺、浄土真宗の善照寺及びその塔頭の通善寺・正門寺がある。神社は現在、栖吉神社に統合されているが、明治期には守門（巣守）・羽黒・白山・諏訪・住吉社等の多数があった。また集落の東南には、修験道と深く関わる風谷山（風谷薬師）が位置している。

遺跡名の「松葉」は俗称地名で字清水田にあり、字山道と字岩野の境界に接する付近にあたる。その他、松葉周辺の地名としては、西側の「物入沢」を挟んで「一本杉」があり、守門社がまつられていたという。また、字岩野の市営牧場入り口付近には「大行寺」の俗称地名が残り、普済寺の前身の寺院名と共通する。「大行寺」からは中世の遺物（30ページ図23－182）も採集されている。

III 調査の方法と経過

1．調査の方法

調査区の設定（図４）　調査対象範囲の東南端に任意に設定した点（0a）を基準に、対象範囲をほぼ東西に横切るライン（aライン）とそれと直交する南北ライン（0ライン）を座標軸として、２×２ｍのメッシュを設定した。南北ラインは磁北に対して、ほぼN－２°－Eである。発掘区（グリッド）は、２×２ｍを単位（名称は南西コーナーを優位）として、遺物の取り上げ等はこれに従った。標高は整備事業工事区内のベンチマーク（県立長岡大手高校付近の地盤変動基準点NA14が原点）を使用した。

なお、調査対象範囲内では、東半の畑部と西半の水田部で高低差があり、地形的に区分される景観を呈していたことから、40ライン付近を境として、畑部を「東地区」、水田部を「西地区」と称することにした。

発掘の方法　発掘の方法としては、まず東地区（畑部）では表土（Ｉ層）中にも遺物が混在する状況から、人力による発掘を行ない、遺構や遺物の検出に努めた（排土の移動等にはベルトコンベアを使用）。西地区（水田部）については、現況及び確認調査の結果から、地表面に広く耕作の影響が認められ、また遺物もほとんど含んでいないため、表土（水田耕作土、Ｉ層）をバックホーで除去し、周囲に排水溝を掘削した後、II層以下の遺物包含層から人力で発掘を進めた。

出土遺物は、原則として２×２ｍの発掘区単位及び遺構ごとに取り上げ、層位等を記録した。調査範囲内の土層序は、地点によって著しい差異は認められなかったため、東地区では東西方向の横断面、西地区では南北方向の横断面を残しながら確認した。

2．調査の経過

発掘調査に要した期間は、平成５年５月12日から８月20日までの実質約50日間で、経過の概略は以下のとおりである。

５月12日～20日	プレハブ・ベルトコンベア・発掘用具・測量機材等の搬入、基本杭の打設
５月20日	東地区北側（畑低位部）から発掘作業開始
５月26日	東地区南側（畑高位部）を中心に発掘作業継続
５月28日	東地区南側の遺構確認及び遺構発掘開始（ピット群、溝、井戸、墓坑など）
６月２日	東地区南側の遺構精査継続と併せて、東端部（０ａ～15ａ付近）を発掘
６月３日	東地区の遺構精査継続（墓坑群周辺他）、バックホーによる西地区の表土除去
６月４日	東地区の発掘作業はほぼ終了（測量作業は継続）、西地区の排水路設定作業開始
６月16日	西地区の発掘作業開始（40～60ライン間付近）
７月１日	西地区の発掘作業継続（60～90ライン間付近）
７月22日	西地区全体の発掘作業継続、遺構精査（ピット群、溝、井戸等）、清掃作業
８月４日	発掘作業終了、発掘用具等の搬出
８月９日～20日	調査区全体の写真撮影、西地区の測量補足作業

Ⅳ 調 査 の 結 果

1．層序（図５）

発掘調査地は段丘の先端部にあたるが、東地区（畑部）と西地区（水田部）では高低差が認められた。調査前の地形は、東地区が西地区よりも約２～４ｍ低い状況で、発掘後に確認された地山上面の傾斜もほぼ同様の状況を示していた（図６エレヴェーション参照）。東西方向は、東地区と西地区の境界付近で階段状（耕作に伴う削平の段差）に低くなり、さらに西側に向かって緩く傾斜する。また南北方向は、東西地区ともに北側に傾いている。

調査地内で確認された基本的な堆積土層は、東地区と西地区では色調等やや異なるが、ほぼ同様の構成である。Ⅰ層は表土で、東地区は畑の耕作土、西地区は水田の床土。Ⅱ層は褐色～黒褐色土の遺物包含層で、縄文時代や中世などの遺物が混在していた。色調や礫・地山粒の混入具合によって細分可能。西地区では粘性があり、部分的に有臭の腐食質土壌（Ⅱ７）が認められる。Ⅲ層は地山で、土石流段丘の基盤を反映して、地点によって差異がみられる。東地区では、黄褐色粘土と黄褐色砂質土が観察され、部分的に礫を多く含む。西地区は黄褐色～青灰色砂質土で、特に東半域の地山上面には広範囲に多量の礫が露出していた。また、西半域には暗渠配管が設けらてれおり、部分的ではあるが地山上面まで耕作の影響が及んでいる。なお、各土層の性状は図５に記した。

2．遺構（図６～13，表１、写真２～７）

縄文時代及び中世に関わる遺構が検出された。東地区には、ピット群、土坑、溝、井戸、墓坑群、道跡などがあり、西地区では、ピット群、建物跡、杭群、土坑、溝、井戸などが確認されている。以下、地区別に各遺構について記載する。

⑴東地区（図７～11，写真２・４～６）　23～39・ａ～ｆ区域の平坦部には縄文時代及び中世のピット群、土坑、溝、井戸、道跡などが分布し、34～38・ｈ～ｍ区域では中世の墓坑群がまとまって検出された。

ピット群（図７・８）　柱穴状の遺構は約30基で、径25～80・深さ15～40cm程度。概して、包含

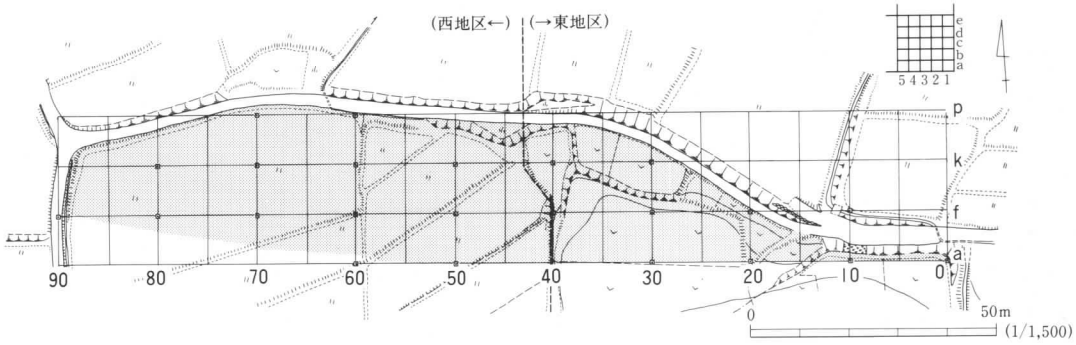
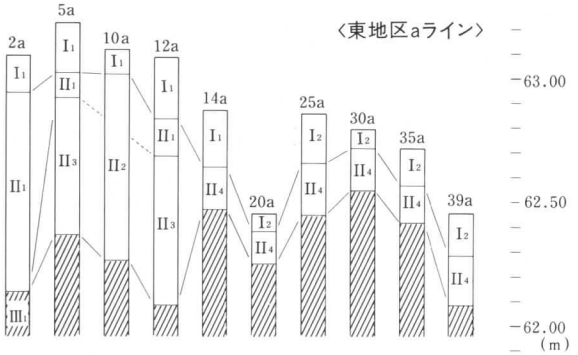
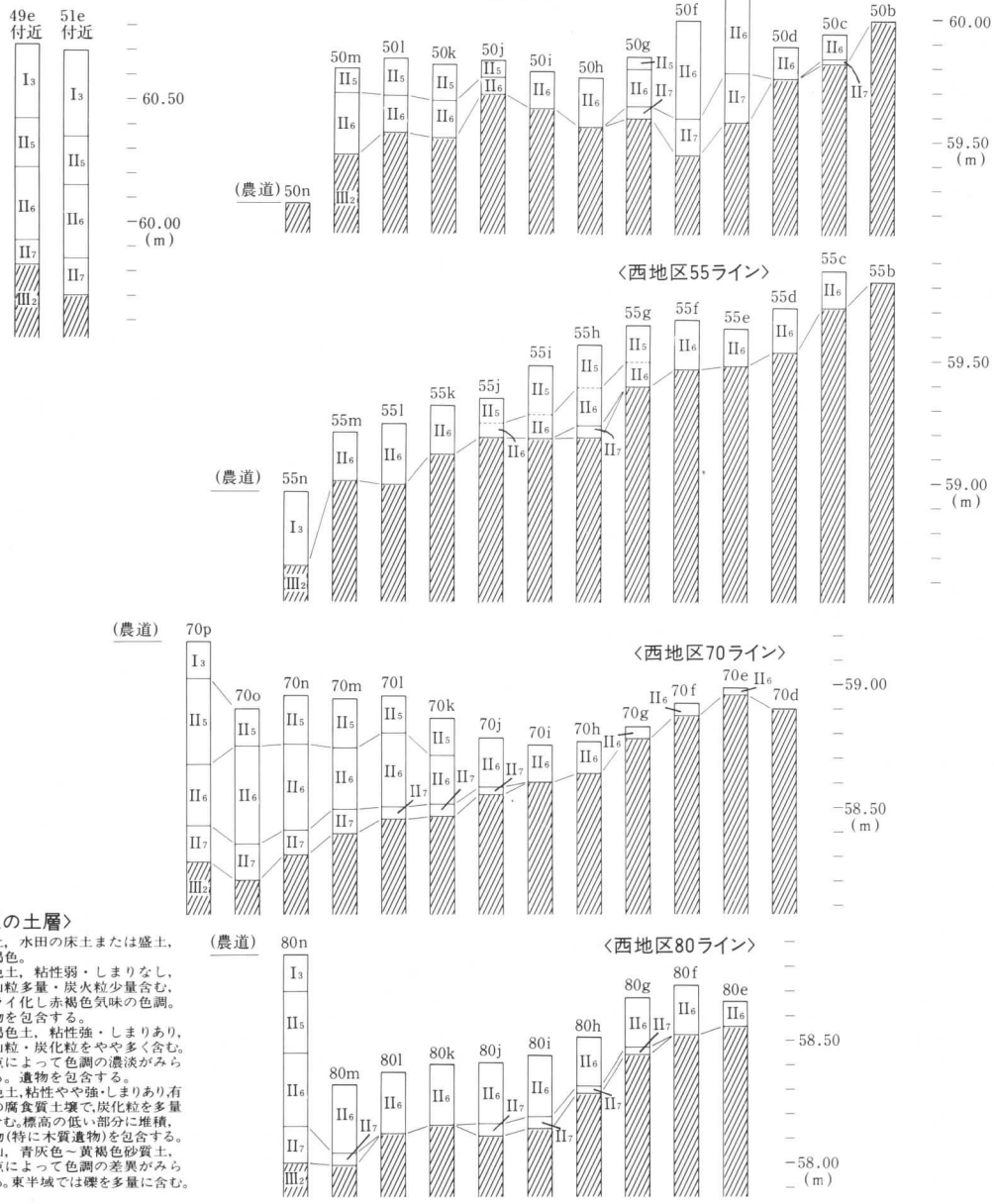


図４．調査区の設定（１／1,500、網点部は調査範囲）



〈東地区の土層〉

Ⅰ1層：表土，畑の耕作土，黒色でⅠ2層より黒味が強い，0～20ライン間に分布する。
Ⅰ2層：表土，畑の耕作土，黒褐色で20～40ライン間に分布する。
Ⅱ1層：多量の黄褐色地山ブロック，少量の黒褐色土が混在，部分的に礫を多く含む。耕作による攪乱を受けている。遺物を包含する。
Ⅱ2層：黒褐色土，粘性弱・しまりなし，炭化粒少量含む。遺物を包含，10ライン付近に分布する。
Ⅱ3層：黒褐色土，人頭大の礫を多量に含む。遺物を包含，5ライン付近に分布する。
Ⅱ4層：褐色土，地山粒少量・炭火粒少量を含む。遺物を包含，20～40ライン間付近に分布する。
Ⅲ1層：地山，黄褐色土，0～20ライン間付近では粘性のある黄褐色粘土で，部分的に礫を多く含む。20～40ライン間付近では黄褐色砂質土で，部分的に礫を多く含む。



〈西地区の土層〉

Ⅰ3層：表土，水田の床土または盛土，灰褐色。
Ⅱ5層：褐色土，粘性弱・しまりなし，地山粒多量・炭火粒少量含む，グライ化し赤褐色気味の色調。遺物を包含する。
Ⅱ6層：黒褐色土，粘性強・しまりあり，地山粒・炭化粒をやや多く含む。地点によって色調の濃淡がみられる。遺物を包含する。
Ⅱ7層：黒色土，粘性やや強・しまりあり，有臭の腐食質土壌で，炭化粒を多量に含む。標高の低い部分に堆積，遺物(特に木質遺物)を包含する。
Ⅲ2層：地山，青灰色～黄褐色砂質土。地点によって色調の差異がみられる。東半域では礫を多量に含む。

図5．調査区の層序

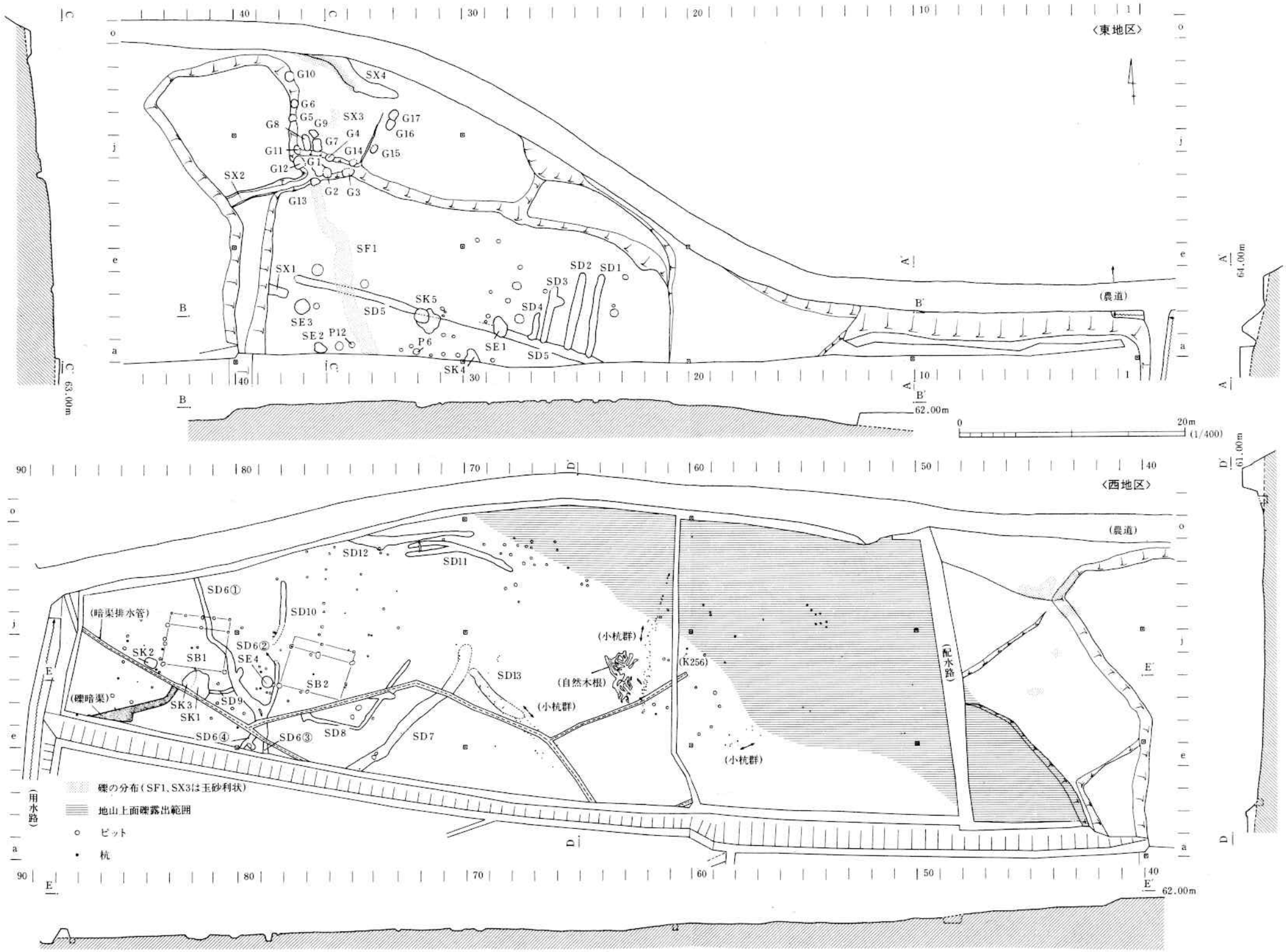


図6．調査区全体図（1／400）

層除去後の地山上面は、砂礫混じりの土壌で崩れやすく、耕作による攪乱もあって、ピットの形態を識別しがたい状況であった。P 6は柱痕を残す例で、長径50・短径40・深さ25cm。断面中央には、柱痕を示す幅約25cmの黒色土が観察された。覆土には縄文時代中期の土器細片と焼礫を含む。一方、P 12は柱痕が不明瞭なピットで、長径45・短径40・深さ40cm。覆土は、地山粒混入気味の黒色土で遺物は含まない。その他のピットの多くは、P 12に近い覆土の様相を呈していた。確認されたピット群の配置から、具体的な規則性を見いだすことはできなかったが、掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが南側の未発掘域に広がっている可能性が高い。

土坑（図８）　２基（SK４・SK５）を検出。30ａ区に位置するSK４は、検出した範囲の上面径150・底面径120・深さ30cm。南半は未発掘域にかかるが、平面円形あるいは楕円形とみられる。黒褐色の覆土には多数の縄文土器破片（図16・17－14・33・43・53）や石器（図18－66）を含む。32～33・ｂ～ｃ区のSK５は、長径225・短径170・深さ60cmの不整形な大形土坑。底面の形状からは、２基の土坑が複合していた可能性もある。覆土は黒褐色で、縄文土器破片（図16－９）を含んでいた。SK４・SK５ともに縄文時代の土坑とみられる。

溝（図７）　５条（SD１～SD５）を検出。SD１～SD４は25～27・ａ～ｅ区付近にあり、北東－南西方向に並列している。SD１は長さ730・幅55～65・深さ25cm、SD２は長さ570・幅60～80・深さ20cm、SD３は長さ500・幅50～65・深さ25cm、SD４は長さ240・幅40～60・深さ15cm。いずれの南西端部もSD５にかかる。その切り合い関係は明確ではないが、SD５より新しい時期の構築か。SD５は25～38・ａ～ｅ区

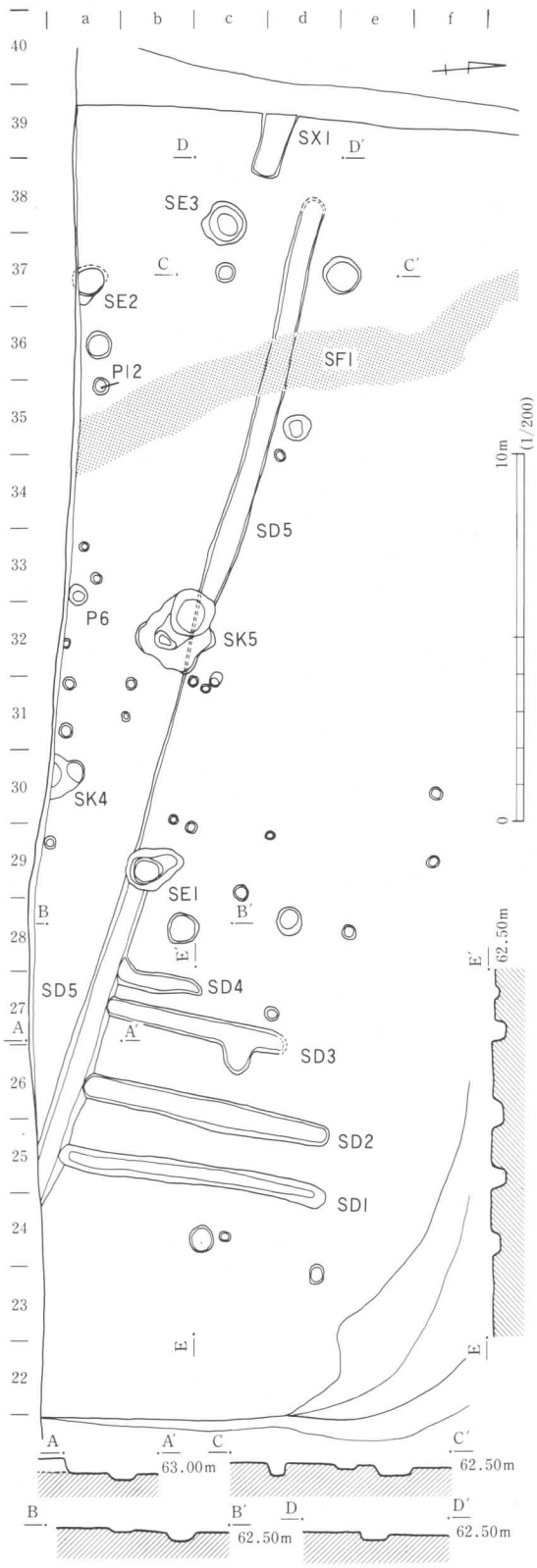


図７．東地区平坦部全体図（22～40・ａ～ｆ区）

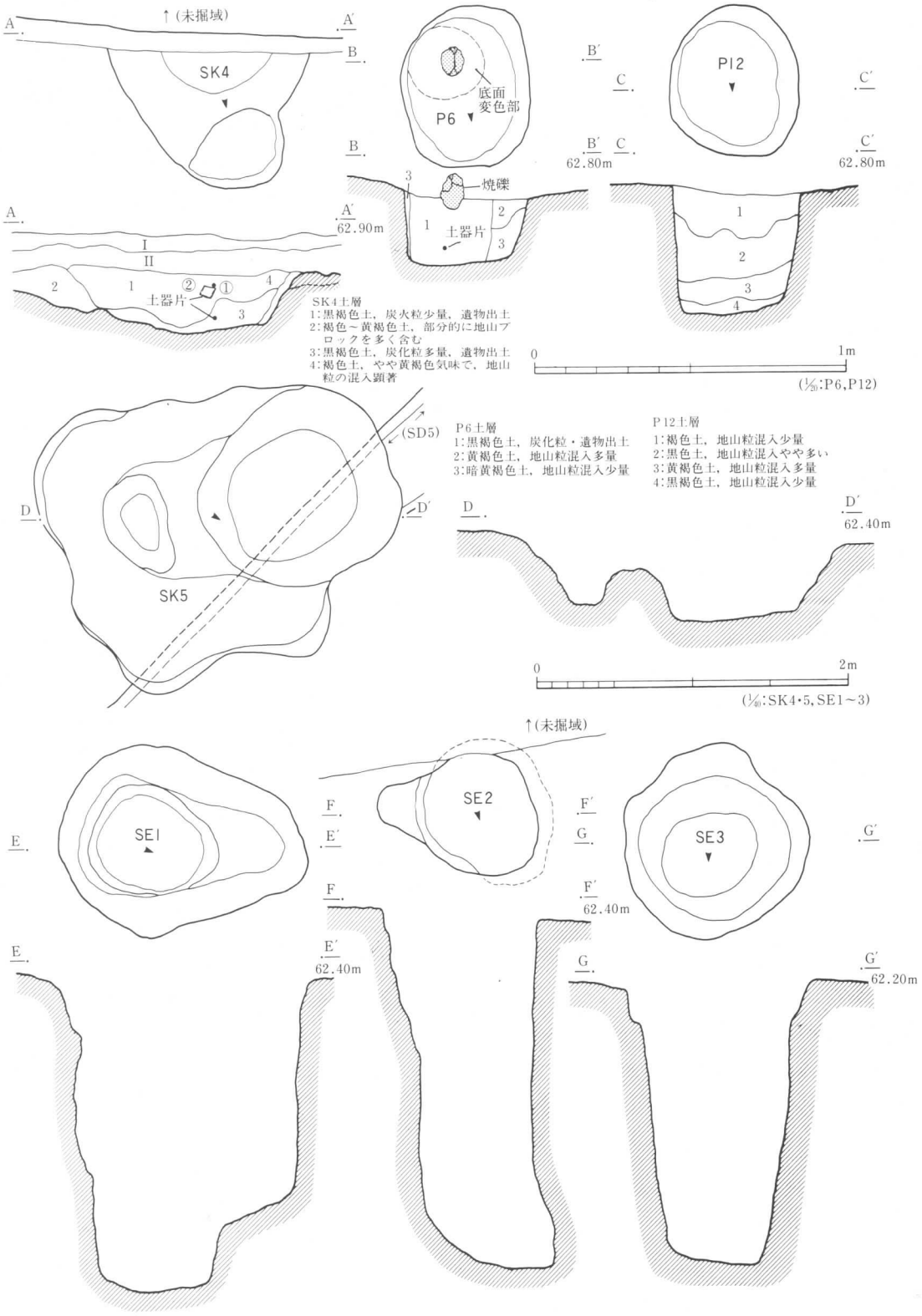


図8．東地区の遺構（SK4・SK5、P6・P12、SE1～SE3）

で、北西－南東方向に延びて、南東部は未発掘域に続く。長さ27ｍ、幅60～90・深さ10～20cm。井戸SE１と土坑SK５との間付近では、深度が浅くなり痕跡は不明瞭で、切り合い関係も不明。各溝の覆土は黒褐色で、縄文土器及び中世陶磁器細片が少量出土した。いずれも中世に関連する遺構とみられるが、その性格は明らかでない。

井戸（図８）　３基（SE１～SE３）を検出。29・ｂ～ｃ区に位置するSE１は平面長楕円形で、上面径120～160・底面径55～65・深さ195cm。下部にはテラス状の段を形成する。覆土は黒褐色土に地山黄褐色土のブロックが混在し、上層部に縄文土器及び珠洲焼破片（図20－115・122・125）少量、下層部に石鉢（図26－217）、焼礫、漆器（図24－186）等を含む。37・ａ～ｂ区のSE２は平面不整円形で、上面径75～110・底面径80～100・深さ225cm。覆土は黒褐色土と黄褐色土が混在し、上層部に縄文土器及び中世陶磁器破片（図19－97）少量、下層部に木片少量を含む。37～38・ｃ～ｄ区のSE３は平面不整円形で、上面径110～125・底面径50～65・深さ175cm。覆土は黒褐色土と黄褐色土が混在、上層部に縄文土器破片少量及び石槍片（図18―64）、下層部にも縄文土器破片少量を含む。SE１～SE３のいずれも素掘りの井戸で、中世期に構築されたものと考えられる。

墓坑群（図９～11，表１，写真５・６）　17基（G１～G 17）を検出。34～38・ｈ～ｍ区付近で、北東側に開いた「コ」の字状に分布し、そのほとんどが地山上面の傾斜が変換する部分に構築されている。地山の傾斜変換部は畑の境界に対応することから、墓坑群の上部は畑の段をつける際、すでに削平されている可能性が高い。各墓坑の形態や規模等の詳細は表１に示したとおりで、平面形には、円形、楕円形、長方形の形態が認められる。上面径は１ｍ前後のものが多く、G１が最大、G５が最小の規模である。深度は確認面から30cm前後を測り、削平の著しいものは10cm程度で、底面付近だけが残存している。覆土は概ね黒褐色土と地山黄褐色土が混在した性状で、炭細片や焼土粒を多く含む。G２の底面には長さ20～40cm程度の偏平な礫６点、G５の底面には約20cmの礫１点が残されていた。覆土に人骨が残存していた墓坑は、G１・G３・G４・G５・G７・G 12の６基で、特にG４とG７の出土量が多い。鑑定の結果（36ページ参照）では、いずれも火葬骨である。墓坑内に焼成の痕跡を残すものはG７のみで、底面及び側壁が被熱で赤褐色に変色、硬化している。覆土の状況から複数回（２～３回）の焼成が行なわれたと推測される。鑑定では１個体分の人骨が出土。おそらく墓坑内で火葬した後に埋葬した可能性が高い。その他の墓坑には焼成の痕跡は認められず、別地点で火葬後、骨を埋葬したと考えられる。また、G１とG５からは銭貨（図26－239・240）が出土し、埋葬時の風習を示している。墓坑群は、形態や銭貨を埋納する状況などから、中世期の墓域として位置づけられる。その他、G１付近から南西方向に続く溝状遺構（SX２）、墓坑群中央の空間に残る礫群（SX３）、北側の溝状遺構（SX４）、南側の平坦部に延びる道跡（SF１）があり、墓域に関連するものか。

道（図７）　１か所（SF１）を検出。地山上面に直径１～10cm程度の玉砂利を敷き詰めた部分を道跡と認定した。幅100～140cm・長さ15ｍで、35ライン付近をほぼ南北方向に延びる。その南端部は未発掘域に続き、北端部は墓坑群の手前（37 h区付近）で途切れている。SD５と交差するが、その切り合い関係は不明。道のライン自体は明治期作成の地籍図に記された旧道や畑境界とも異な

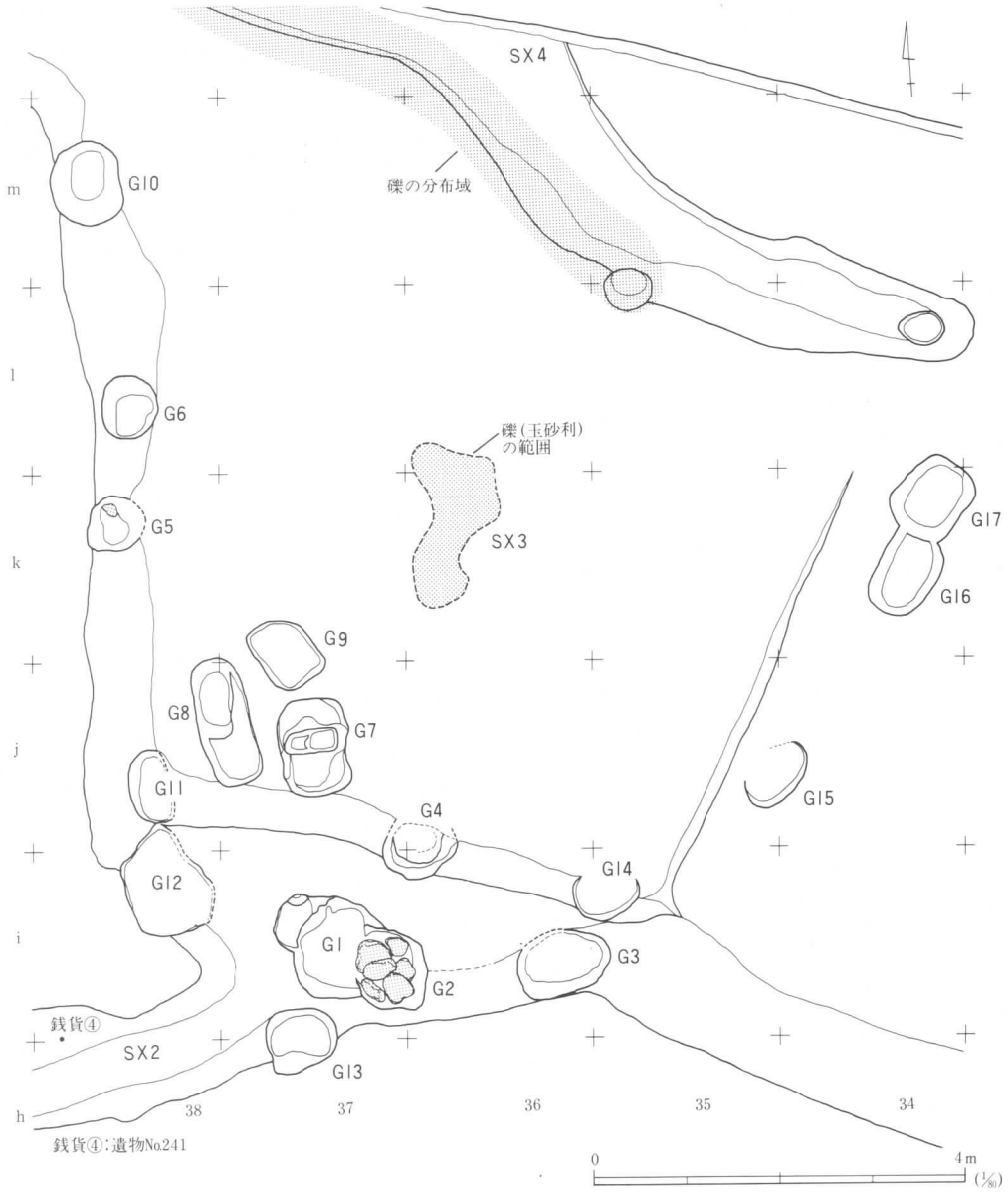


図９．東地区墓坑群全体図（33～38・h～n区）

表１．墓坑の形態一覧　　（数値の単位はcm、上面径・底面径は長軸×短軸の最大値、＋は削平部を示す）

番号	平面形	上面径	底面径	深度	伴出遺物等	番号	平面形	上面径	底面径	深度	伴出遺物等
G１	楕円形	130＋×110	80＋×85	35	銭貨1、火葬骨少量	G９	長方形	80×60	70×50	10	
G２	楕円形	100＋×80	70＋×65	35	礫６、切り合いG１より新しい	G10	円形	90×75	40×35	35	
G３	楕円形	110×60＋	85×50＋	30	火葬骨少量	G11	楕円形	80×35＋	70×25＋	25	
G４	円形？	80×60＋	40＋×30＋	30	火葬骨多量	G12	長方形	120×80	110×70	40	火葬骨少量
G５	円形	60＋×55	45×20	30	銭貨1、礫1、火葬骨少量	G13	円形	80×75	60×40	35	
G６	円形	70×60	50×35	50		G14	円形？	65×35＋	60＋×25＋	35	
G７	長方形	105×70	100×60	15	火葬骨多量、側底面被熱	G15	楕円形	80×35＋	70×25＋	15	
G８①	長方形	120＋×55	110＋×45	20	}２基重複か	G16	楕円形	85＋×65	75＋×40	15	切り合いG17より古い
G８②	楕円形	85＋×45	60×30	35		G17	長方形	90×70	70×50	15	切り合いG16より新しい

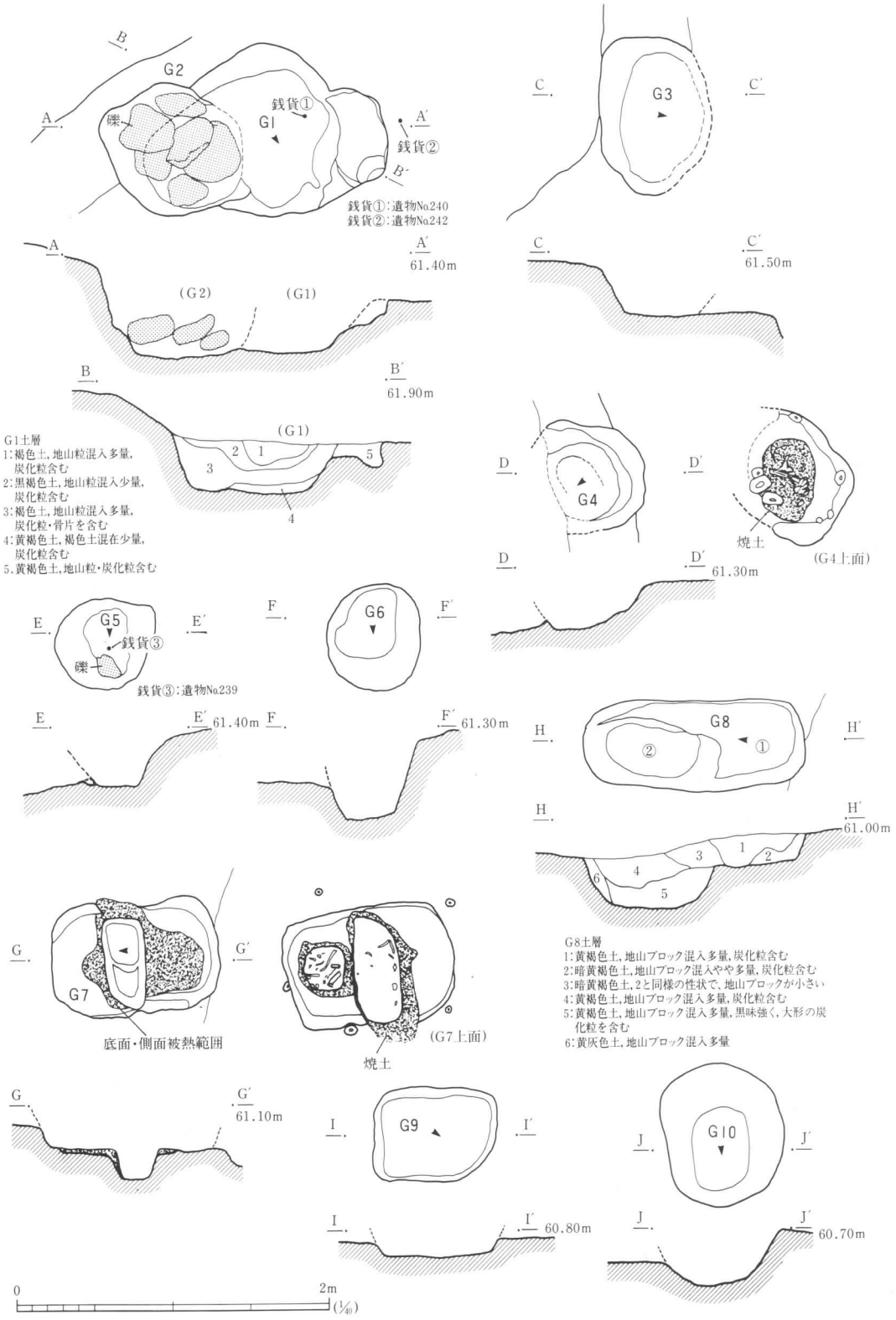


図10. 東地区の墓坑(1) (G1～G10)

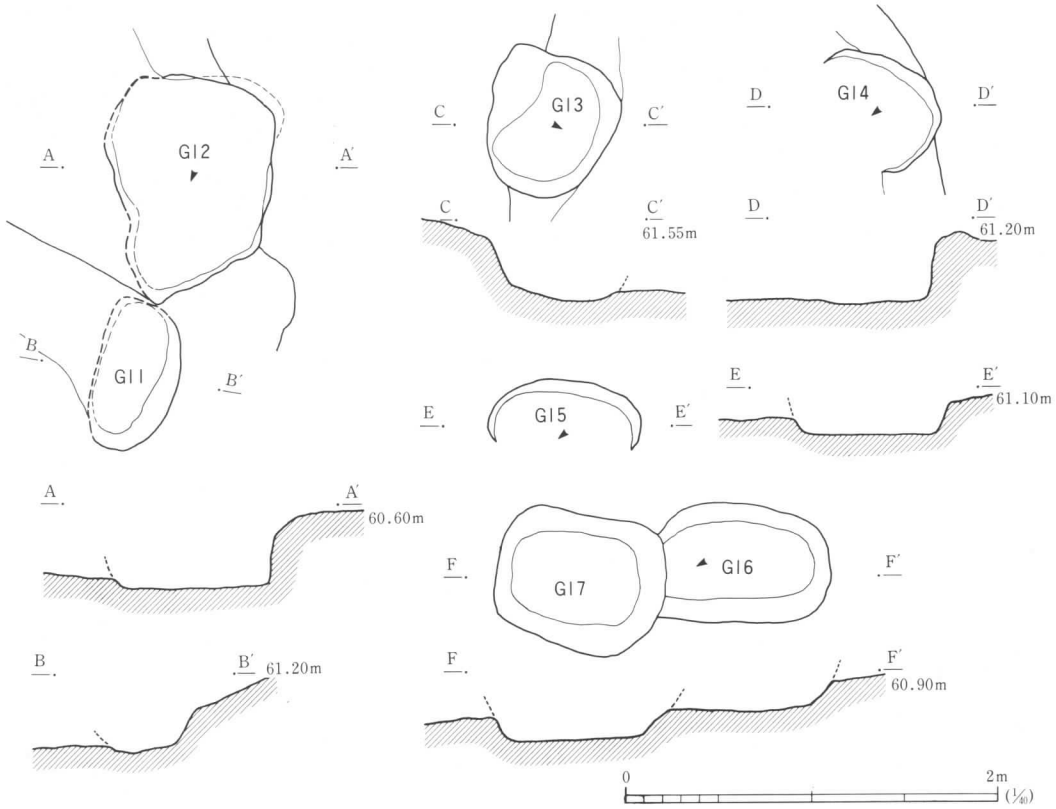


図11．東地区の墓坑(2)（G 11 ～ G 17）

ることから、近世以前に使用された可能性が高い。また、墓坑群との関連も推測される。

その他（図７・９）　性格不明の遺構が４か所（SX１～４）ある。38～39・d 区のSX１は、長さ180・幅75～90・深さ15cmの溝状遺構。西端部は畑の段に削平されて不明。覆土は黒褐色で遺物は出土していない。SD１～SD５と共通するものか。SX２は墓坑群南側のG１・G２付近から南西に約7.5ｍ延びる溝状遺構で、南西端部は畑の段となり途切れている。38 h 区付近で幅100～120・深さ10～30cmを測り、南西側ほど浅い。38 i 区からは銭貨が出土している。墓坑群に関連する溝か。SX３は墓坑群内の空間中央36 k 区付近にあり、180×100cmの範囲に径１～10cm程度の玉砂利状の礫が密集する。礫の厚さは５～10cmで、炭片や焼土の混入、遺物の伴出等は認められないが、位置的にみて墓坑群に関連する遺構と推測される。SX４は墓坑群北側34l区付近から北西に約6.5ｍ延びる溝状遺構で、北西端部は農道にかかる。幅70～130・深さ35～40cm。覆土は黒褐色で遺物は出土していないが、南側の底面から側壁部にかけて円礫（径20～30cm程度）を多数含んでいた。墓坑群との位置関係から、北側縁辺を画する性格の溝か。

(2)西地区（図12・13，写真３・７）　西半域を中心に、ピット群、建物跡、杭群、土坑、溝、井戸などが分布する。中央～東半域の遺構は希薄で、若干のピット及び杭が点在している。

ピット群（図６・12）　柱穴状の遺構は、約130基が検出されている。地区東側にも部分的に認められるが、多くは西側に分布する。形状は円形で径10～60・深さ10～45cm程度の規模を呈し、径

20～40・深さ20～30cmのものが多い。中にはテラス状の段をもつ掘形もみられる（写真７－④）。覆土は概ね黒褐色で、断面に柱痕を残すものはほとんど認められない。径の大きいものは建物跡の柱穴とみられるが、具体的に構成や配列が明らかになったのは下記の建物跡だけで、その他は不明であった。径の小さいものの中には、後述の杭跡との区別が明瞭でないものもある。

建物跡（図12）　前記のピット群のうち、調査後に図上で推定復元したもので、同規模の掘立柱建物跡２棟（SB１・SB２）がある。

81～84・ｉ～ｋ区に位置するSB１は、桁行２間（5.4ｍ）×梁間２間（3.5ｍ）の東西棟建物で、身舎北側に１間（1.0ｍ）の庇をもつ。桁行２間に対し、庇筋は４間の間隔となる。身舎中央には、棟持柱あるいは間仕切りとみられる柱穴がある。柱穴７はSD６①と重複する。身舎を構成する柱穴は径20～40・深さ15～35cm、庇の柱穴は径20～40・深さ20～30cmで、柱穴の覆土から特に遺物は出土していない。75～79・ｇ～ｊ区に位置するSB２は、桁行2間（5.5ｍ）×梁間2間（3.5ｍ）の東西棟建物で、SB１と同規模を示す。身舎北側に１間（1.0ｍ）の庇をもち、その間隔は桁行筋と同じく２間。身舎中央には、SB１同様、棟持柱あるいは間仕切りとみられる柱穴がある。柱穴１・９は未確認、柱穴６は暗渠にかかるため不明。身舎を構成する柱穴は径35～60・深さ20～45cm、庇の柱穴は径20・深さ15～20cm。柱穴の覆土から遺物は出土していないが、柱穴10には木柱材が残されていた。

なお、SB１の西側および南側、SE4の周辺にも部分的に規則的な配列を示す複数のピットがあり、何らかの建物跡が存在していた可能性もある。

杭群（図６・12）　地面に打ち込まれた状況で検出された木杭は約140点あるが、遺構群が集中する西半域と、遺構が希薄な中央～東半域では、木杭の様相が異なっている。

西半域で確認された木杭約20点は、遺構群間に点在し、径５～15・深さ20～40cm程度で、太めのものが目立つ（写真７－⑦・⑧）。木質の風化が顕著で、中世の木製品と同様の性状を示していることから、中世に帰属するものであろう（Ⅳ－３－(3)⑤木製品の項を参照）。局地的な集中は認められないが、直線状に並ぶものもあり（SB１西側等）、柵列の性格も考えられる。一方、中央～東半域の木杭は、帯状に密集した分布を示し、径２～５・深さ20～60cm程度で、細目のものが多い。風化は進んでおらず、生木のような残り具合いを呈するものもある。風化の程度から近世以降の比較的新しい時期の所産と推測される。帯状の広がりは旧水田の畦や排水路に伴うものか。

なお、前述したピットのうち、径の小さいものには、木杭自体が残らなかった杭跡も含まれている可能性もあるが、厳密に識別はできなかった。

土坑（図13）　３基（SK１～SK３）を検出。82～83・ｈ～ｉ区のSK１は、上面径200～250・底面径170～220・深さ30～40cmで、底面に径100cmのピットがある。南西部は暗渠にかかるため不明だが、不整な円形を呈するものであろう。北側にはSB１が位置し、東側の壁面にはSD９が接するが、切り合い関係は不明。覆土は黒褐色で、木製品（図24－187，25－214・216）や木片を含んでいた。中世に帰属する土坑と考えられる。SK１の西半部には、土層の色調が明らかに異なる掘り込みが認められることから、別の土坑(SK３)が重複していると判断した。SK３は上面径100～150・底面径60・深さ20cm。SK１の埋没後に構築されたものとみられるが、土層（４層）の性状は地山ブロックが混在し、グライ化が進んで赤色を帯びているため、時期的に新しい可能性がある。

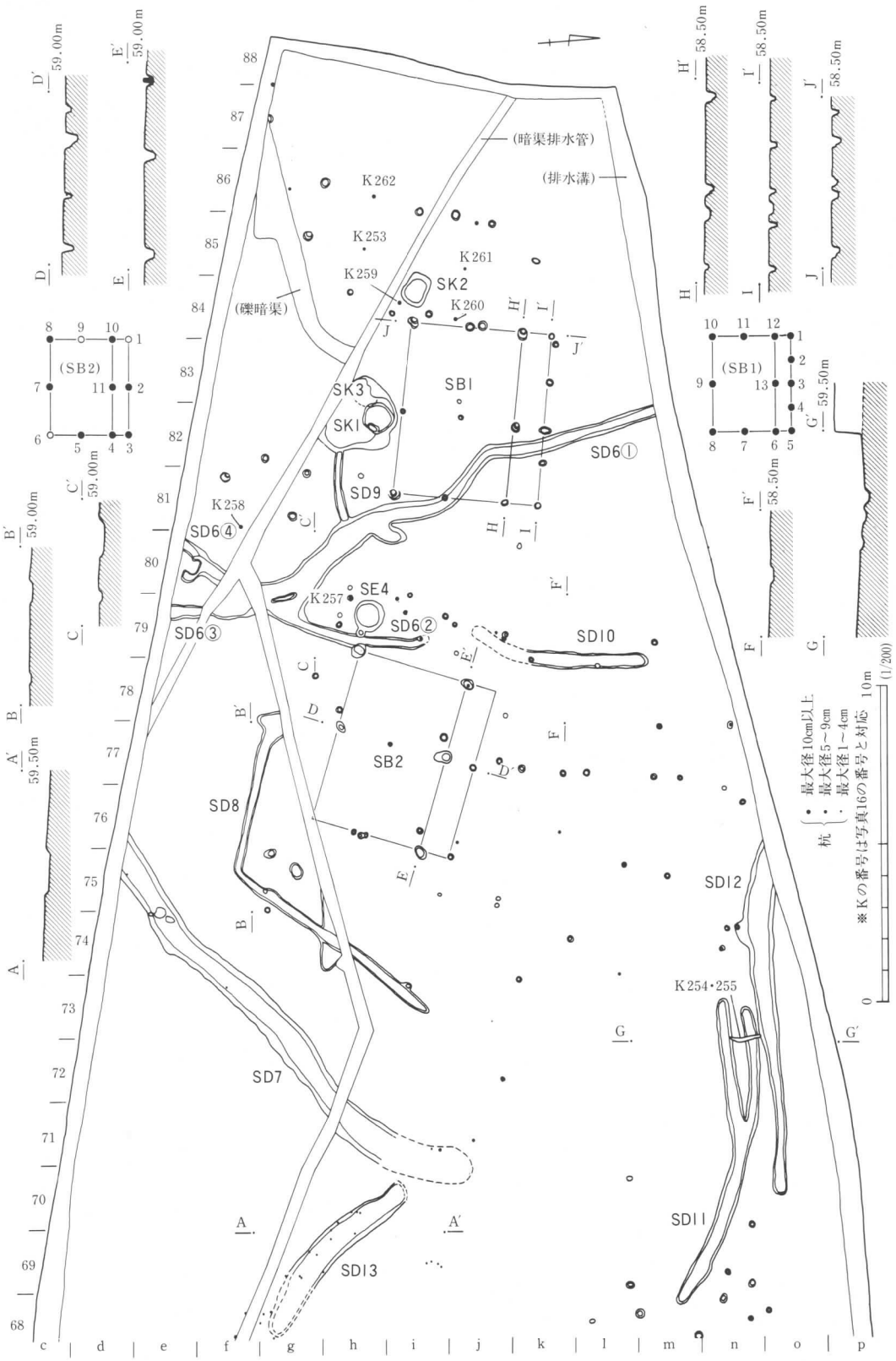


図12. 西地区西半部全体図（68～88・c～p区）

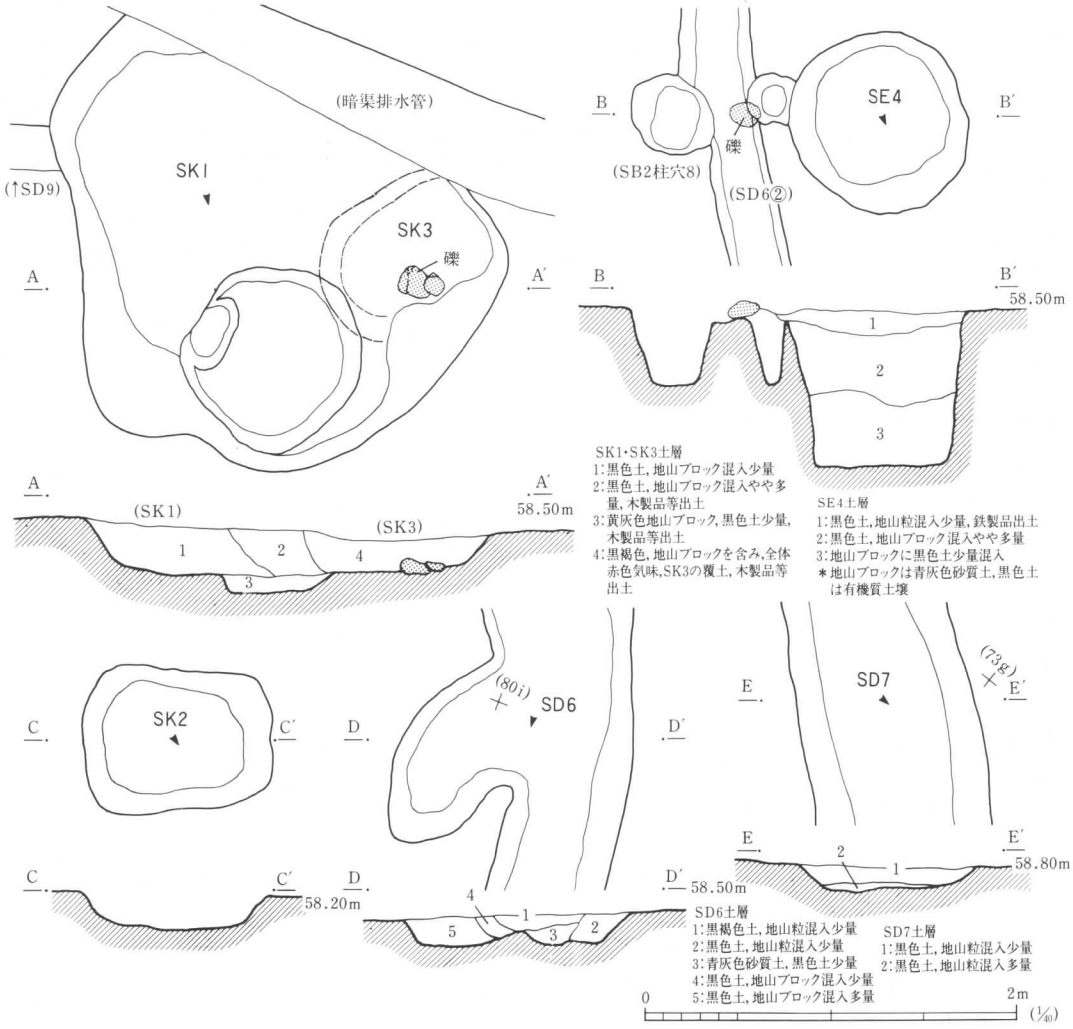


図13. 西地区の遺構（SK１～SK３、SE４、SD６・SD７）

覆土からは木製品が出土している。84ｉ区のSK２は平面長方形で、上面径75～100・底面径55～70・深さ20cm。覆土は黒褐色で、遺物は出土していない。

溝（図12・13）　８条（SD６～SD 13）を検出。SD６は80ライン付近で北西－南東方向に延びている。79～80・ｆ～ｇ区で①～④に分岐するが、複数の溝が重複している可能性もある。①－③間の検出長は16.5ｍ、幅35～100・深さ10～15cm。途中SD９と切り合い、SB１の北東部を通る。覆土は黒褐色で、中世陶磁器（図20－114, 21－130）、木製品などが出土している。SD７は75ｅ区から北東方向に延びて、70～71・ｉ区付近でその痕跡が不明瞭となる。検出長は15ｍ、幅80～110・深さ10～20cm。覆土は黒褐色で、中世陶磁器、木製品などを含む。SD８は73ｉ～75ｆ～77ｇ区で「く」の字状に延びる。長さ13ｍ、幅30・深さ5～20cm。暗渠にかかる部分はやや幅広となっている。覆土は黒褐色で木片少量が出土。81ｈ区付近のSD９は、SK１とSD６①を連結する形で検出された。切り合いの新旧関係は不明。長さ2.2ｍ、幅25～35・深さ5cmで、覆土から遺物は出土していない。SD 10は78ｍ～79ｊ区にあり、検出長5.5ｍ、幅35～55・深さ10cm。南端部は不明瞭で、位置的にSD６②と連続していた可能性もある。覆土から遺物は出土していない。68ｍ～73ｎ区の

SD11は東西方向に延びる溝で、長さ10m、幅35～60・深さ10cm。西側で三叉状（A・B）に分岐し、覆土には木片を含む。SD 12は70ｏ～75ｏ区にあり、SD 11の北側に並列して延びている。検出長11m、幅35～120・深さ10～15cm。覆土に木片を含む。68g～70i区に延びるSD13は、検出長さ6m、幅65～95・深さ５～10cmで、南北の端部は不明瞭。覆土から遺物は出土していない。溝内には前述の細めの木杭群が打ち込まれており、時期的に新しいものか。

井戸（図13）　１基（SE４）を検出。79 h区にある平面円形の素掘りの井戸で、上面径90～100・底面径60～70・深さ80cm。覆土は黒褐色土と青灰色土（地山ブロック）が混在し、上層部に鉄製品（図26－234）、下層部に木製品を含む。中世期に構築された井戸と考えられる。

その他（図６）　西地区東端域の43～46・ｈ～ｍ区付近では、礫が石組状にかたまっている箇所がみられた。配列等の規則性は認められず、遺構の可能性は低いが、礫の形状は東地区の墓坑出土の礫に類する。畑と水田の境界付近にあたることから、耕作の段を削平する際に、墓坑が削られて崩落したものか。東半域では包含層中から人骨片（36ページ参照）が出土しており、削平に関連した状況とみられる。また、62～63・ｈ～ｉ区付近では、自然木の根の部分が南北約４ｍ×東西約３ｍの範囲で検出された（写真８－⑧）。樹種はクリあるいはトチノキの類と推測され、太さは最大約50cm。出土状況からみて、流れ込みや搬入ではなく、同地点に生息していたものとみられる。風化の状況は、中世の木製品と同程度である。

３．遺物（図14～27，表２，写真８～16）

⑴出土遺物の概要（図14・15，表２、写真８）　発掘調査区のほぼ全域にわたって、縄文時代及び

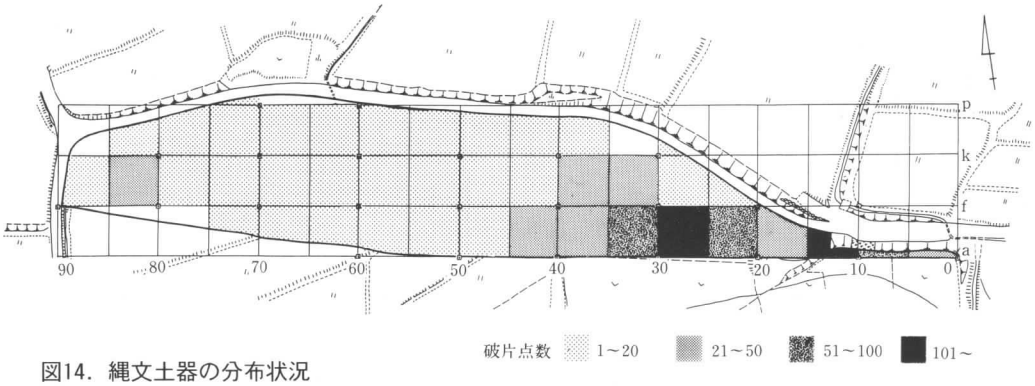


図14．縄文土器の分布状況

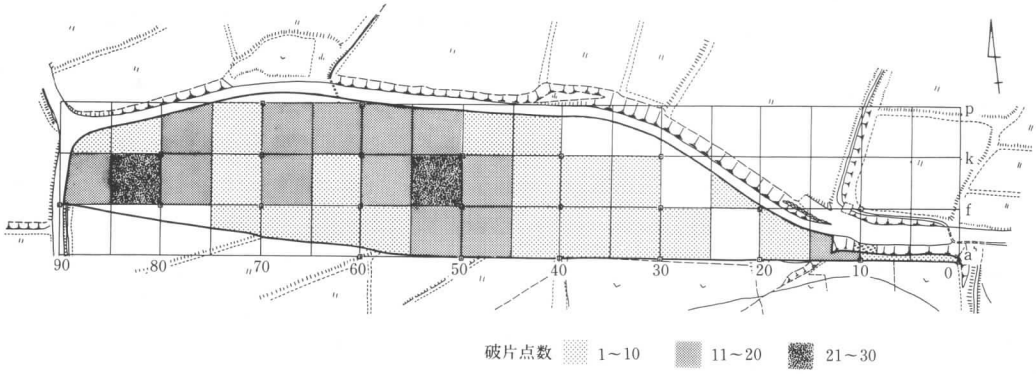


図15．中世陶磁器・土器の分布状況

表２．出土遺物の内訳　　（数値は破片点数を示す）

出土区	縄文			古代・中世・近世																	
	土器	石器	剝片	須恵器	青磁	白磁	染付	珠洲焼	越前焼	瀬戸美濃	瓦質	かわらけ	近世他	石製品	銅製品	鉄製品	銭貨	木製品	木材	杭	木片
1～5・a～e	42	8	18	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
6～10・a～e	83	9	17	0	0	0	0	1	0	0	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0
11～15・a～e	109	22	55	0	1	0	0	6	2	1	0	1	20	0	0	0	0	0	0	0	1
16～20・a～e	47	6	16	0	0	0	0	1	0	1	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0
21～25・a～e	58	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1
21～25・f～j	4	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
26～30・a～e	116	6	16	0	0	1	0	5	0	0	0	0	1	19	0	0	0	1	0	0	0
26～30・f～j	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0
26～30・k～o	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
31～35・a～e	79	3	22	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
31～35・f～j	23	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
31～35・k～o	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0
36～40・a～e	47	1	10	0	2	1	0	3	0	2	0	0	3	0	0	0	0	0	5	0	0
36～40・f～j	32	0	12	0	0	0	0	2	0	1	0	0	4	2	0	0	3	0	0	0	0
36～40・k～o	2	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
41～45・a～e	28	4	36	0	1	0	0	2	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	14	0	55
41～45・f～j	3	0	8	0	0	0	0	0	0	3	1	0	6	0	0	0	0	0	10	0	1
41～45・k～o	1	1	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0
46～50・k～o	10	2	16	0	2	0	0	7	5	0	0	0	4	1	0	0	0	7	12	0	74
46～50・f～j	2	3	9	0	1	3	0	7	2	1	0	0	7	0	0	1	0	0	12	9	0
46～50・k～o	1	0	4	0	0	0	0	2	0	0	0	0	6	3	0	0	0	0	1	0	1
51～55・a～e	5	0	6	1	0	0	0	12	1	1	0	0	5	3	0	0	0	14	21	1	44
51～55・f～j	13	3	28	0	3	0	0	13	4	0	0	1	30	1	1	2	0	6	50	6	149
51～55・k～o	4	2	17	0	0	2	0	10	0	3	1	2	9	2	0	0	0	6	26	0	59
56～60・a～e	3	0	9	0	0	0	0	2	0	0	0	0	7	1	0	0	1	0	6	1	19
56～60・f～j	20	1	30	0	0	3	2	8	1	2	0	3	13	0	1	1	3	11	34	3	103
56～60・k～o	1	0	15	0	1	0	0	12	0	3	0	3	7	0	0	0	2	3	12	1	23
61～65・a～e	0	0	1	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	5	0	12
61～65・f～j	1	0	6	0	1	1	0	3	0	0	0	1	7	0	0	0	0	13	58	32	124
61～65・k～o	2	1	9	0	0	1	0	10	0	0	0	1	3	0	0	1	2	4	17	14	60
66～70・a～e	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
66～70・f～j	1	0	1	0	0	2	0	7	0	6	0	0	3	0	0	3	1	20	66	14	133
66～70・k～o	8	1	6	0	4	1	0	9	0	0	0	2	28	0	0	2	1	10	47	2	77
66～70・p～t	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
71～75・a～e	2	0	1	0	2	1	0	3	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	1	0
71～75・f～j	1	0	4	0	1	0	1	5	0	0	0	0	7	0	0	2	0	12	55	5	67
71～75・k～o	1	1	12	0	0	3	0	5	0	1	0	0	28	0	0	0	0	8	29	4	13
71～75・p～t	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
76～80・a～e	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0
76～80・f～j	1	0	17	0	0	0	0	17	0	2	0	0	7	1	0	1	0	5	51	6	63
76～80・k～o	2	0	17	0	2	3	0	6	0	2	0	4	25	0	0	3	1	3	40	1	29
81～85・f～j	37	0	23	0	2	0	0	24	0	1	0	0	15	0	1	3	1	11	32	9	38
81～85・k～o	2	0	6	0	1	0	0	5	0	2	0	0	4	0	0	0	0	5	20	0	4
86～90・f～j	1	0	3	0	3	0	0	14	0	1	0	1	10	0	1	1	1	2	16	2	9
86～90・k～o	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	2	0	0	0	0	3	10	1	0
排土中・表採	40	4	33	2	4	0	0	10	1	0	0	0	44	0	1	4	0	6	19	0	31
計	841	82	499	4	32	22	4	225	17	34	4	20	354	36	5	24	17	154	676	112	1196

＊出土区は、10×10ｍごとの区画による集計（図14・15の方眼に対応）。「近世他」は、近世陶磁器破片の他、近代～現代の陶磁器破片も含む数値である。

古代・中世・近世の遺物が出土した。総量は整理用コンテナ約30箱に相当し、縄文時代の遺物約1400点、古代・中世・近世の遺物（木片を除く）約1700点、総計約3100点で、その多くは縄文時代中期と中世の遺物である。出土区別・種別による点数の内訳は、表２にまとめた。また、縄文土器と中世陶磁器・土器については、図14・15にその分布状況を模式的に示した。

出土区別に遺物の出土状況をみてみると、まず東地区では、縄文時代に関連する遺物が多数出土している。特に０～40ライン間の南側に集中していることがわかる。中世関係の遺物は少なく、11～15・ａ～ｅ区付近にやや多い程度である。一方、西地区では、中世関係の遺物が主に出土している。陶磁器・土器は、遺構が多数検出されている西半域での出土が顕著で、北側に集中している傾向を示す。木質遺物も西地区のほぼ全域で多量に出土しているが、特に東半域での出土量が多い。縄文時代の遺物は希薄で、その多くは東地区からの流れ込みの可能性が高い。

出土遺物には、縄文時代の遺物として、土器、土製品、石器類があり、古代・中世・近世の遺物としては、陶磁器・土器類、木製品、石製品、金属製品、銭貨などがみられる。東西両地区ともに包含層（II層）出土の遺物がほとんどのため、各遺構から出土した遺物も含めて、時代別・遺物種別に以下記載することにしたい。

⑵縄文時代の遺物（図16～18，写真９・10）　縄文土器、石器類、土製品が出土した。その大半は縄文時代中期の資料である。

①縄文土器（図16・17，写真９・10）　841点が出土。多くは細かい破片で、全体の器形や文様構成が明らかな資料はない。時期的には、縄文時代中期前葉から中葉に属するものがほとんどで、早期及び晩期の土器片が少量認められる。

早期の土器は同一個体の細片３点で、27～30・ａ～ｅ区付近から出土した。いずれも胎土に多量の植物繊維を含み、表裏両面に条痕文を施すもので、１は口縁部、２は底部付近の破片。文様には僅かに縄の痕跡が認められることから、絡条体条痕手法の可能性もある。早期後半～終末に位置づけられる。

３～57は中期の土器である。３～13は半截竹管状工具による区画文や連続爪形文を施す。北陸地方の新保・新崎式に特徴的な手法で、東北地方南部の大木７b式に並行する。３～７は口縁部破片で、波状口縁（３～６）と平口縁（７）の２形態がある。３には施文間隔の広い蓮華文、８には格子目文がみられる。９はSK５出土。14～21も北陸系統の土器と考えられるが、細片のため明確でない。概ね大木７b～８ａ式段階に並行するものか。14・15は沈線によって浮彫風の文様を表現するもので、浅鉢の口縁部。14はSK4出土。16～18は口縁端部に浅い沈線文が巡る。19～21は胴部片で、沈線文や列点文がみられる。22～24は撚糸側面圧痕文を特徴とする大木7b式。22は口縁部に１条の撚糸側面圧痕文が巡る深鉢、23は４単位の波状口縁をもつ浅鉢、24は胴部上半が丸く膨らむ形態の深鉢である。25・26は関東地方勝坂式の影響がみられるもので、大木7b式段階に並行する。25は口縁部に近い破片で、隆帯による円形の区画と押引の連続刺突文を施す。同様の押引連続刺突文は26にも認められる。27～47は、北陸・東北南部・関東系統などの文様手法が融合した在地的な土器。そのうち、27～33は大木7b式段階と考えられる。27・28は波状の口縁部で、28は隆帯と沈

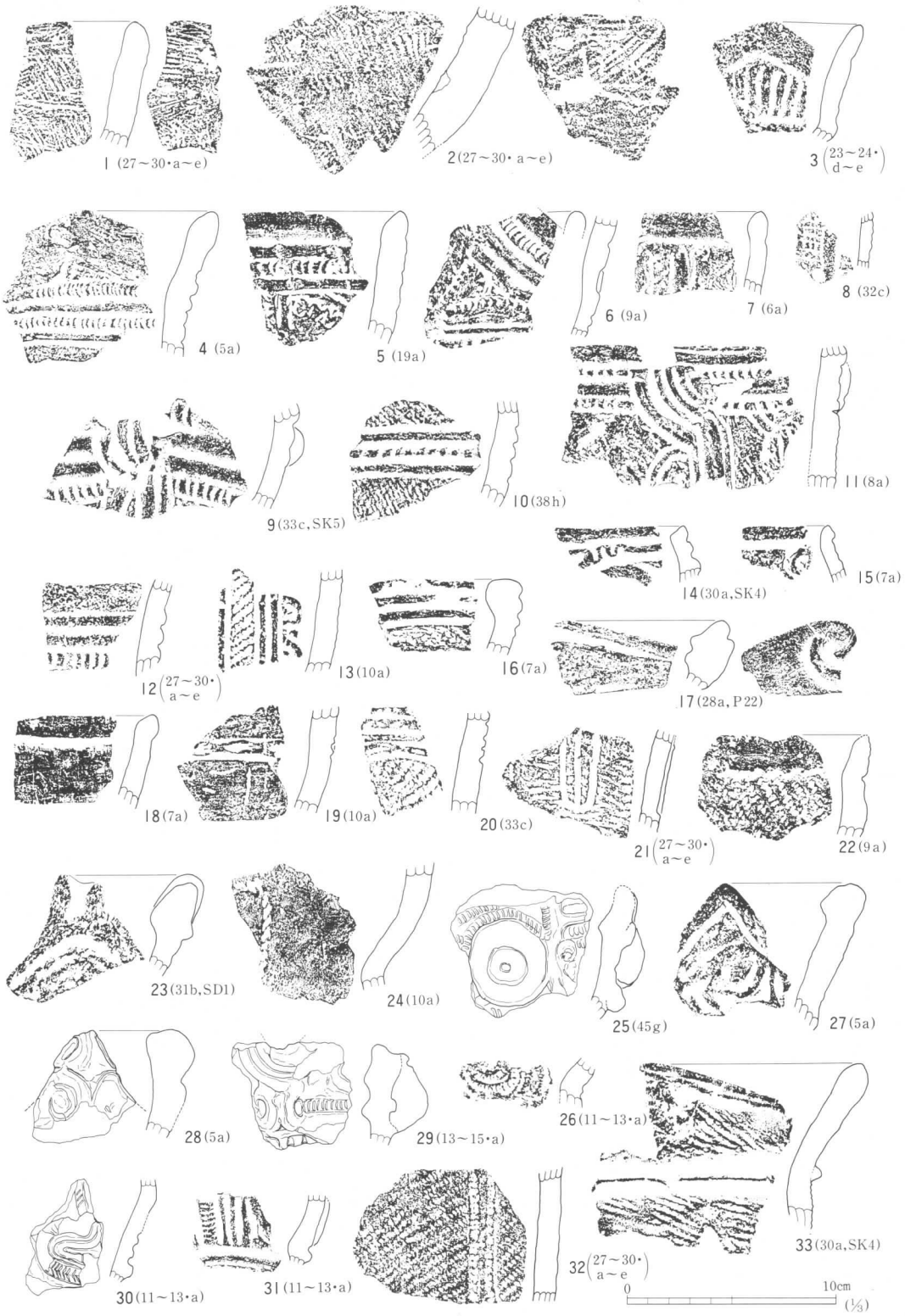


図16. 出土遺物(1)－縄文土器－（1・2：縄文早期、3～33：縄文中期）

図17. 出土遺物(2)－縄文土器・土製品－（34～57：縄文中期、58 a ～ f：縄文晩期、59：土製品）

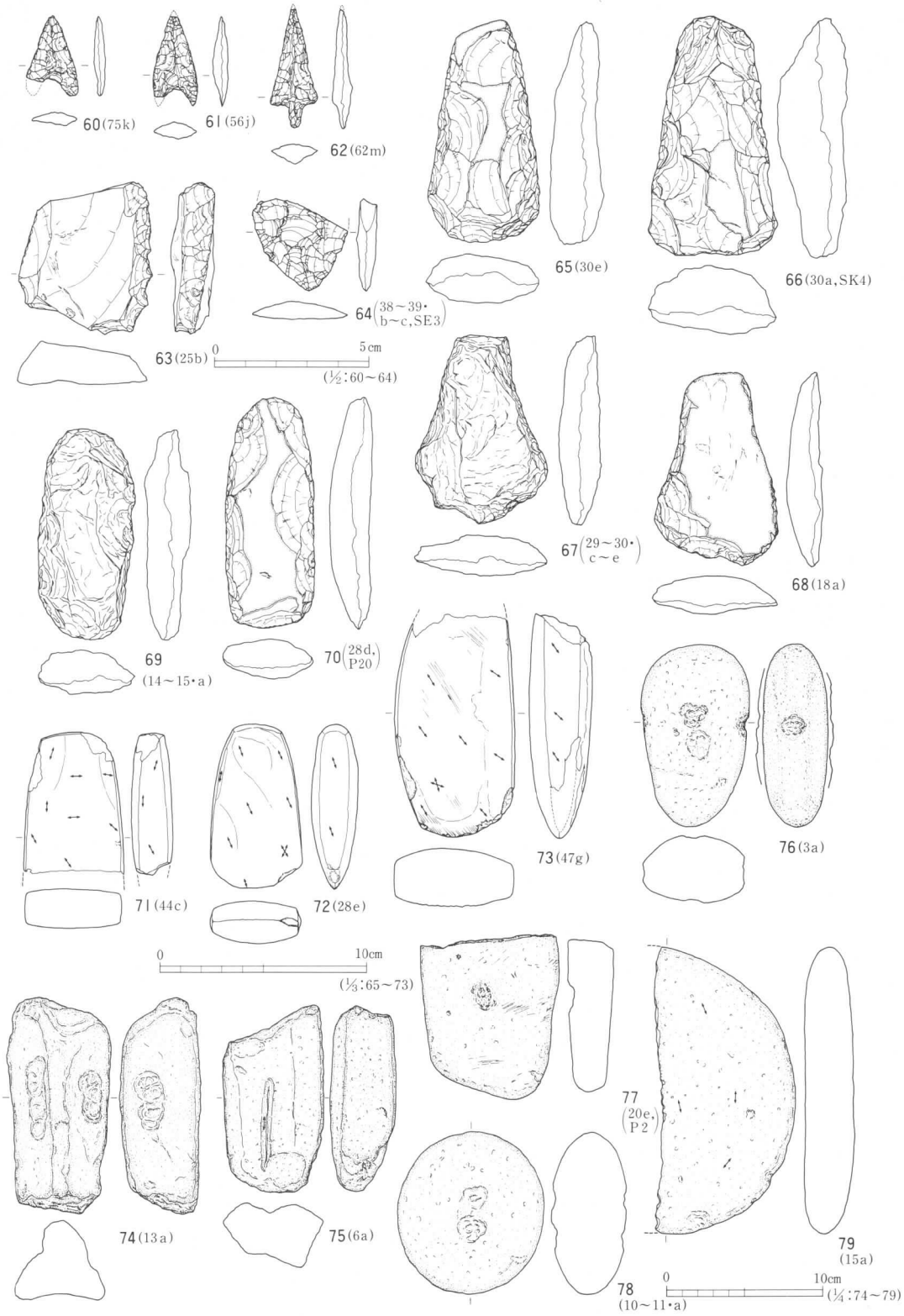


図18. 出土遺物(3)－石器類－ (60～62：石鏃、63：掻器、64：石槍、65～70：打製石斧、71～73：磨製石斧、74～79：磨石類)

線で眼鏡状のモチーフを表現する。胴部片の29～31には、隆帯による眼鏡状の突起、S字状の貼付文、隆帯上の刻目などがみられる。32は胴下半部の破片で、縄文地を押引刺突文で区画する。SK4出土の33は波状口縁で、縄文地の頸部に細い貼付隆帯が巡る。34～47も在地的な土器で、大木8a～8b式段階に位置づけられる。34～36は火焔型土器系統の口縁部片。37～40は浅鉢で、口縁端部が「く」の字に内湾する。沈線文や隆起線文で文様を表現している。40は縄文地の浅鉢で、口縁端部に沈線が巡る。41・42は火焔型土器系統の胴部片。43はSK4出土で、表面は剝落しているが、綾杉状の沈線を施す大木8b式か。44は頸部に眼鏡状の突起をもつ。45～47は胴部の縄文地をクランク状の沈線文で区画する。48～54は縄文を主体とする深鉢で、時期的には大木7b～8b式段階と考えられる。48は折り返し口縁、50は波状口縁で、端部は無文となる。52は波状口縁で、頂部には円形のくぼみを加えている。53はSK4出土。55・56は底部片。55の底面には網代の痕跡が残る。56は北陸系の新保・新崎式で、胴部に半截竹管による区画文がある。57は台付鉢とみられ、外面には撚糸文を施している。

58は晩期の土器で、82j区付近から1個体分の破片が出土した。58a～cは口縁部、d・eは胴部、fは底部の破片。x字状の雲形文を施す浅鉢で、東北地方大洞C1式に比定される。

②土製品（図17，写真10）　三角形土版の破片が1点（59）出土したのみ。三角形の先端にあたる部分で、細い円形竹管状工具で外面を刺突する。縄文中期に位置づけられる。なお、確認調査では土偶頭部1点が出土している［駒形1993］。

③石器類（図18，写真10）　石器器種82点、剝片約500点が出土。器種としては、石鏃4点、石槍1点、掻器1点、打製石斧46点、磨製石斧11点、磨石類19点があり、打製石斧の組成比率が高い。

60～62は石鏃。60・61は頁岩製の凹基有茎石鏃で中期の所産、62は凝灰岩製の平基有茎石鏃で、形態からみて晩期と考えられる。63は珪質頁岩製の掻器で、片側縁に調整を加えて刃部を形成する。石材や形態から早期の可能性がある。64は石槍の基部。玉髄製で、背腹両面に平坦剝離を施している。65～70は打製石斧。図示していない資料を含め、石材には粘板岩や頁岩が多い。平面形態としては、両側縁が直線状の撥形（65・66）、両側縁がやや抉れた撥形（67・68）、短冊形（69・70）が認められる。背面に階段状の剝離を加えるが、礫面を残しているものも目立つ。その他、打製石斧の素材とみられる分割礫、剝片、未製品も多数出土している。71～73は磨製石斧で、石材は流紋岩や砂岩など。定角式の形態を示し、72のような小形品もある。使用によって折損しているものや、刃部の欠損しているものが多い。76～78は磨石類で、石材は安山岩や砂岩など。平面円形または楕円形を呈し、敲打と研磨の機能をあわせもつものがほとんどで、表裏に1対のくぼみを残すもの（76・78）も多い。74・75は特異な形態例。74は断面三角形で2側面にくぼみを残す。75は両面全体が溝状にくぼむ形態で、砥石の可能性もある。いずれも中期の所産と考えられる。77は軽石製。79は安山岩製の石皿。偏平な河原石を研磨したものである。

⑶古代・中世・近世の遺物（図19～26，写真11～16）　古代の遺物として須恵器、中世及び近世の遺物として各種陶磁器類、木製品、石製品、鉄製品、銅製品、銭貨などがあり、中世に関するものが大半を占めている。

①須恵器（図19，写真11）　出土量は少なく、破片資料４点のみ。80・81は甕の体部片で、それぞれ内面同心円・外面格子目、内面同心円＋平行・外面格子目を施す。82は甕の口縁部片で、表面採集資料。外面に平行叩き目の痕跡を残す。いずれも９世紀中頃～後半に位置づけられる。83は内面に車輪状の叩き目を施すもので、類例は西蒲原郡巻町下稲場遺跡（９世紀前半）［深井1988］にある。ただし、外面の平行叩き目は珠洲焼の叩打文に近いため、内面の叩き目は、通常、珠洲焼の外面に施される菊花（車輪）文の範疇でとらえられる可能性を残す。

②中世陶磁器・土器（図19～23，写真11～13）　舶載陶磁器及び国産陶磁器・土器類が出土している。その多くは破片資料で、舶載58点、国産300点、総数358点である。

ａ．舶載陶磁器（84～112）　青磁32点、白磁22点、染付4点がある。14世紀代の遺物は少量で、ほとんどは15世紀前半と、15世紀後半～16世紀代の遺物である。

青磁　碗（84～93）、皿（94・95）、盤（96）がある。製作年代は、劃花文碗の85・86と蓮弁文碗88は14世紀代、87・89～93は15世紀前半、84は15世紀末～16世紀初頭である。87の細蓮弁文碗は端反タイプの白磁にともなう。94の稜花皿は15世紀末～16世紀初頭、95の皿底部は15世紀代。96の盤は15世紀代で、新潟県内では北蒲原郡水原町堀越館跡［鶴巻1991］出土遺物に類例がある。

白磁　碗（97）、皿（98～108）がある。97の端反碗は16世紀代、98の口禿皿は14世紀代、99～101・104～108は15世紀前半、102・103の端反皿は15世紀後半～16世紀代の所産。

染付　碗（109・110）、皿（111・112）がある。いずれも15世紀後半～16世紀代の製作年代を示す。112の高台皿は端反タイプの白磁にともない、新潟県内では白根市馬場屋敷遺跡［遠藤1991］出土遺物に類例がある。

ｂ．国産陶磁器・土器（113～176）　珠洲焼225点、越前焼17点、瀬戸美濃焼34点、瓦質土器4点、かわらけ（土師質土器皿）20点がある。珠洲焼の出土量が最も多く、吉岡編年［吉岡1994］のⅣ期（14世紀）～Ⅴ期（15世紀前半）にほぼおさまる。

珠洲焼（113～139）　甕（113～120）、壺（121～126）、擂鉢（127～139）があり、擂鉢の破片が多い。甕は113・114がⅣ期、116～120がⅣ～Ⅴ期、115がⅤ期に相当する。底部の119は砂底である。壺は121・124・126がⅣ期、122・123・125がⅣ～Ⅴ期。121は吉岡分類［吉岡1994］の壺Ｔ種、122は壺Ｒ種でロクロ整形。124は綾杉状の叩き目をもち、126は外面上部に一部叩き目を残す。擂鉢は129・130～135・137がⅣ期、127・139がⅣ～Ⅴ期、136・138がⅤ期の所産。128の擂り目の形状はⅣ期に近いが、口縁部の形態や焼成の状況からするとⅥ期の可能性がある。137の破断面には研磨痕が残る。擂鉢の破損後に、破片を擂粉木として転用した可能性が高い。

越前焼（140～145）　いずれも甕である。楢崎・田中編年［楢崎・田中1986］のⅣ期新相～Ⅴ期古相（15世紀後半～16世紀前半）の時期幅におさまる。

瀬戸美濃焼（146～164）　碗（146～148・152）、皿（149～151・157～159）、盤（153）、香炉（154～156）、花瓶（160・161）、壺（162・163）、瓶子（164）がある。146～148は天目茶碗。146の釉薬は鉄釉で14世紀末～15世紀前半、147は灰釉で15世紀前半頃、148は鉄化粧で15世紀中頃の所産。149～151は緑釉小皿で、いずれも15世紀中頃。152は平碗で15世紀後半。153は盤の折縁深皿で

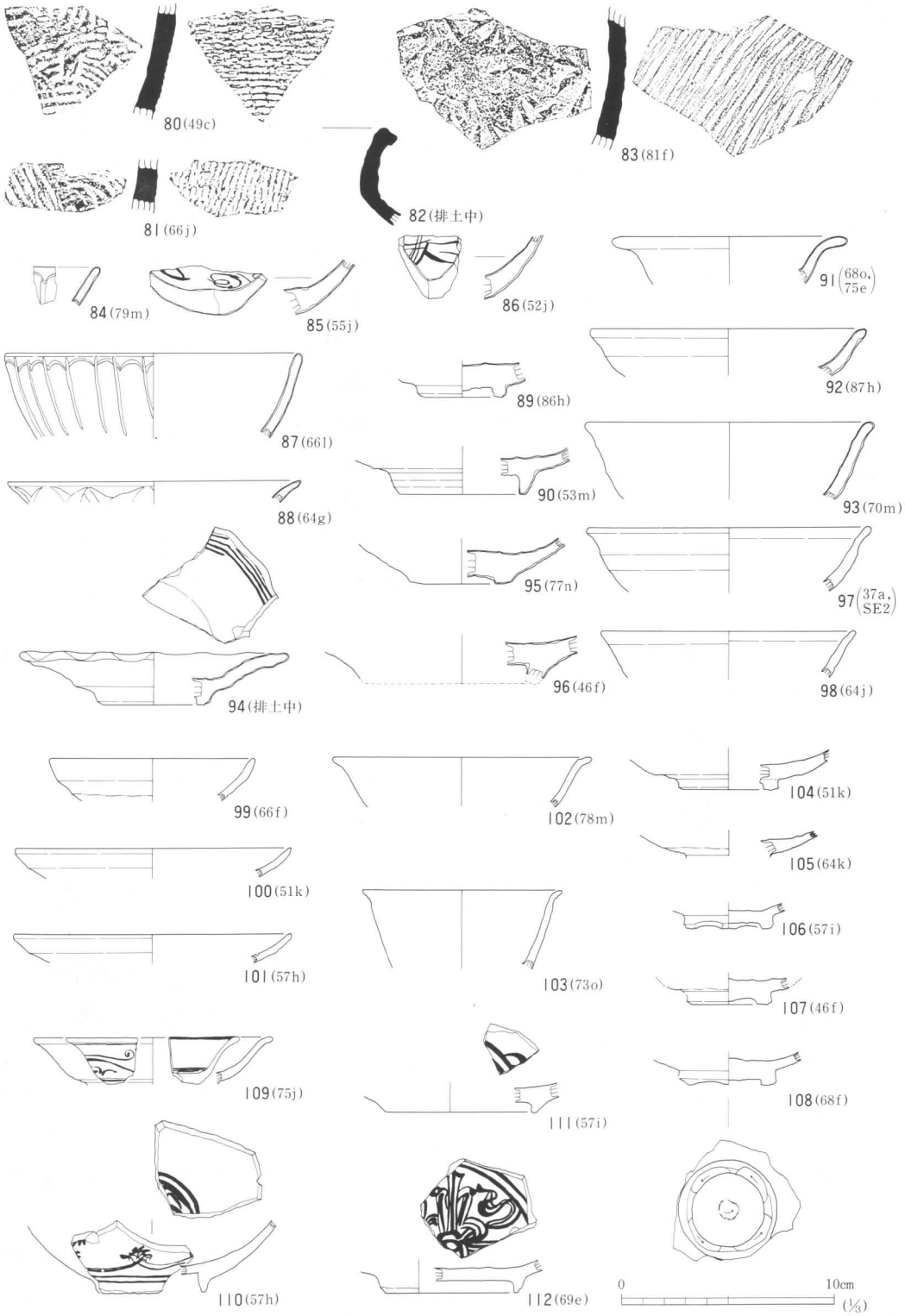


図19. 出土遺物(4)－須恵器・中世陶磁器－（80～83：須恵器、84～98：青磁、99～107：白磁、108～112：染付）

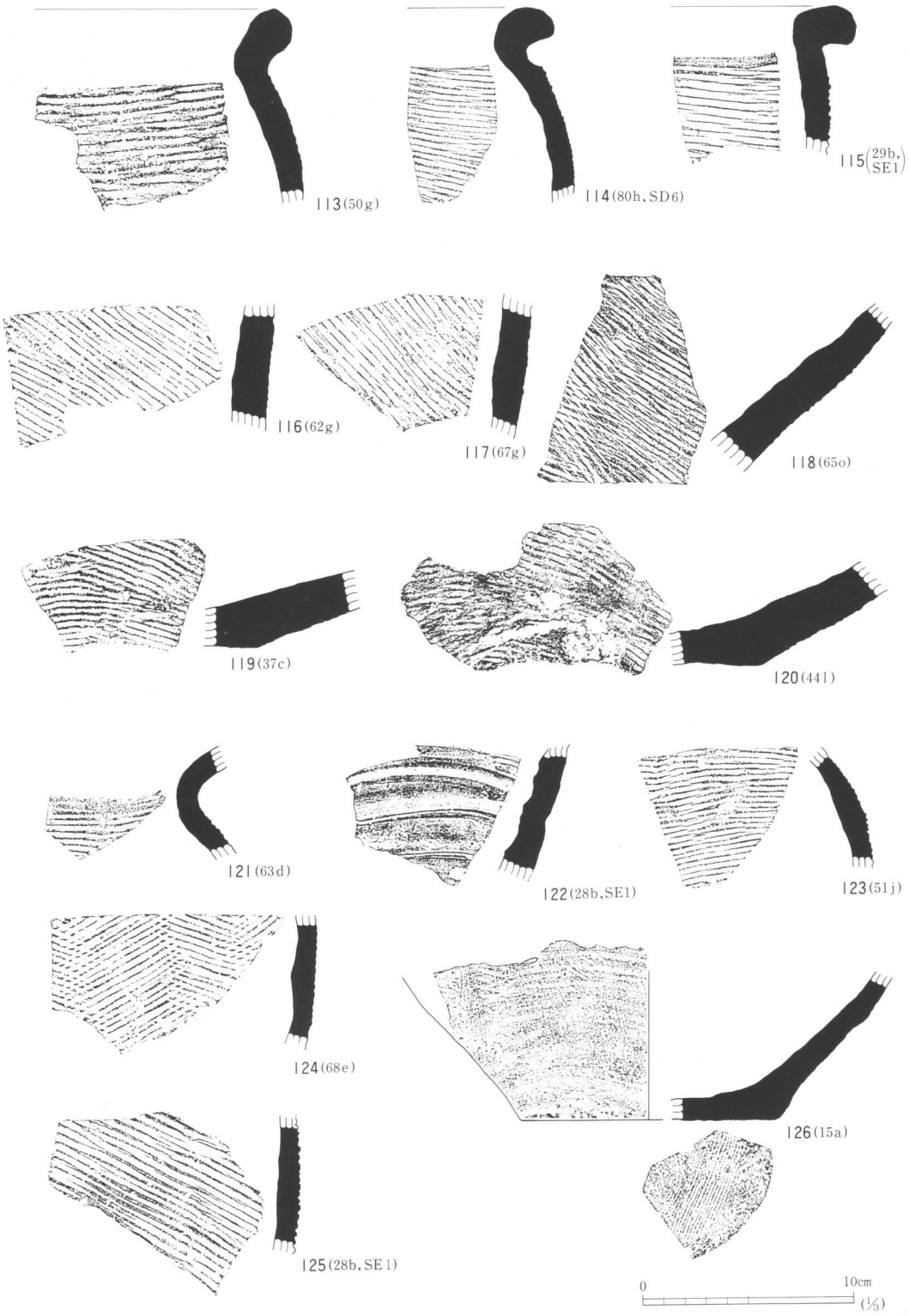


図20. 出土遺物(5)－中世陶磁器－（113～120：珠洲焼・甕、121～126：珠洲焼・壺）

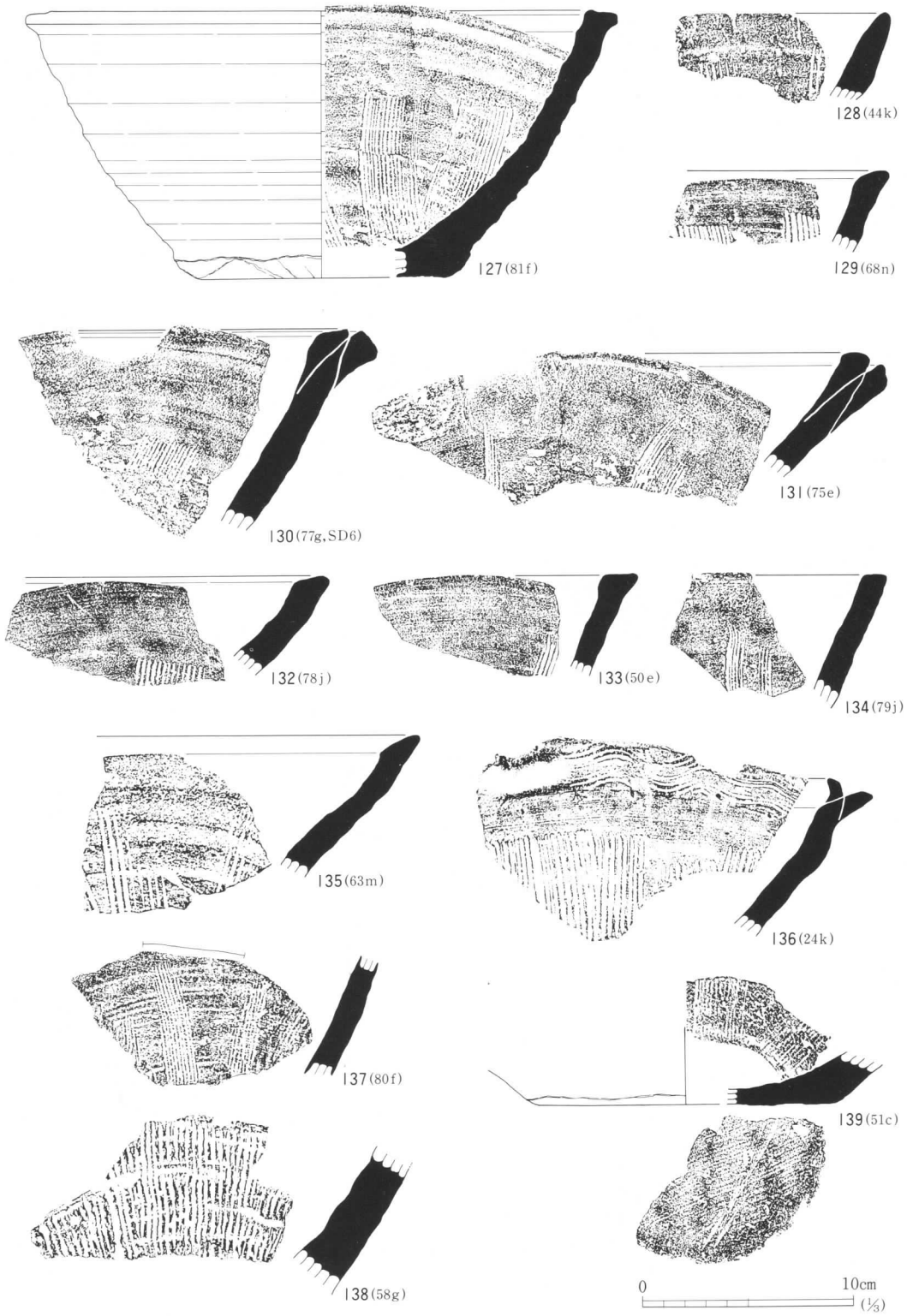


図21．出土遺物(6)－中世陶磁器－（127～139：珠洲焼・擂鉢）

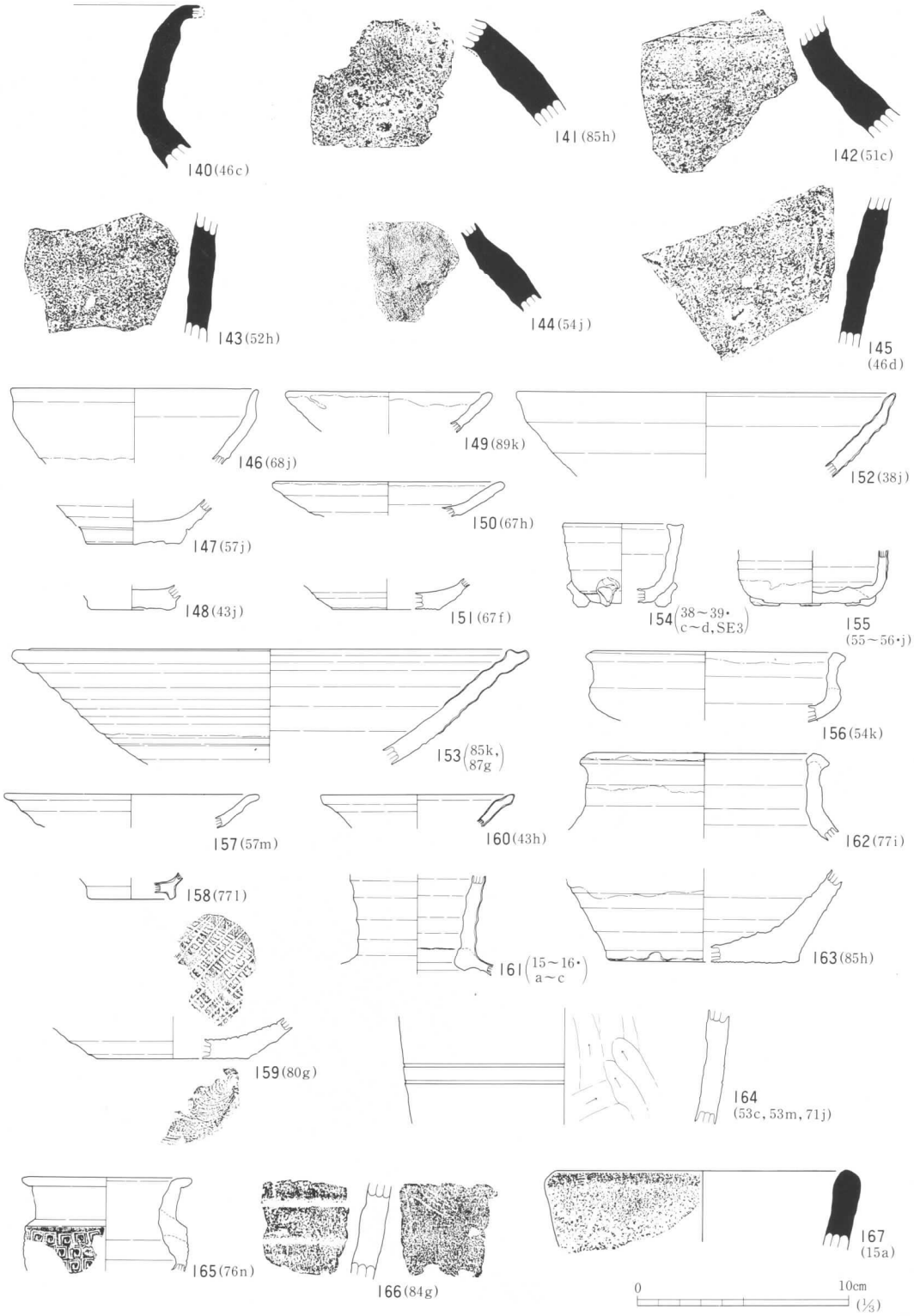


図22. 出土遺物(7)－中世陶磁器・土器－（140～145：越前焼、146～164：瀬戸美濃焼、165～167：瓦質土器）

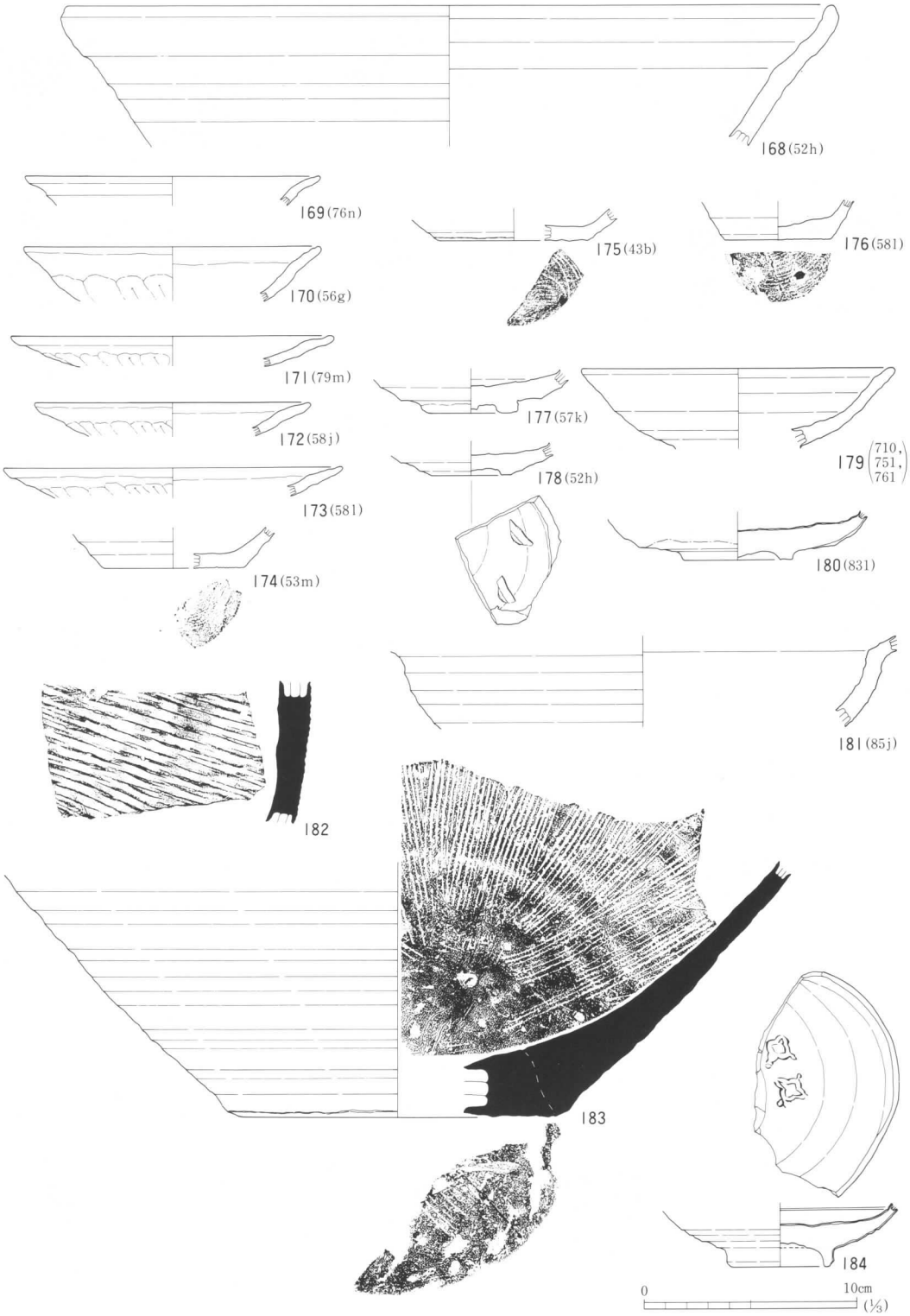


図23. 出土遺物(8)－中世陶磁器・土器、近世陶磁器－（168：瓦質土器、169～176：かわらけ、177～181：唐津焼、182～184：採集資料）

15世紀中頃。154～156は香炉で、154・155は筒形香炉。154は鉄釉で13世紀後半～14世紀初頭、155は天目釉で14世紀末～15世紀前半。156は鉄釉の袴腰形香炉で、15世紀前半。157は稜皿で15世紀前半～16世紀中頃か。158は端反皿で16世紀中頃。159は卸皿で14世紀末～15世紀前半。160・161は花瓶とみられる。160の製作年代は16世紀までは下らない。161は14世紀代か。162は四耳壺か。15世紀後半頃の所産。163は瓶子もしくは広口壺で、釉薬は鉄釉か。164は瓶子とみられ、時期的には15世紀前後におさまるだろう。

瓦質土器（165～168）　香炉（165）、壺？（167）、鉢？（166・168）がある。165は内外面とも丁寧にミガキが施されており、体部外面には刻印が認められる。15世紀代の所産か。167は壺か。現在のところ形状、胎土、焼成とも県内に類例は少なく、関東系の製品とみられる。15世紀代か。166はおそらく15世紀代の鉢であろう。168の特徴的な口縁端部の形態も、今のところ県内に類例はない。形態上は15世紀前半の関東系鉢（擂鉢）に近い［木津1989］。

かわらけ（土師質土器皿）（169～176）　製作技法には、ロクロ成形底部回転糸切り（169）と手づくね（170～173）の2タイプがみられる。底部片（174～176）はすべて回転糸切りである。いずれも15世紀後半～16世紀の所産。

③近世陶磁器（図23，写真13）　唐津焼が少量出土している。年代的にはほぼ17世紀代におさまる。その他、幕末の肥前系陶器破片などがある。

唐津焼（177～181）　皿（177・178）、碗（179・180）、鉢（181）がある。皿の焼成方法は、177が胎土目、178が砂目積である。いずれも17世紀代の所産。碗179は17世紀前半、180は17世紀後半。181の鉢は17世紀代か。

④採集資料（図23，写真13）　183・184は、栖吉町の青木佐太雄氏が1978年頃に今回の調査範囲（西地区）南側の水田中から採集したものである。183の珠洲焼擂鉢は、吉岡編年のⅤ期（15世紀前半）の資料。184の青磁無文碗は、内底見込みに印花文をスタンプしている。なお、182は中沢町の中村祥一氏らが1989年頃に大行寺遺跡（３ページ図３－５）から採集したもの。珠洲焼の甕体部片で、時期は14世紀後半～15世紀代である。

⑤木製品（図24・25，写真14～16）　総計約2000点に及ぶ木質遺物が出土しているが、用途の明らかな木製品は30点程度で、その他、用途不明の木製品、木材（加工痕のあるもの）約800点、杭・柱約100点、加工痕の認められない木片約1200点がある。そのほとんどが中世の所産と推測される。ここでは、用途が明らかな代表的な木製品を中心に記載する。出土品には、飲食器、調理・炊事具、容器、履物、装身具、建具、織具、工具、農具、形代、建築部材など、多種多様なものが認められる。なお、出土量が膨大なため、材質の検討を含む詳細な分析は行なっていない。

185～189は椀・皿の類で、細片のため椀と皿の区分や形態は明瞭でない。ロクロ引きによる成形とみられ、漆を塗布しないもの（185・186）と塗布するもの（187～189）の２種類が認められる。189は内外面とも黒漆地に赤漆で文様を描いている。190・191は下駄で、いずれも台に歯をはめ込む差歯式。台にホゾ穴を貫通させて歯を差し込む露卯下駄である。台部の平面形は長楕円形で、歯部は台形状にやや開く。191のホゾ穴は前歯・後歯とも２穴に対し、190は前歯２穴・後歯１穴であ

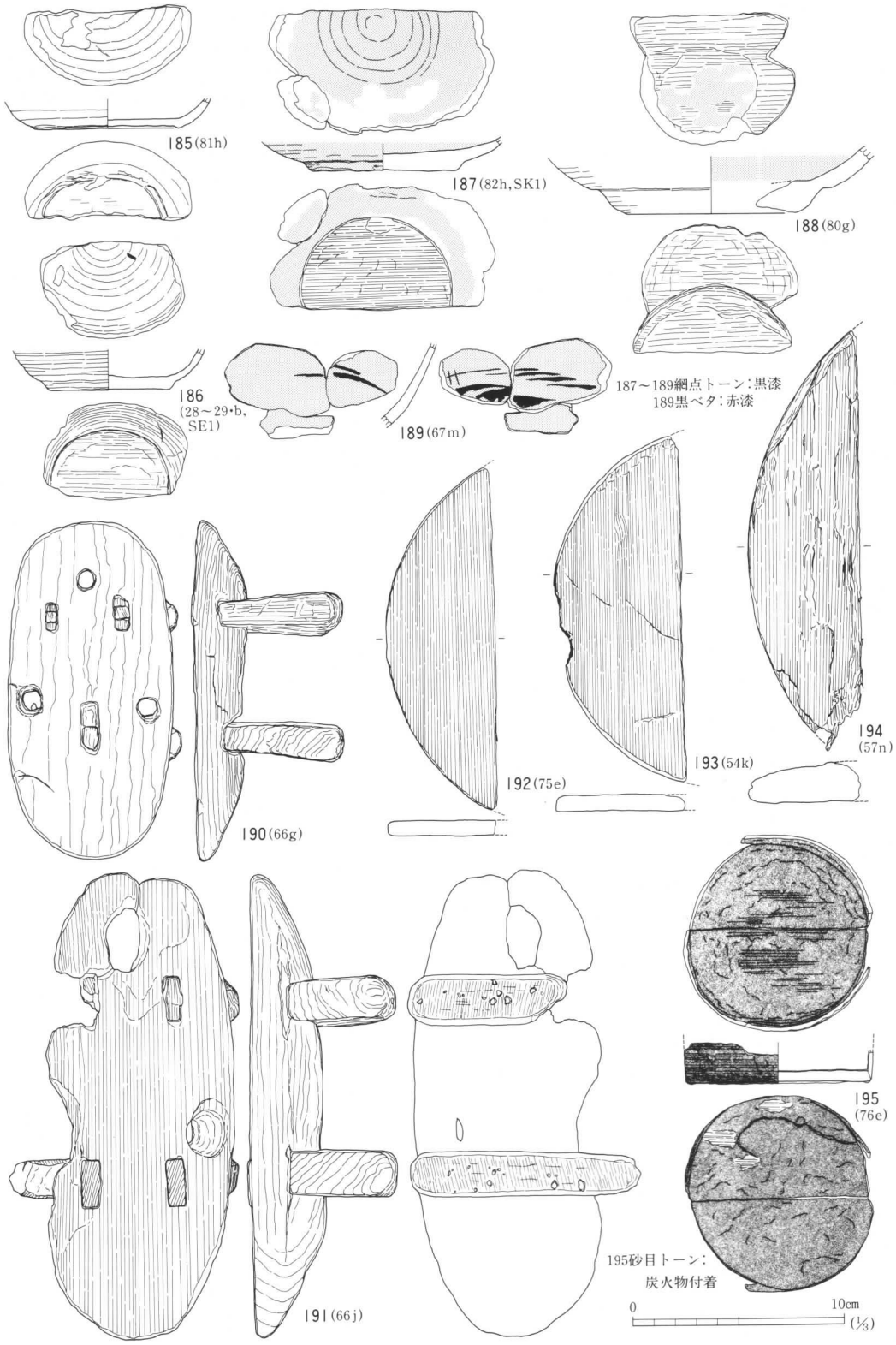


図24. 出土遺物(9)－木製品－（185～189：木椀類、190・191：下駄、192～195：曲物類）

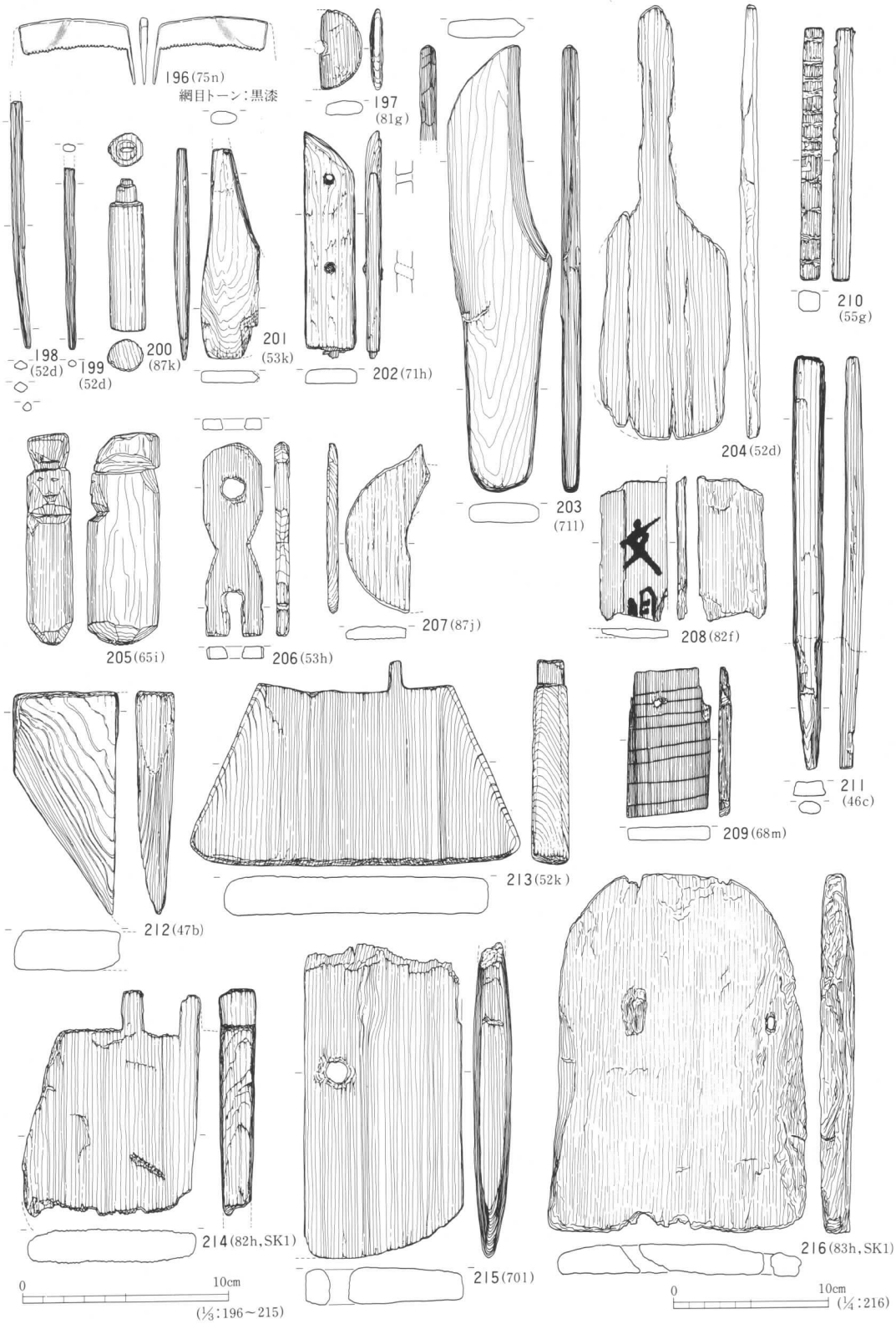


図25. 出土遺物⑽－木製品－（196：櫛、197：紡輪、198・199：箸、204：杓子、205：人形、208：墨書木片、その他）

る。小形の190は女性用、大形の191は男性用か。また両者ともに前緒が台の中央軸線よりやや左にずれていることから、左足用と考えられる。191には台前端部の指圧痕や歯接地部の砂利のめり込みなど、使用の痕跡が著しく残る。なお、その他の破片資料を含め、台と歯を一木でつくる連歯下駄は確認されていない。192～194は円板で曲物の蓋板か底板とみられる。その他の資料も含め、図示した程度のサイズが多い。195は小形の曲物底部で、帯状に巡る側板が途切れているため綴じ方は不明。内外面に炭化物が多量に付着している。

196は幅広の横櫛で、表裏両面に黒漆の文様を施している。歯が1㎝間に6～7本程度と密なことから、梳櫛の類と考えられる。197は紡輪で、紡織具の一種である。小形の円板中央に小孔を穿っている。198・199は食事用の箸。200は曲物など容器の栓とみられるもの。断面円形の棒状で、一端を細く削って段をつけている。201～203は箆状の製品。201は下端部が薄く削られており、刷毛のような機能をもつものか。202と203は刀形を呈していることから、祭祀に用いられる形代の可能性も考えられる。特に202は途中に穿孔があり、刀の束を表現したものか。204は板杓子で、身の部分は平面長楕円形状を呈する。205は人形である。人形とは、本来「祓（はらえ）の時の形代（かたしろ）」（『広辞苑』第四版）を意味する。立体的なつくりで、烏帽子と頭部を削り出し、下端部は尖り気味になる。さらに、刃物による浅い線刻で目・鼻・口を表現している。206・207は用途不明の製品。206の上半の穿孔部や下端部には、縄や紐で擦れたような痕跡が認められる。208は墨書のある板状の木片で、上下端部および左側縁部を欠損する。残存部表面の墨書はかなり薄れているが、「文明」（1469～1487年）と判読される。おそらく付札の一部分で、下端にはさらに年月日等が記されていたものであろう。209は加工痕が認められる板状の木片で、表面には鉋の削り痕が残り、上半に釘孔とみられる小孔があく。戸板など建具の一部と考えられる。210はほぼ等間隔に浅い刻目の残る角材で、建具に関連するものか。211は縦割りの板材を粗く削って先端を尖らせたもので、先端部には焼成の痕が残る。形態からみて、菜箸あるいは工具としての箆の可能性がある。212・213は用途不明の製品。他の部材と組み合わされるものであろう。214はホゾ状の突起をもつ板状の製品。建築部材とみられるが、用途は不明。215・216は板状の大形品。215の下端および216の上端は刃状に加工されている。おそらく鋤や鍬などの農具と考えられる。

写真16の253～262は、杭及び柱の類。257はSE4付近の柱穴内に残されていた木柱で、その他は地面に打ち込まれていた杭と包含層から出土した杭である。257は径約9㎝で、下端部を削って丸く尖らせている。写真に示した杭は主に西地区西半域で検出されたもので、最大径10㎝前後の太めの杭が多い（15ページ「杭群」参照）。全面に粗い加工痕が観察されるが、円柱形状のもの（256）、不整形で木の節の部分を残すもの（253・261）、下端部を斜めにカットして尖らすもの（258・259・262）などが認められる。

⑥石製品（図26，写真15）　石製鉢や砥石の破片が36点出土。中世の所産とみられる。217はSE1から出土した大形の石製鉢で、口縁端部1か所に突起状の膨らみをもつ。石材は砂岩。擂鉢状の形態から磨臼の機能が推測される。218は安山岩製の砥石。板状の石材を素材とするもので、表面に線状の研磨痕が明瞭に残る。219は小形の砥石で粘板岩製か。表裏両面と側面はよく研磨されている。

⑦鉄製品（図26，写真15）　釘や刀類などが24点出土。その多くは中世の所産とみられるが、錆

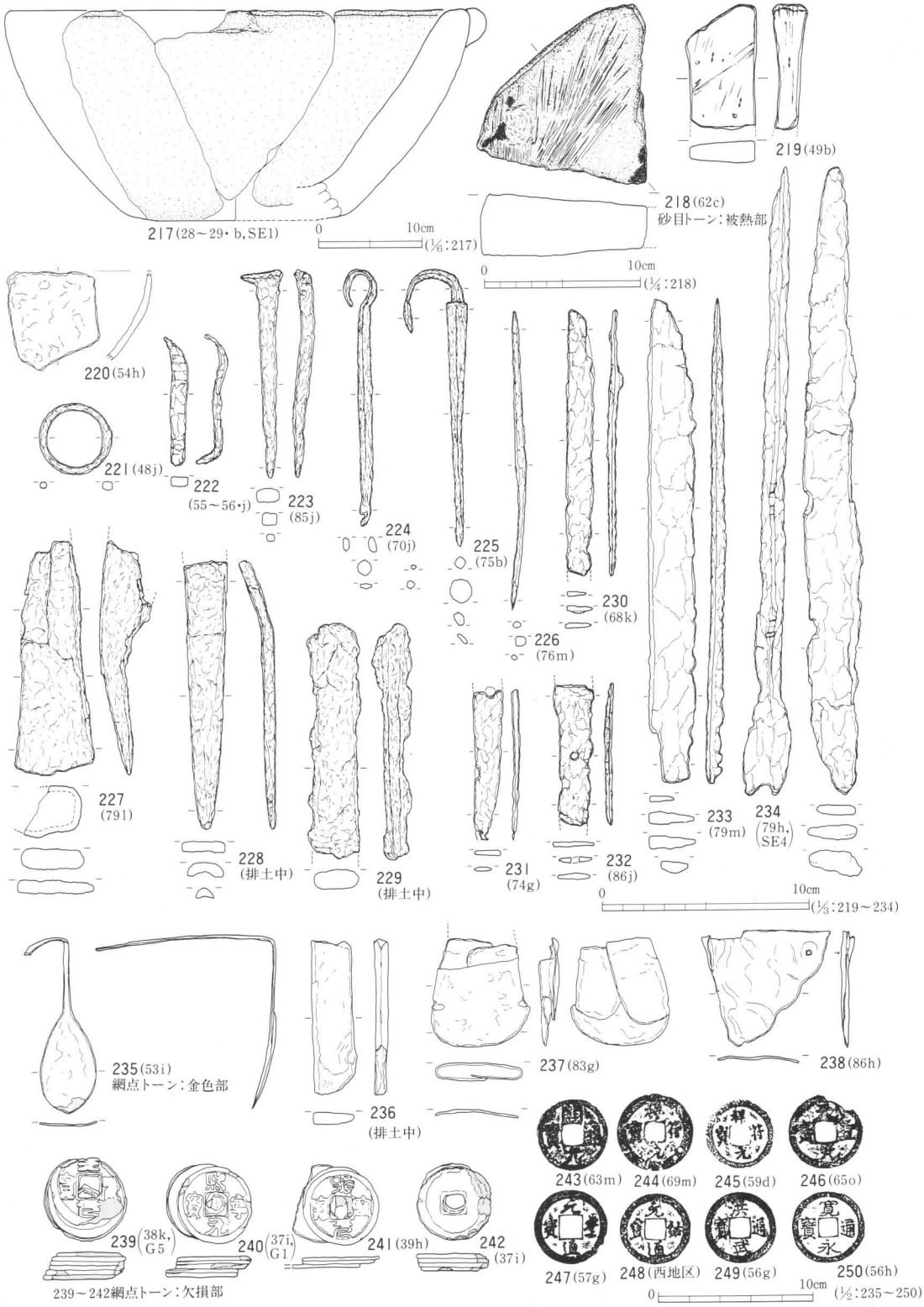


図26. 出土遺物(11)－石製品・鉄製品・銅製品・銭貨－(217～219：石製品、220～234：鉄製品、235～238：銅製品、239～250：銭貨)

のため腐食が著しく、帰属時期の詳細は不明。220は鉢形の製品の一部。221はリング状の製品。222・223は釘の類。222は鎹状に両端を折り曲げている。223は角釘で、上端部をたたき延ばす。224・225は掛け金の類であろう。226は上下端部が尖る火箸。227は下端に刃部を形成し、上半側はソケット状になる。鍬のような鉄製農具と考えられる。228は金工用のタガネか。229は228の上半部破片と考えられる。230～234は刀類である。230～232は刀子（短刀）。230は刃部、231・232は茎部で、目釘穴をもつ。233・234は脇差とみられるもの。233は棟が直線状の刃部形態を示し、棟区が明瞭に残る。234はSE4の覆土上層から出土。大形品の刃部であるが、錆のため詳細は不明。

⑧銅製品（図26，写真15）　5点出土。いずれも中世の所産とみられる。235は手燭形の銅製品。極めて薄く延ばされている。下端部には金箔状の痕跡が残ることから、仏具関係の製品か。236は用途不明の刀状の製品で、上下端とも欠損している。237は薄い銅板を折り曲げて加工した製品。両側縁中央部に切り込み状の孔があく。装身具の金具か。238は扇形に極めて薄く延ばした製品で、表面には衣紋状の凹凸が表現され、右端部には小孔を穿つ。仏像に装着する飾り金具に類似する。

⑨銭貨（図26，写真15）　墓坑及びその周辺から複数密着して出土した銭貨は4点18枚。その他、包含層から出土した銭貨は計13枚。唐銭1枚、北宋銭8枚、明銭1枚、近世の寛永通宝1枚、銭種不明2枚である。

239～242は墓坑およびその周辺から出土した、いわゆる「六道銭」。著しい腐食によって複数密着しているため、分離して銭貨の種類を判別することは困難な状態にある。G5出土の239は6枚組で、上面が天聖元宝（初鋳国・年：北宋・1023年）。G1出土の240は5枚組で、上面が熙寧元宝（北宋・1068年）。SX2の北東部で出土した241は3枚組で、上面が熙寧元宝。G1に近接して出土した242は4枚組で、上下面とも銭貨裏面で種別は不明。いずれも本来は、さしの状態で墓坑に副葬されたものと考えられる。243～250は包含層出土の銭貨で、西地区での出土が多い。243は開元通宝（唐・621年）、244・245は祥符元宝（北宋・1008年）、246は天聖元宝（北宋・1023年）、247は元豊通宝（北宋・1078年）、248は元祐通宝（北宋・1086年）、249は洪武通宝（明・1368年）。250は寛永通宝である。

⑷出土人骨の鑑定（図27）　東地区の墓坑及び西地区の包含層中から人骨が出土した。すべて火葬骨である。人骨出土の墓坑は6基で、特にG4・G7の出土量が多い。また、包含層中からは少量の人骨片が8地点で出土し、主に西地区の東半域に分布していた。墓坑群が削平されて、西地区に流れ込んだ可能性が高い。

①G1墓坑：火葬された人骨で、主な出土部位は、手根骨骨片、指骨骨片である。②G3墓坑：火葬された人骨で、重複する部位はなく、1個体分の骨と思われる。頭蓋冠骨片では縫合部が残存していないが、老人または成人と考えられる。性別が明瞭な部位は残存しないが、上腕骨遠位部は比較的小さく、女性の可能性が高い。主な出土部位は、頭蓋冠骨片2個、肋骨骨片4個、上腕骨遠位部（比較的小さい）、大腿骨中位骨片、中足骨骨片である。③G4墓坑：火葬された人骨及び歯で、歯のエナメル質は消失し、象牙質のみが残存していた。重複する部位の骨及び歯はなく、1個体分の骨及び歯と思われる。頭蓋冠骨片の内板では大部分の縫合が消失しているが、外板では残存している点から、年齢は50～60歳と考えられる。性別が明瞭な部位は残存しないが、側頭骨錐体部が比較的小さく、頭蓋冠骨片が薄く、大腿骨中位骨片の直径が比較的小さい点から、女性の可能性

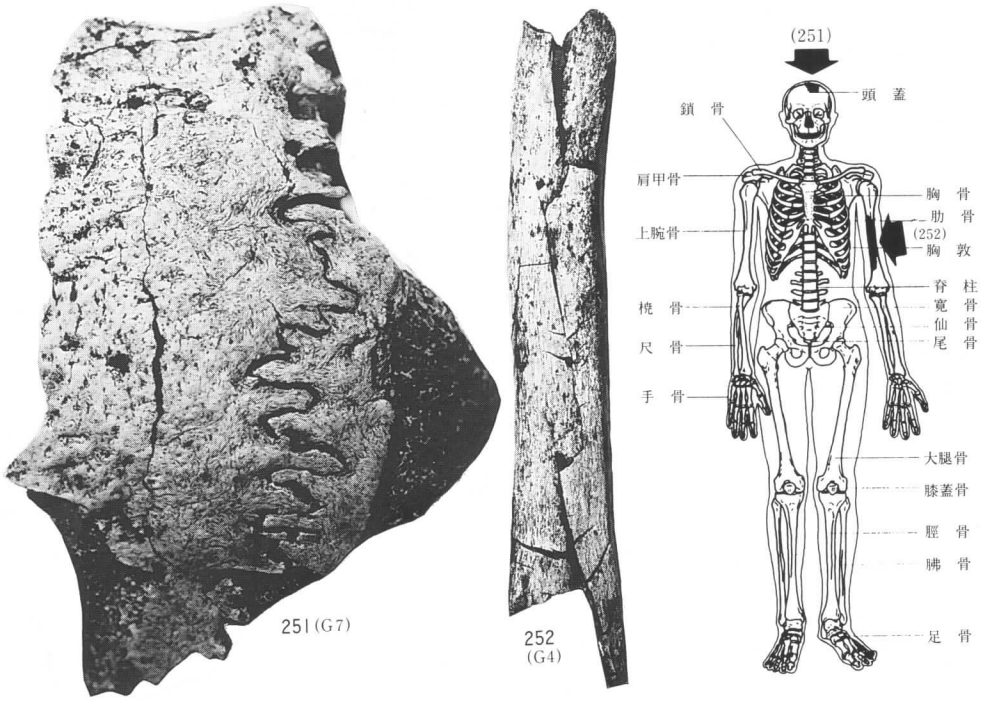


図27．出土遺物⑿―人骨―

が高い。主な出土部位は、上顎左側第2大臼歯、左側側頭骨錐体部（比較的小さい）、頭蓋冠骨片10個（比較的薄く、内板では大部分の縫合が消失しているが、外板では残存）、前頭骨眼窩部骨片、頬骨骨片、鋤骨骨片、肋骨骨片５個、左側上腕骨骨幹部（図27－252）、左側尺骨近位部、尺骨中位骨片２個、大腿骨中位骨片２個（比較的細い）、中足骨骨片、指骨骨片２個である。④G５墓坑：火葬骨片3個。⑤G７墓坑：火葬された人骨及び歯で、歯は歯根のみが残存していた。重複する部位の骨及び歯はなく、１個体分の骨及び歯と思われる。頭蓋冠骨片の内板では大部分の縫合が消失しているが、外板では残存している点から、年齢は50～60歳と考えられる。性別が明瞭な部位は残存しないが、頭蓋冠骨片が比較的厚くて重く、大腿骨中位骨片の直径が比較的大きい点から、男性の可能性が高い。主な出土部位は、上顎左側側切歯、上顎左側第2小臼歯、上顎右側第2大臼歯、頭蓋冠骨片23個（図27－251、比較的厚くて重く、内板では大部分の縫合が消失しているが、外板では残存）、側頭骨骨片、肋骨骨片３個、右側上腕骨遠位部、上腕骨中位骨片２個　左側橈骨骨幹部、右側橈骨骨幹部、尺骨中位骨片、中手骨骨片２個、大腿骨中位骨片７個（比較的太い）、中足骨骨片２個である。⑥G 12墓坑：火葬骨片５個。⑦54ｊ区出土：火葬骨片４個。⑧54ｍ区出土：火葬された人骨で、主な出土部位は、左側下顎骨筋突起（比較的大きい）、橈骨中位骨片である。⑨55ｉ区出土：火葬骨片１個。⑩55ｊ区出土：火葬された人骨で、主な出土部位は、頭蓋冠骨片（内板の縫合が消失し、外板では残存）、肋骨骨片、大腿骨中位骨片である。⑪55ｍ区出土：火葬骨片1個。⑫57ｉ区出土：火葬骨片１個。⑬59ｊ区出土：火葬骨片１個。⑭77ｋ区出土：火葬骨片１個。

Ⅴ　ま　と　め

今回の発掘調査では、縄文時代及び古代・中世・近世に関わる遺構や遺物が出土した。以下、各時代ごとに考察を加えながら、調査成果をまとめてみたい。

1．縄文時代

中期の遺構や遺物を主体とするが、早期及び晩期の遺物も少量出土していることから、早期・中期・晩期の各時期に、断続的に営まれた遺跡と考えられる。

早期　東地区から条痕文系土器の破片が出土し、早期後半に位置づけられる。少量のため、遺構や遺物の広がり等は不明。長岡市域の東山丘陵沿いでは、中期以前の遺跡確認数は極めて少なく、これまで柿町金倉・金場遺跡［長岡市1992］や栖吉町三貫梨遺跡［駒形他1986］から出土した前期の遺物が最古であった。今回の出土資料は時期的にさらに古くさかのぼるものとして注目される。

中期　東地区を中心に縄文時代中期の遺物が多量に出土した。中期の土器群は、前葉～中葉のもので、東北地方南部の大木７ｂ～８ｂ式の段階に相当する。大木７ｂ式段階では、北陸地方新保・新崎式の手法に加え、大木７ｂ式や関東地方の勝坂式などの影響が認められ、さらに８ａ～８ｂ式段階では、北陸・東北・関東など諸地域の要素が融合・在地化し、いわゆる火焔型土器の系統が主流となる。長岡市域の当該期遺跡とほぼ同様の推移が看取されるが、文様手法の上では、同じ東山丘陵沿いに位置する柿町山下遺跡出土土器［長岡市1992］に最も近い様相を示している。また、出土した石器類には、石鏃、石槍、打製石斧、磨製石斧、磨石類など、中期通有の石器器種が認められ、中でも打製石斧の組成率が高いことが特色となっている。

これらの遺物は東地区の平坦部付近に集中し、また当該期に帰属するとみられる土坑やピットも検出されている。確認調査の状況も考慮すると、遺跡の範囲は東地区の平坦部から、さらにその南側の未発掘域にかけて広がっていると推測される。西地区でも少量の分布が確認されているが、おそらくその多くは東地区からの流れ込みと考えられる。今回の調査範囲は、遺跡の広がり全体の一部に限定されているため、詳細は明らかでないが、遺物の出土量や石器器種の構成等からみて、縄文時代中期の中規模な集落跡と評価されよう。なお、周辺の中道遺跡からもほぼ同時期の資料が多量に出土している［長岡市1992，駒形1993］が、時期的には中期後半から後期・晩期の資料が主体的であり、時期差が認められる。

晩期　雲形文を施す１個体分の土器破片が、西地区から出土している。少量のため、遺構や遺物の広がり等は不明。長岡市域では晩期遺跡の確認数は少なく、貴重な存在である。近接する三貫梨遺跡、中道遺跡、大明神遺跡［長岡市1992］でも、ほぼ同時期の資料が出土していることから、栖吉周辺に晩期遺跡が集中している傾向をうかがうことができる。

2．古　　代

９世紀中頃～後半の須恵器破片が数点出土しているが、遺跡の広がりや遺構は不明。平安時代の小規模な集落跡が未発掘域に広がっている可能性もあるが、中世には連続して営まれていない。な

お、松葉遺跡周辺では、栖吉町岩野遺跡や御山町大沢遺跡［長岡市1992］などで、須恵器や土師器が採集されており、平安時代の集落が点在していた状況が推測される。

3．中　　世

遺物の内容と年代観　中世の遺物としては、陶磁器・土器、木製品、石製品、鉄製品、銅製品、銭貨などが出土している。

まず、遺跡の年代の指標となる陶磁器・土器類の様相をみると、舶載陶磁器には青磁、白磁、染付、国産陶磁器・土器には珠洲焼、越前焼、瀬戸美濃焼、瓦質土器、かわらけがある。破片点数では、舶載品16％、国産品84％の構成比を示し、舶載陶磁器の中では青磁、国産陶磁器・土器では珠洲焼が最も多い。ただし、全般的に微細な破片が多いため、個体識別及び器種認定を行なうのは困難であり、例えば日常雑器である、かわらけの出土点数が著しく少ない状況に象徴されるように、構成比に誤差を生じている可能性が高い。陶磁器・土器の製作年代としては、14世紀代から16世紀代のものがあり、概ね15世紀代にかかるものが多い傾向が指摘される。陶磁器・土器の編年からみた遺跡の存続年代は、15世紀代を中心とした14世紀～16世紀の間と考えられよう。

木製品には多種類の生活関連用具があり、漆器、曲物、下駄、櫛、紡輪、箸、杓子、形代などが認められる。木質遺物の出土例が少ない長岡市域では、いずれも貴重な資料となる。その中でも、人形は当時の生活風習を示す呪術関連用具として、また「文明」（1469～1487年）の銘記のある墨書木片は、15世紀後半に遺跡が存在していたことを明確に示す資料として重要である。その他、鉄製品には、工具や農具などの生活用具のほか、刀子や脇差などの刀類があり、武具を保有していた集落であったことがわかる。また銅製品には、仏具とみられるものも認められ、信仰生活の一端を示すものと考えられる。

集落の構成と展開　中世に帰属する遺構としては、東地区の平坦部にピット群、井戸、溝、道跡などがあり、その北西部には墓坑群が位置している。一方、西地区では、西半域を中心にピット群、建物跡、杭跡、土坑、溝などが検出された。また西地区の東半域は、遺構がほとんど認められず、地山上面に礫が露出した状況で、腐食質土壌が堆積していた。レベルもやや低く、南側の丘陵から延びる沢状の湿地地形であったとみられる。現状では、堀や大規模な溝で集落を画している状況はうかがえない。

これらの状況を総合すると、当時の集落は中央部に小規模な沢あるいは湿地帯を介在させて、その東西に建物跡、井戸、土坑、溝などからなる居住域を形成し、東部の北側縁辺に墓域を設けた構成であろう。東西の居住域は、さらに南側の未発掘域にも続いており、東西の居住域が連結していたか、あるいは形成時期の差異を示していることも考えられる。

なお、遺跡南側に接する低丘陵先端部には、空掘状の断切りや帯郭状の段が観察される地点がある。丘陵の頂部付近は、すでに牧草地として削平されているため遺構は不明瞭であるが、集落の背後に砦的な施設が存在していたことも推測される。大行寺遺跡の東側（市営スキー場北側）丘陵上には、南北朝時代の構築とみられる新田山砦跡［長岡市1992］も確認されており、戦国時代以前の山城関連施設についても考慮する必要があろう。

集落の性格　居住域とともに墓域が形成されていることから、松葉遺跡は一つの村としての体裁

を備えているといえる。しかし、近接する三貫梨遺跡と比較した場合、その内容には差異が認められ、必ずしも同質の存在ではない。同遺跡では、東西約86mの間隔で堀を設け、その内部に桁行7間×梁間3間の大形建物跡や多数の柱穴群が検出されている。またその西側には、80基に及ぶ墓坑群を形成する。その出土遺物からは、15世紀代を中心とし、松葉とほぼ同時期に営まれていたと考えられるが、2×2間程度の建物跡のある松葉に比較して、かなり大規模な集落を展開しているといえる。

集落規模や遺物からみて、三貫梨は「15世紀段階の寺院に近い性格をもつ屋敷跡」[駒形1987]で、栖吉周辺では政治・経済・宗教の中核的な存在と評価できる。居館及び寺院的な性格を帯びる三貫梨に対し、松葉は当時の一般的な集落の姿を示しているのであろう。この集落形態の差異は、在地領主層＝三貫梨、農民層＝松葉といった階層的な様相を反映している可能性が高い。ただし、松葉出土の遺物には、舶載陶磁器類、武具である刀類、宗教関連の銅製品などがあり、階層的には有力な上層農民が想定される。その他、周辺の中道遺跡、大明神遺跡、大行寺遺跡でもほぼ同時期の遺物が認められることから、松葉を含むそれら栖吉川流域の集落は、三貫梨を中心とした連合的なつながりをもっていたのではないか。

墓域の内容と評価　松葉遺跡の墓坑群の中では、人骨が出土したものすべてが火葬骨であった。その状況から、墓坑の約半数は火葬骨を埋納したものと推測される。三貫梨遺跡の場合、報告［駒形他1986］では墓坑の多くを土葬墓と考えているが、人骨の残存状況から再区分すると、土葬骨（生骨）が出土したもの21基、火葬骨が出土したもの15基、骨が出土しなかったもの47基となり、必ずしも土葬墓が主流という状況ではない。また従来、三貫梨で土葬墓とされた墓坑の形態を、松葉の火葬骨出土墓坑と比較してみると、特に著しい差異は認められない。したがって、松葉や三貫梨周辺の風習として、2種類の埋葬形態が共存していたことは明らかであるが、現状では土葬と火葬のどちらが主流か判断することは難しく、その埋葬の差が何を意味しているかも不明といわざるを得ない。

三貫梨の墓域の評価については、高波保と志度野岐荘との領域境界を問題視し、「惣墓」的な性格を帯びるもので、栖吉川をその境界ととらえている［駒形他1986］。しかし、水田経営を基盤とする集落立地からみて、松葉と三貫梨が別領域の対峙した関係にあるとは考えにくい。松葉にも墓域が形成されていることから、三貫梨の墓域は、周辺域を統合する共同墓地としての「惣墓」というより、むしろ三貫梨自体の居住域に付随するものと考えた方が妥当であろう。現状では、松葉と三貫梨は互いに独立した集落ではあるが、両者ともに高波保の領域に帰属していたと考えたい。松葉の位置する栖吉川左岸域一帯も「栖吉」＝高波保の領域に属し、そのさらに南側の鉢伏の丘陵付近が志度野岐荘との境界に相当していたのであろう。

栖吉周辺の歴史的経緯と松葉　文献史料にみる栖吉関連の動向を表4に示した。栖吉の地名が初めて登場するのは「越後国頼蔵等引檀那願文案」で、「越後国東古志郡すよし条けいうん庵」の名がみえることから、14世紀末の栖吉の地に、すでに集落が形成されていたことがうかがえる。その後、普済寺関連の記事が多くみられるが、応永18年の「越後普済寺雲光院領寄進状」によれば、15世紀初めには普済寺はいくつかの塔頭をもち、所領の寄進を受ける有力寺院であった。さらに普済寺を中心に栖吉周辺は繁栄したとみられ、15世紀後半、文明末年（1483～87年）の「古志郡検地帳」

表３．中世の栖吉の動向

年代	〈年号：和暦(年月日)〉	〈主な動向〉	〈松葉〉
1300	42～50：康永～貞和年間	栖吉の普済寺は臨済宗で格式は諸山、住職は別伝妙胤、と伝える［79～81］	
	98：応永５．10．８	「東古志郡すよし条けいうん庵りゑん」が熊野大社に願文を納める［107］	
1400	11：応永18．７．10	某氏、普済寺塔頭雲光院に浦瀬の地を寄進［116］	
	29：正長２．６．23	熊野大社の旦那に「(高波保) 上条栖吉住道久」あり［126］	
	61：寛正２．７．13	普済寺の住職に令誉が任命される。［152］	
	64：寛正５．７．26	普済寺の住職に梵什が任命される［154］	
	83～87：文明15～19	古志長尾孝景、古志郡内の公領・私領について検地帳を作成、栖吉の領地も記載される［164］	＊松葉遺跡出土墨書木片「文明」→
	86：文明18．３．15	普済寺、一時住職不在で断絶［165］	
	88：長亨２．12．14	普済寺の住職に玄頤が任命される［173］	
	92：延徳４．３．20	守護上杉房定、従来どおり普済寺を上杉氏の祈願所とし、諏訪神社領を代官に渡すよう、古志長尾孝景に命じた［185］	
	95：明応４．12．26	長尾孝景、隠居し家督を房景に譲る［191･192］	
1500	04：永正元．８．16	古志長尾房景、栖吉の普済寺領について、上杉房定夫人や守護代長尾能景らと協議［206］	
	04：永正元．９．27	長尾房景、長尾能景から普済寺領の支配と寺院の修理を命じられる［208］	
	05：永正２．４．７	蔵主某、栖吉の領地を長尾房景に引き渡す［209］	
	31：享禄４．１	古志長尾景信、為景と協定［323］	
	33：天文２	普済寺中興、臨済宗から曹洞宗に改宗、開祖長翁昌宗、と伝える［327～329］	
	62：永禄５．５．３	河田長親、豊前守となり栖吉領をつぐ［379～381］	
	78：天正６．５	謙信の死後、跡目をめぐり御館の乱おこる［425･426］	
	78：天正６．６．11	長尾景信、上杉景虎方について転戦し、頸城の居田浜で戦死［427～430］	
	78：天正６．７．５	河田長親、上杉景勝の求めで忠誠を誓う［432］	
	79：天正７．３．24	上杉景虎戦死、栖吉城ほか中越の景虎方なおも抵抗を続ける［439］。その後、栖吉城は落城	
	80：天正８．６	御館の乱おわる［452･453］	
	80：天正８．８．20	上杉景勝に敵対した栖吉衆の領地没収・再編はじまる［455］	
	81：天正９．３	河田長親、越中松倉城で病死［460］	
	82：天正10．２．14	河田岩鶴丸、栖吉衆の領地再編はじめる［474］	
	94：文禄３	「定納員数目録」に栖吉衆・蔵王堂衆が登録［517］	
1600	98：慶長３．１．10	上杉景勝、会津へ国替え	

＊『長岡市史』資料編２古代・中世・近世一の「古代・中世」編にもとづき作成。［　］内の番号は、同資料編の資料番号と対応する。

には、普済寺及びその塔頭、在地領主とみられる千坂対馬守被官金原新右兵衛分などの広大な領地が記載された。普済寺は「初メ天台宗大行寺ト号シ、字三貫ニ在リ、天文二年金原大膳中興シテ、当宗ニ改メ、長翁ヲ中興開山トス、同五年当地ニ移ス」［長岡市1989］と伝え、由緒や遺跡の状況から、その旧所在地は三貫梨遺跡付近にあった可能性が高い。おそらく、14世紀代から15世紀代までは、栖吉川沿いの肥沃な扇状地を利用した水田耕作の経済基盤をもち、栖吉川流域の要所に集落が散村的に展開していたと考えられる。三貫梨を中心として、松葉、中道、大明神、大行寺などの遺跡がそれらの集落跡に相当しよう。

しかし、15世紀後半には、普済寺の住職が一時断絶するとともに、古志長尾氏の勢力が徐々に浸透して、すでに政治的な状況は揺るぎはじめていたとみられる。16世紀初頭に至っては、古志郡司長尾房景が普済寺領を支配することになる（永正元：1504年、「長尾能景書状」）。おそらく、15世紀末～16世紀初頭にかけて、古志長尾氏は栖吉周辺での勢力を確立、拠点の比重を蔵王堂から栖吉に移したのであろう。この動向を反映して、栖吉川沿いの集落は衰退し、栖吉城の麓付近に大規模な城下集落（現在の集落に近い範囲）を形成していくことになる。普済寺も16世紀前半（天文2:1533年）に至って、栖吉城下の現在地に中興開山している。16世紀以降、上杉氏の国替え（慶長3:1598年）までは、松葉や三貫梨など栖吉川流域の集落域は、恒常的な集落としての機能は失われ、耕

地の維持・管理を主として、断続的に利用されたと推測される。特に16世紀後半には、河田長親が豊前守として栖吉領を継ぎ、古志衆と栖吉衆が分裂、さらに御館の乱による栖吉城落城、その後の栖吉衆の領地再編など、急激な社会の変動のなかで、不安定な情勢下にあったのではないか。

4．近　　世

17世紀代の唐津焼、幕末頃の肥前系陶磁器片、寛永通宝などが出土しているが、集落を形成していた状況にはない。松葉周辺域は17世紀以降、単に水田や畑などの耕作地として利用され、陶磁器類も農作業に伴って搬入されたものであろう。近世期の栖吉周辺は長岡藩領となるが、中世末に形成された城下集落の景観をほぼ引き継いだかたちで、集落が営まれていたと考えられる。

引　用・参　考　文　献

遠藤孝司　1991年　「馬場屋敷遺跡」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』　北陸中世土器研究会

木津博明　1989年　「上野国に於ける在地生産土器に就いて－上野国分僧寺・尼寺中間地域を中心にして－」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会

駒形敏朗・小林義廣他　1986年　『三貫梨遺跡－第1次発掘調査－』　長岡市教育委員会

駒形敏朗　1987年　『三貫梨遺跡－第2次発掘調査－』　長岡市教育委員会

駒形敏朗　1992年　『長岡市内遺跡発掘調査報告書－石動地区・南原遺跡・栖吉地区－』　長岡市教育委員会

駒形敏朗　1993年　『長岡市内遺跡発掘調査報告書－日越地区・栖吉地区・中沢地区－』　長岡市教育委員会

鶴巻康志　1991年　「堀越館跡」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』　北陸中世土器研究会

長 岡 市　1989年　『長岡のお寺とお堂－明治16年寺院・仏堂明細帳－』（長岡市史双書No.３）

長 岡 市　1990年　『長岡のお宮－明治16年神社明細帳－』（長岡市史双書No.９）

立教大学日本中世史研究会　1991年　「栖吉の里に中世を求めて」『長岡市史研究』第２号

長 岡 市　1992年　『長岡市史』資料編１考古

長 岡 市　1993年　『長岡市史』資料編２古代・中世・近世一

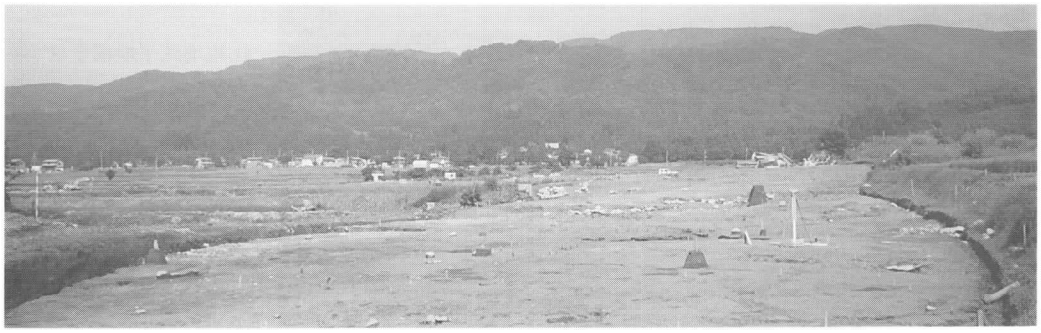
楢崎彰一・田中照久　1986年　『開館15周年記念―越前名陶展―』福井県陶芸館

深井哲也　1988年　「下稲場遺跡」『FIELD NOTE』第５号　新潟大学考古学研究部

吉岡康暢　1994年　「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

写真１．遺跡の景観と発掘状況

①遺跡の遠景（北西側から）



②遺跡の近景（西側から）

③発掘作業状況（東地区平坦部、南東側から）

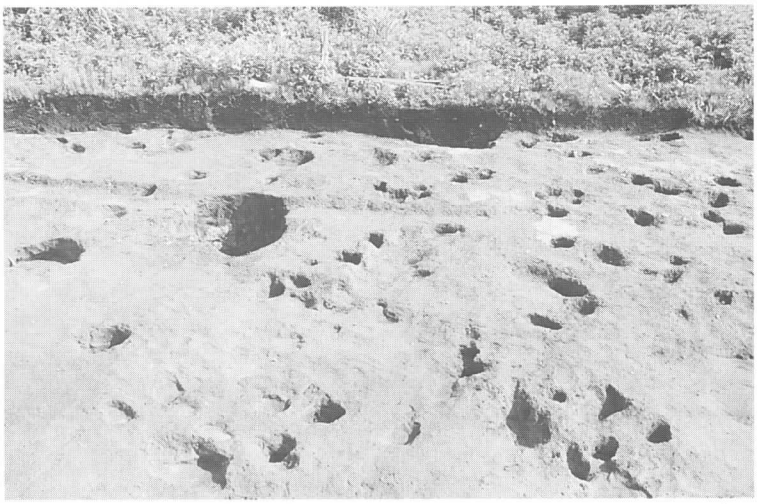
④表土除去作業状況（西地区、南東側から）

⑤発掘作業状況（西地区東部、南東側から）

⑥西地区の土層（50ライン断面、西側から）

写真２．東地区の完掘状況

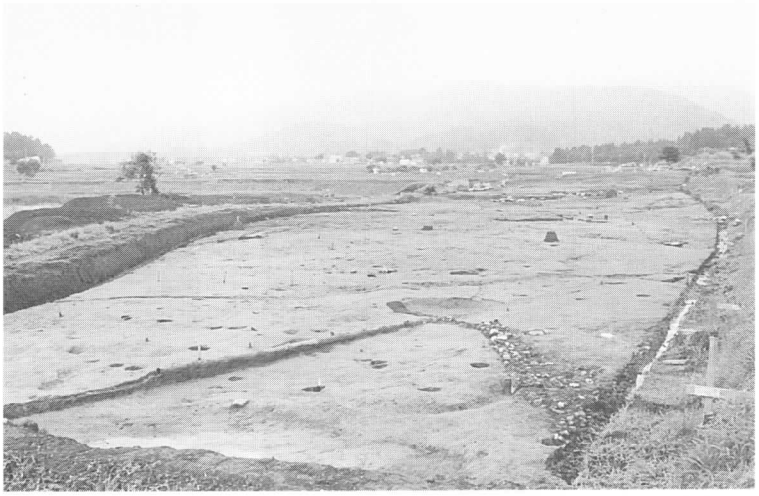
①東地区平坦部全景
（東側から）



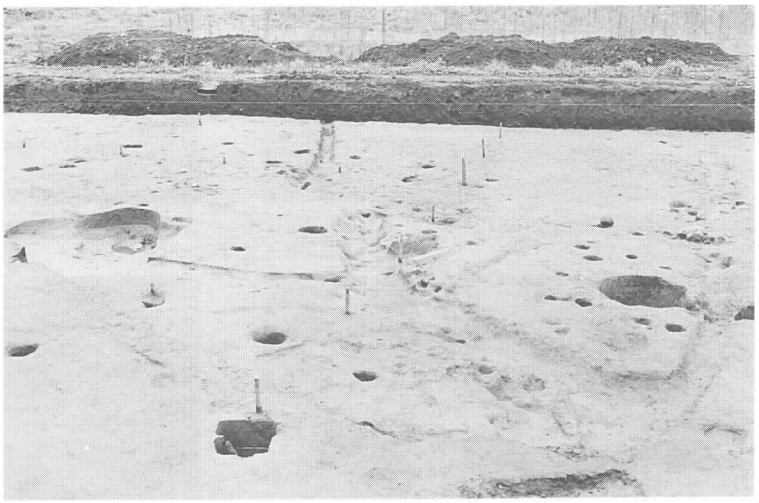
②東地区平坦部中央
30a杭付近（SK４・
SE１他、北側から）

③東地区北西部墓坑
群全景（G１～G17・
SX４他、北西側から）

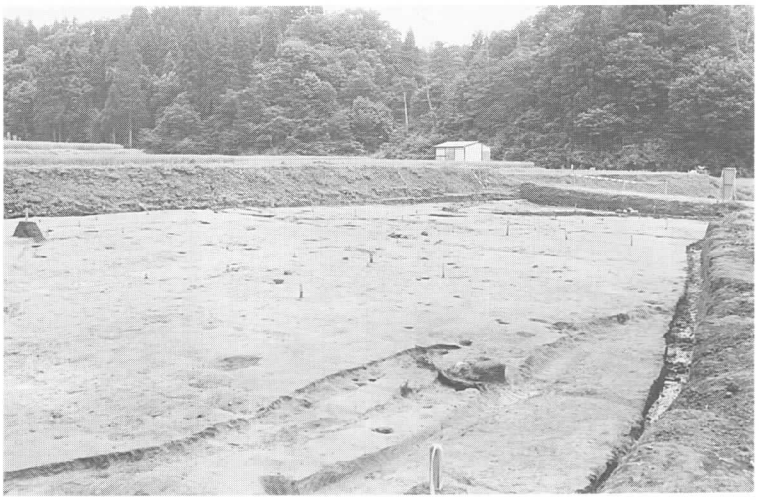
写真３．西地区の完掘状況



①西地区全景
（西側から）

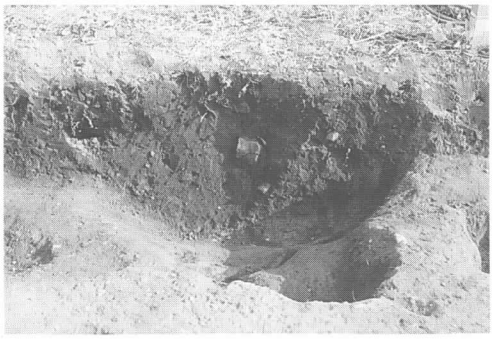


②西地区80ライン付近
（SB１・SK１・SD６・SE４他、南側から）



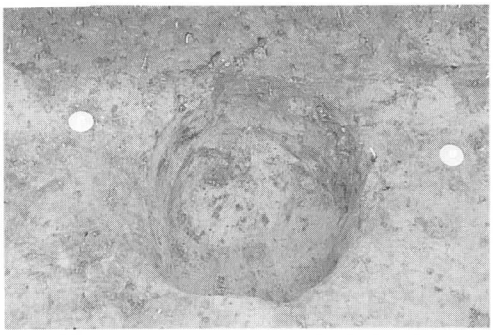
③西地区西半部
（SD11・SD12他、北東側から）

写真４．東地区の遺構



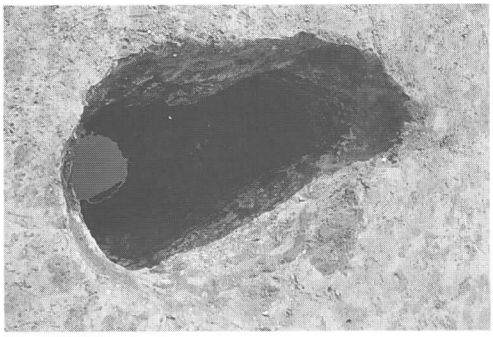
①SK１断面（北側から）

②SK５完掘状況（北東側から）

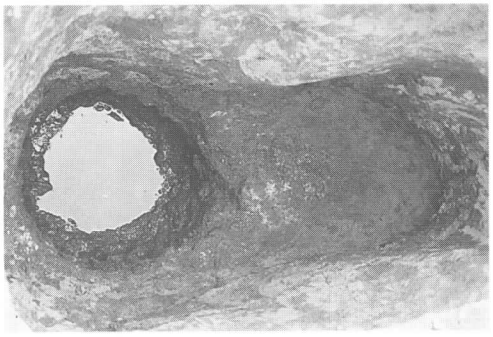


③P６完掘状況（北側から）

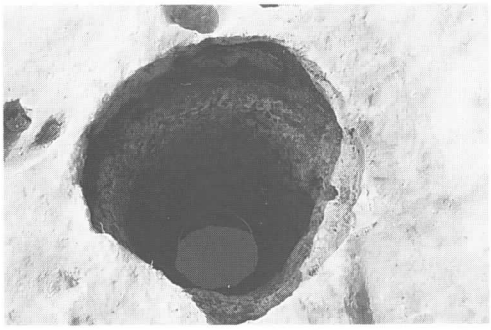
④P12完掘状況（北側から）



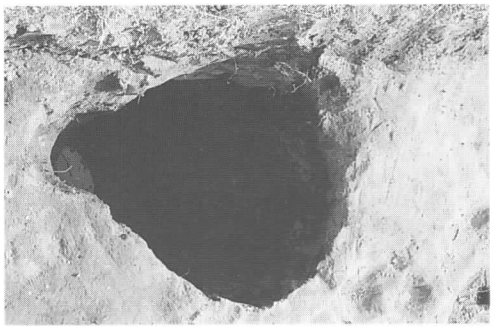
⑤SE１完掘状況（東側から）



⑥SE１底面部（東側から）

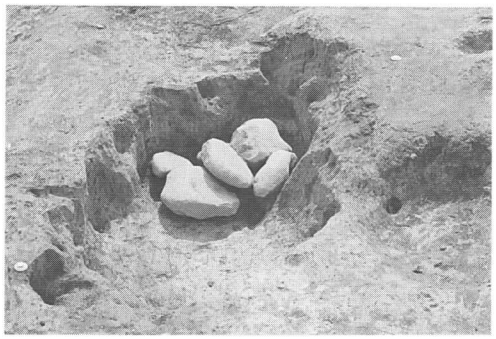


⑦SE２完掘状況（北側から）



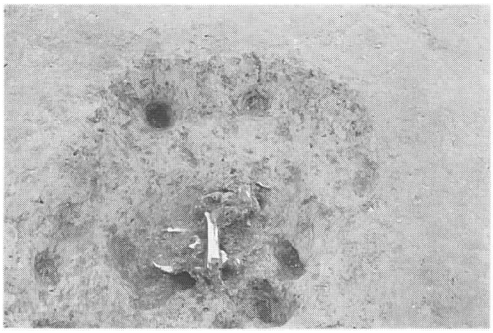
⑧SE３完掘状況（南側から）

写真５．東地区の遺構（墓坑）



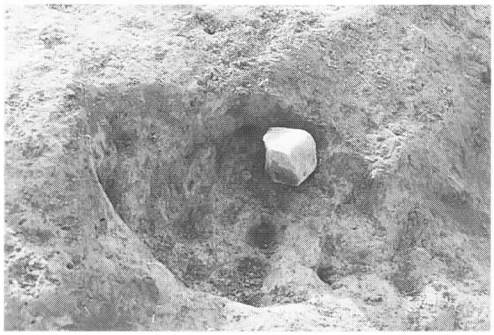
①G１・G２完掘状況（西側から）

②G３完掘状況（北側から）

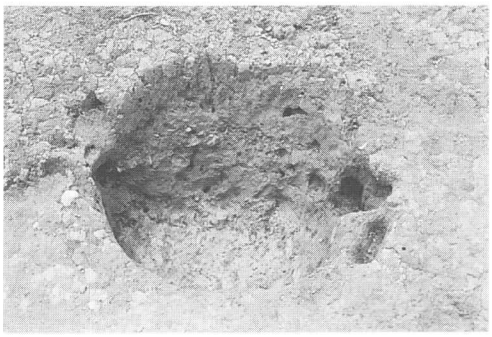


③G４人骨出土状況（北東側から）

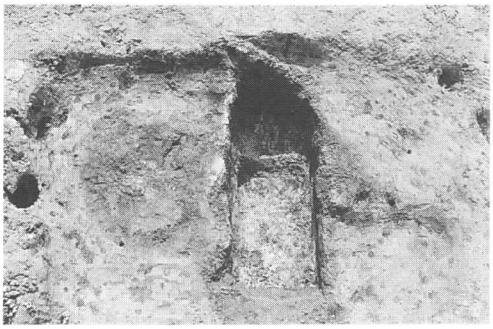
④G４完掘状況（北東側から）



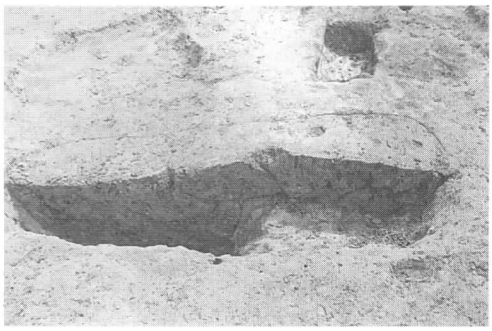
⑤G５完掘状況（底面に銭貨、遺物No.239、東側から）



⑥G６完掘状況（東側から）

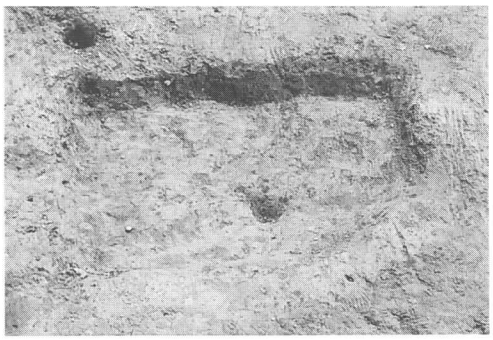


⑦G７完掘状況（底面に焼成痕、東側から）

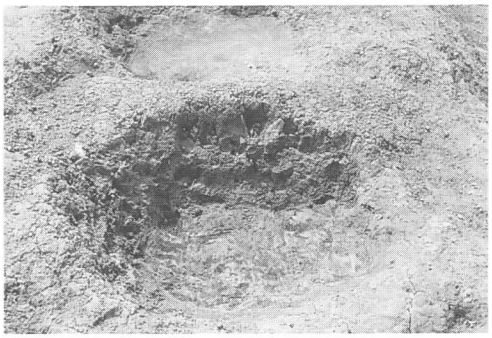


⑧G８断面（西側から）

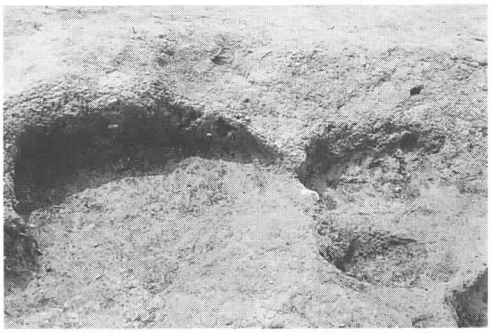
写真６．東地区の遺構（墓坑）



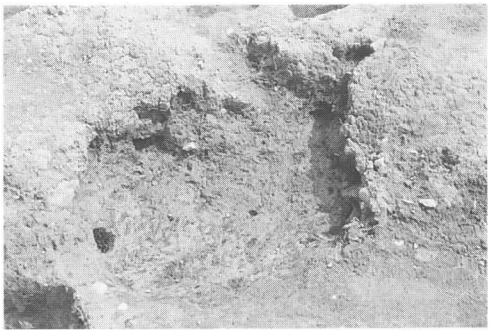
①G９完掘状況（北東側から）



②G10完掘状況（東側から）



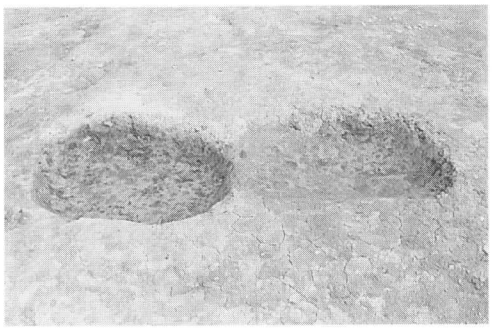
③G11・G12完掘状況（東側から）



④G13完掘状況（北側から）

⑤G14完掘状況（北側から）

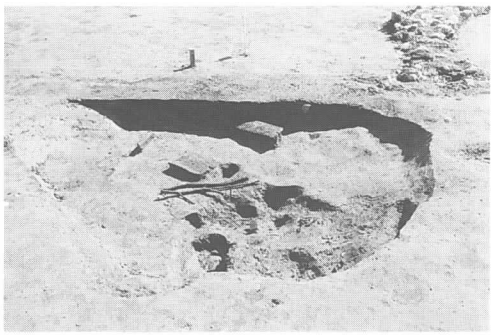
⑥G１５完掘状況（北西側から）



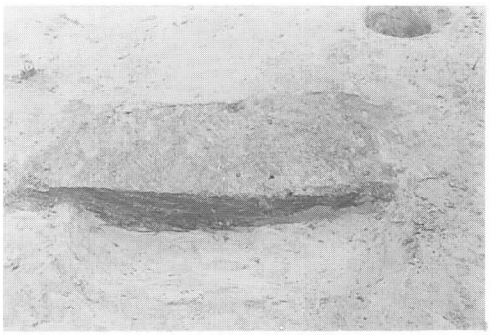
⑦G16・G17完掘状況（北西側から）

⑧SX３半截状況（西側から）

写真７．西地区の遺構

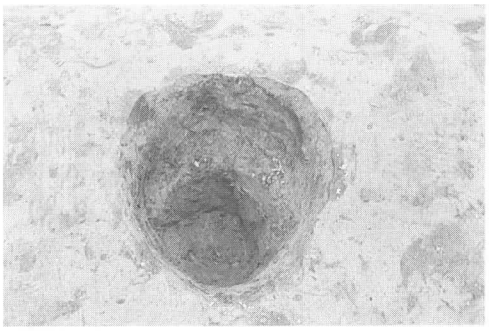


①SK１・SK３完掘状況（底面に木製品、北側から）

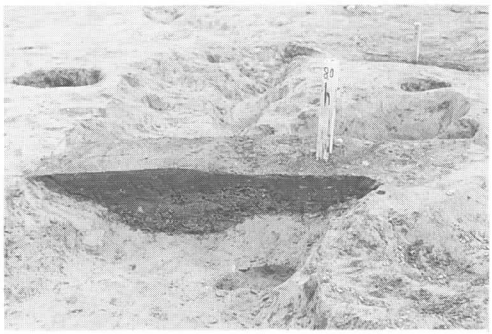


②SK２半截状況（北側から）

③SE４完掘状況（西側から）

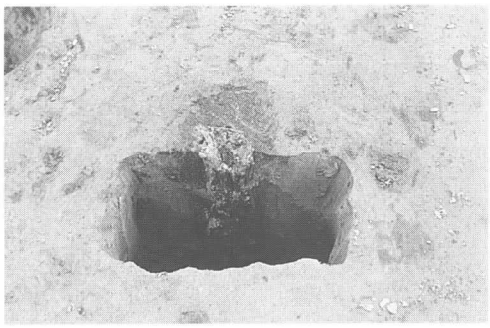


④P105完掘状況（西側から）



⑤SD６断面（80h区付近、南側から）

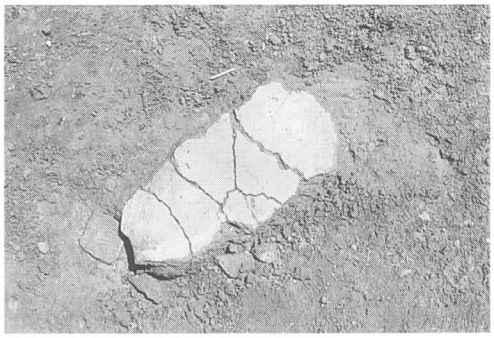
⑥SD８断面（75f区付近、南側から）



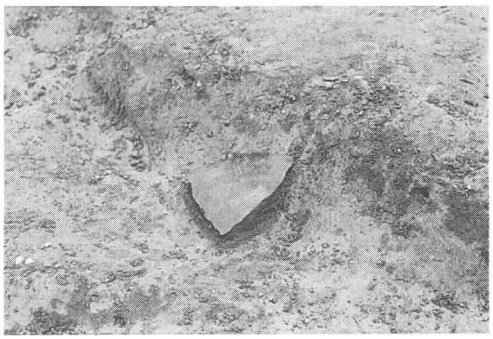
⑦K102断面（東側から）

⑧K256検出状況（遺物No256、東側から）

写真８．遺物の出土状況

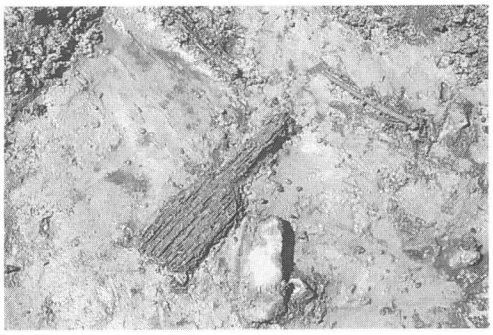


①縄文土器出土状況（25b区、北側から）



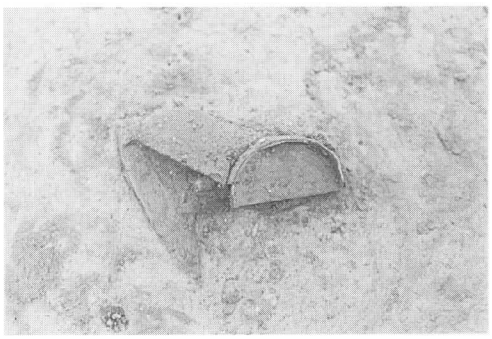
②珠洲焼出土状況（SD６、遺物No.51、西側から）

③下駄出土状況（66j区、遺物No.191、北側から）

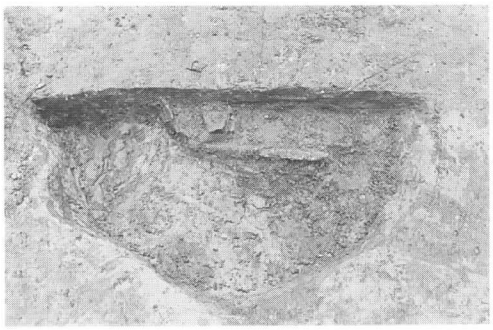


④杓子・箸出土状況（52d区、遺物No.198・204、西側から）

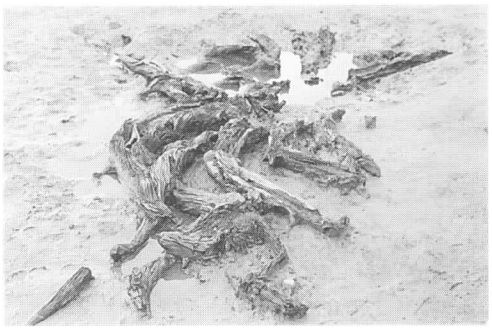
⑤人形出土状況（65i区、遺物No.205、東側から）



⑥曲物出土状況（76e区、遺物No.195、東側から）



⑦刀子出土状況（SE４、遺物No.234、北側から）



⑧自然木出土状況（63i区付近、南側から）

写真９．出土遺物（１～44）　　（1/3）

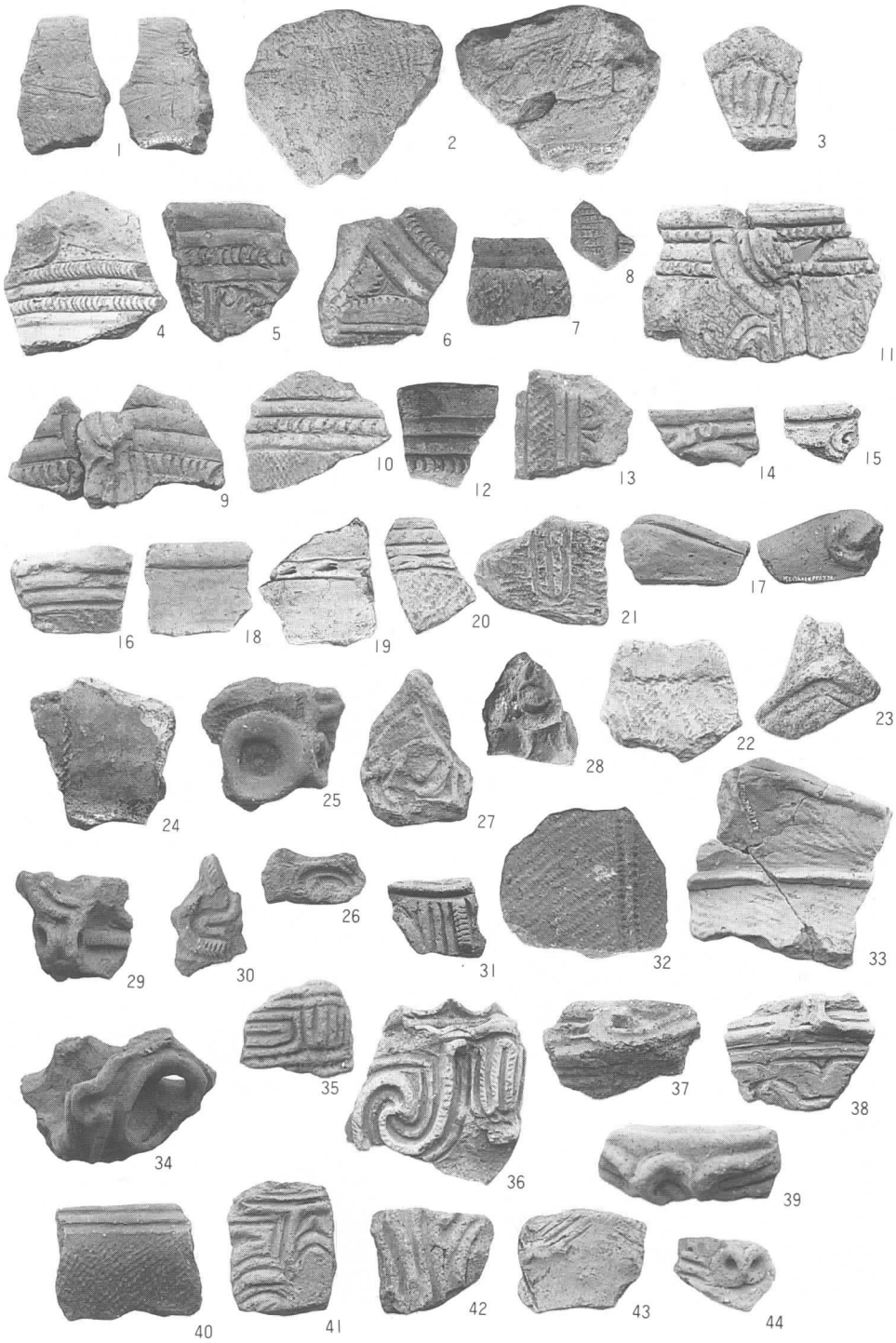


写真10．出土遺物（45～79）

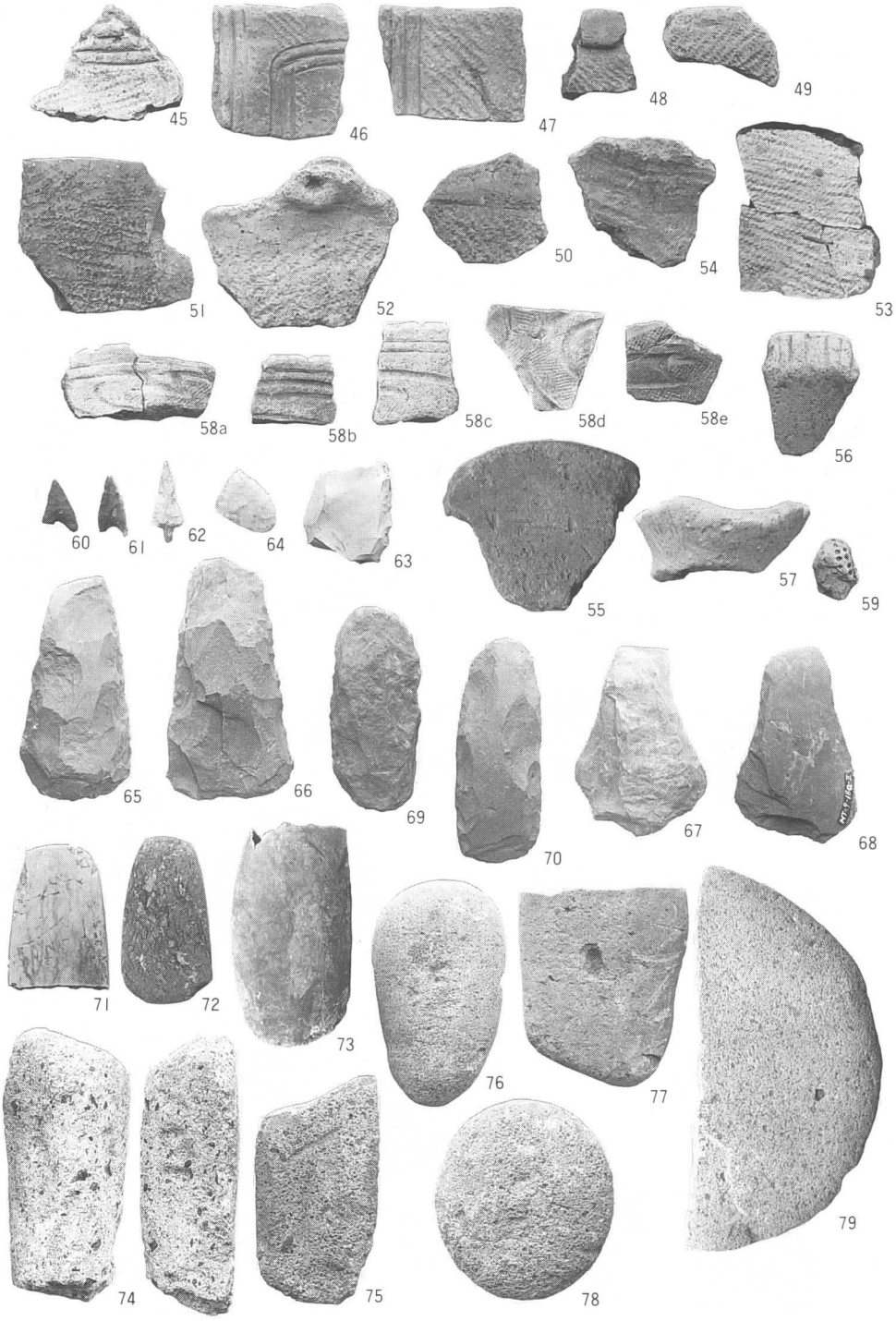


写真11．出土遺物（80～112、146～156）

（1/3）

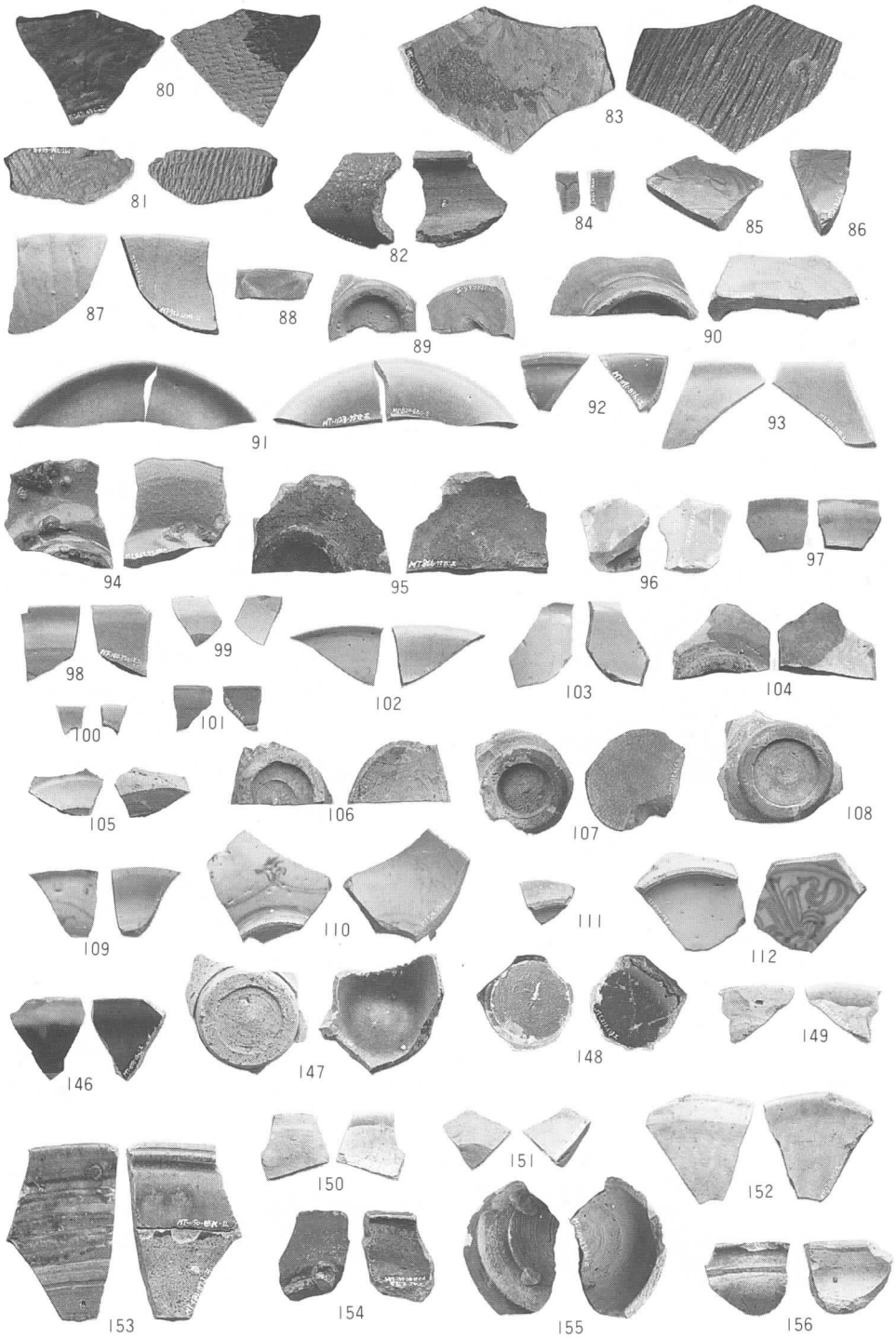


写真12. 出土遺物（113～145）

（1/4）

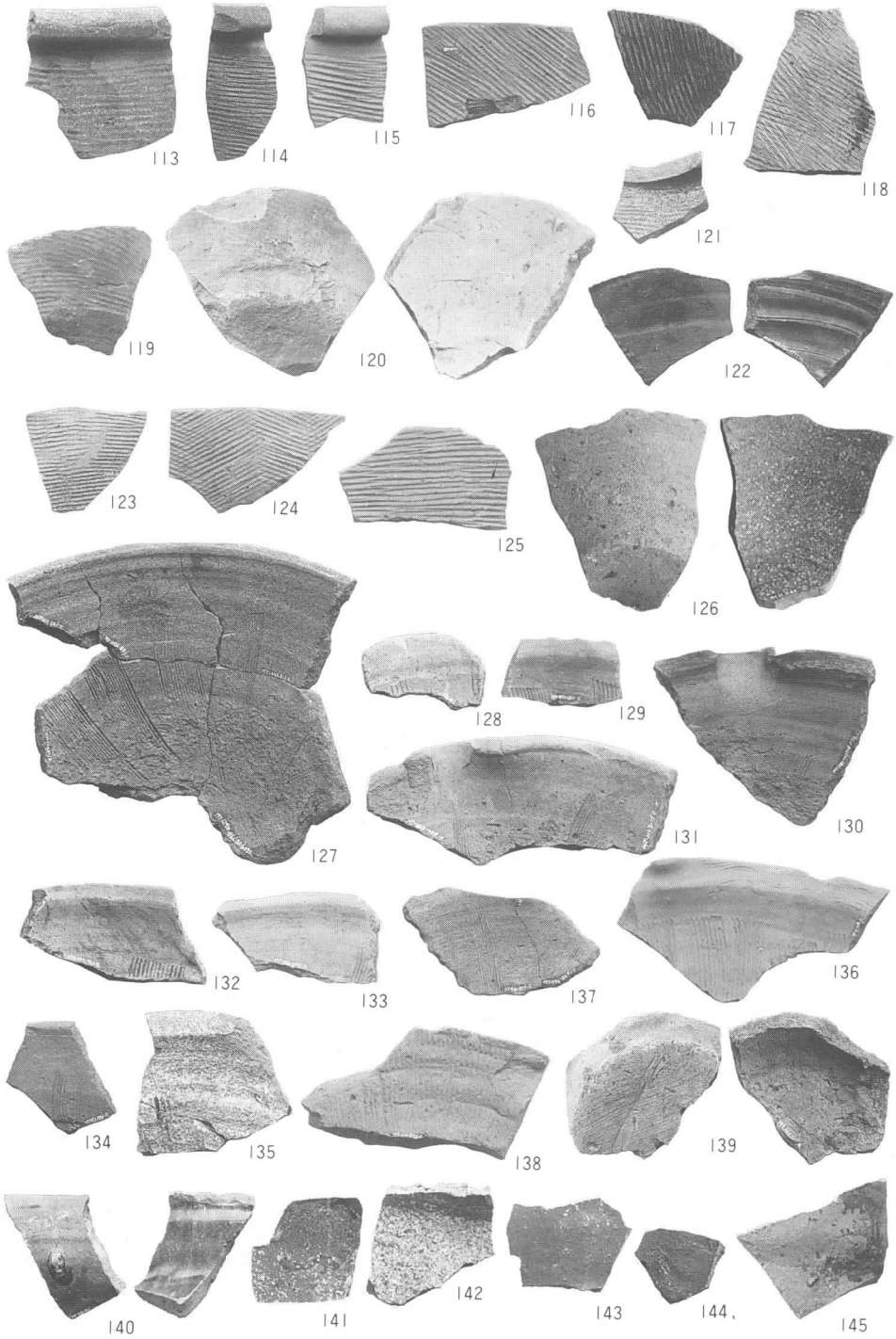


写真13. 出土遺物（157～184）

（1/3）

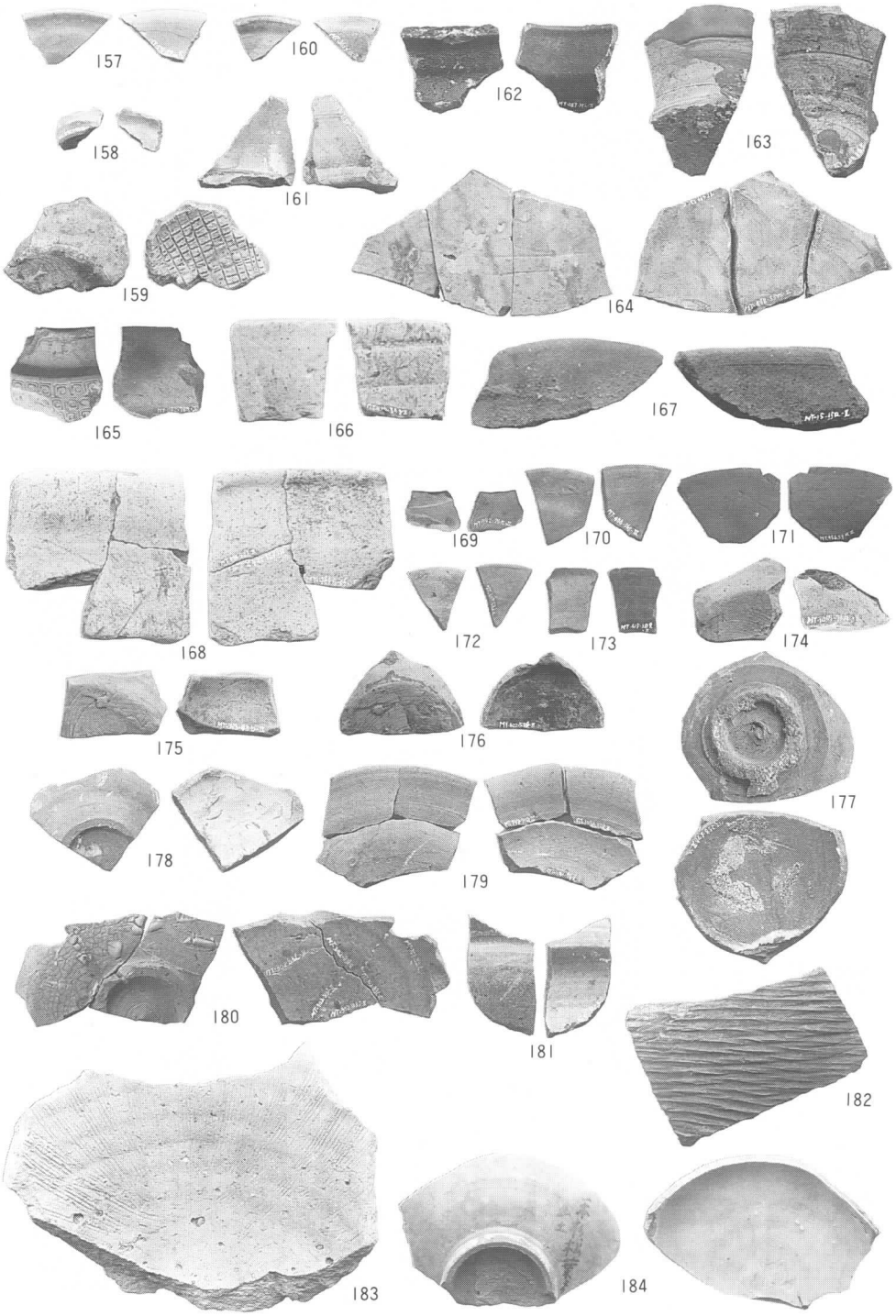


写真14．出土遺物（185～204）　（1/3）

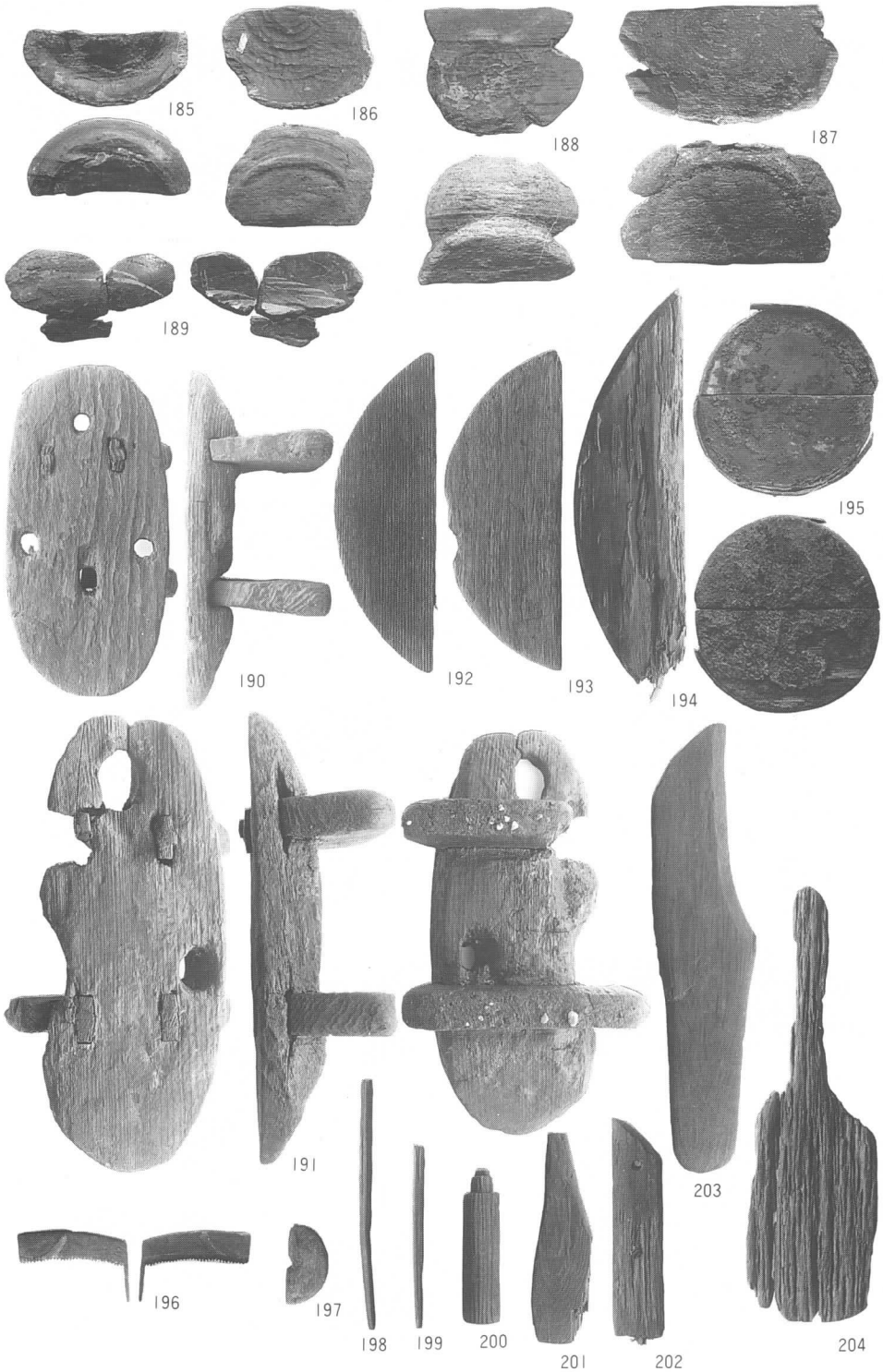


写真15．出土遺物（205～250）

（1/3）

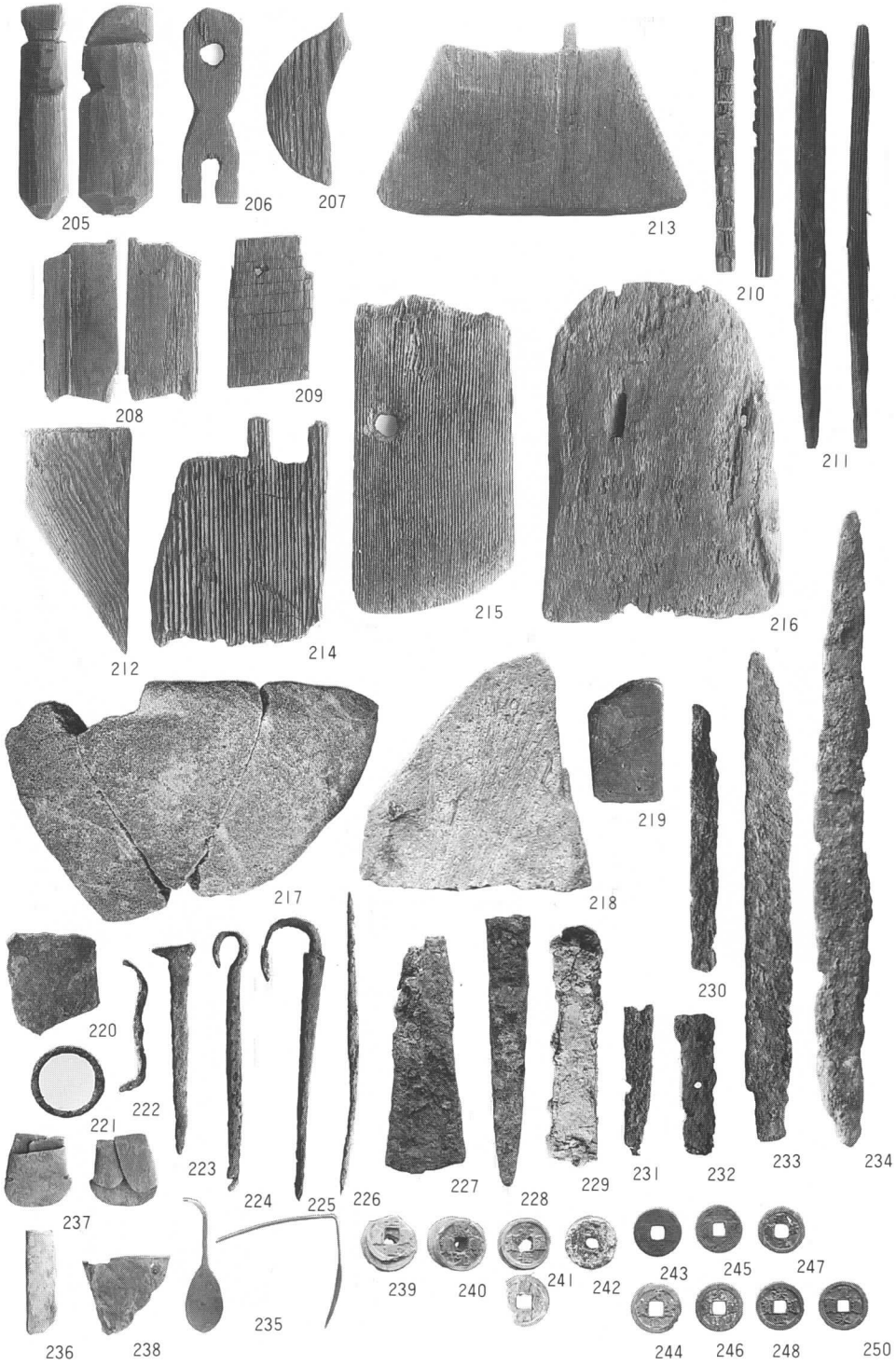
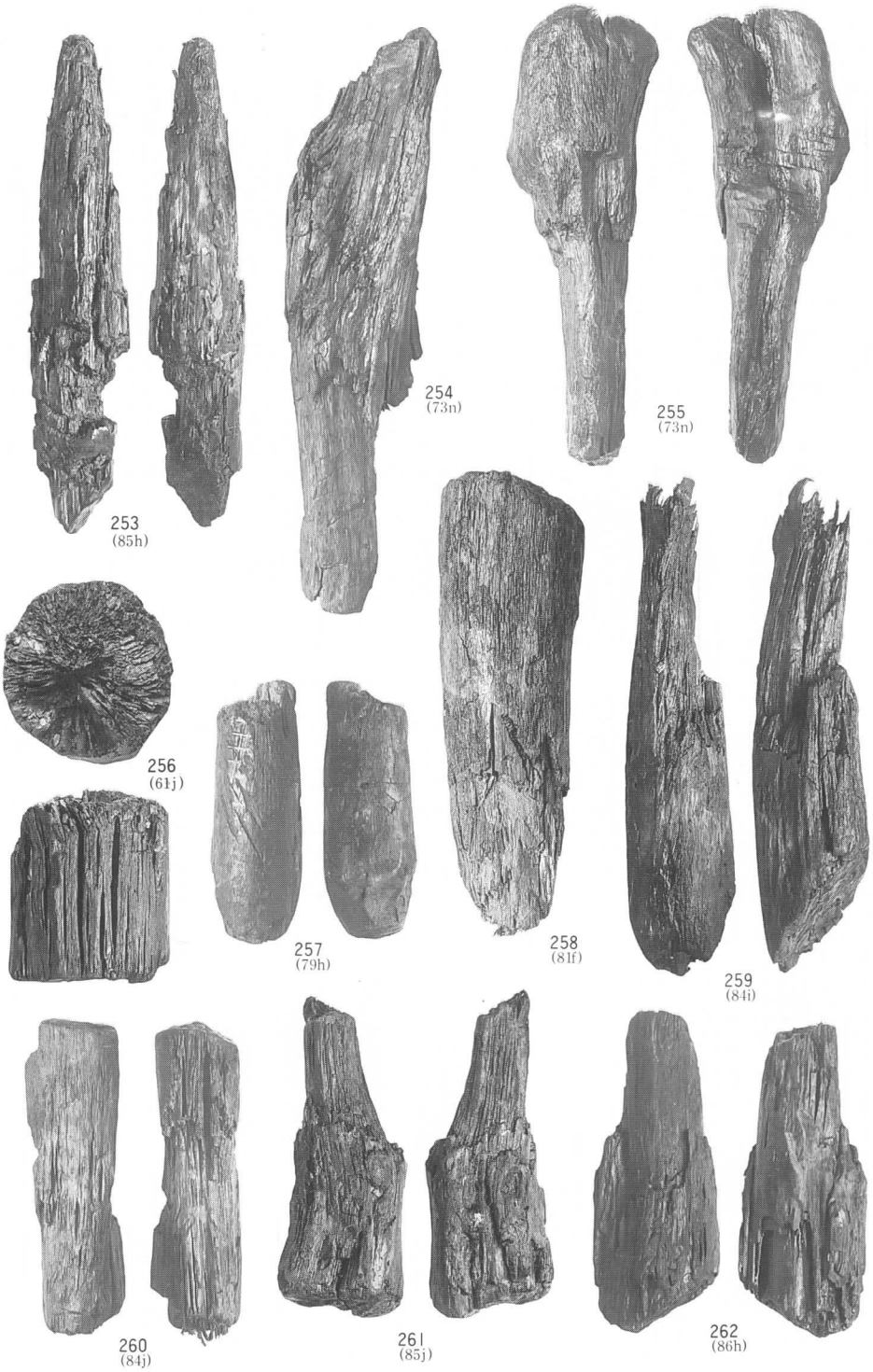


写真16. 出土遺物（253～262）



松 葉 遺 跡

－中山間地域農村活性化総合
整備事業に伴う発掘調査－

1994年3月31日印刷
1994年3月31日発行

発行：長岡市教育委員会
（新潟県長岡市幸町2丁目1番1号）

印刷：北越印刷株式会社
（新潟県長岡市福住1丁目6番27号）